

III. V-5区の調査

1. 調査の概要

V-5区は一部宅地であるが、大部分が畠地であった。そのため全体に遺構の残存状態は良好といつてよいものの、畠地開墾によって遺構の深度が非常に浅くなつた例が数多くあつた。調査区内北西部に2ヶ所のゴミ穴が掘削されていて、北端の里道として利用されている付近にも家屋廃材が埋め込まれていた。また、北東部には今回の東九州自動車道建設に伴つて共同墓地移転地として埋め立てられた小さな溜池があつて、調査区境付近では溜池の縁に当たると思われる段落ちが認められた。舗装された道路まで数mを残して、この落ち込みを検出した付近で表土掘削を止めたものの、3区の報告をみるとこれは自然地形ではなく大型の溝（3区6号溝）であったようである。

さて、検出した遺構は延永ヤヨミ園遺跡の他の調査地点同様、弥生時代末から古墳時代前期にかけて及び6世紀を中心とする多数の竪穴住居跡等、古代及び中世の溝を主体とする。最も新しいものは畠耕作に伴う溝で、略南北方向に並行して走る大小複数が掘削されていたが、これについては説明を略する。

また、今回出土の遺物のうち、土師器（弥生土器）は異様に器表の残存状態が悪い。「荒れる」というものではなく、ほとんど「剥離」した状態である。説明を略するため、図面に調整痕の表示がない場合は「剥離」として了解いただきたい。

2. 竪穴住居跡

調査区南半部では特に住居跡が稠密に検出された。先後関係がなかなか把握できず、少しずつ掘り下げる結果、壁が不明になつてしまつたもの、別の遺構番号を付したが最終的には同一の遺構となつたものなどがある。住居跡の遺構番号が一部で混乱してしまつたが、一覧表（表2）を付したので参照されたい。

1号竪穴住居跡（図版14、第30図）

調査区の北西端付近にあって、北辺を1号溝に切られる。深さは最大で0.1m弱と非常に残りが悪く、東辺も検出できなかつた。南西隅で計測すると主柱穴は各辺から1.3mの位置にあって、主柱穴間が約2mであることから、辺長は4.6mほどに復元できよう。

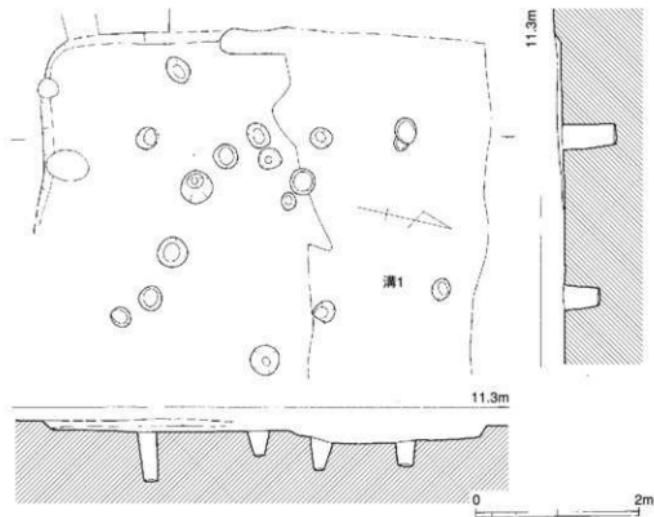
北辺にカマドがあつたと思われるが、痕跡は残っていない。

出土遺物

土器（第32図1・2） 良好的な出土遺物はなく須恵器小片2点を図示した。1は蓋と思われるもので、口端部を丸く收める。2は杯身としたが、蓋でもいいのだろう。口端部に明瞭な面をもつ精良な破片で、I期に遡るものであろう。

2号竪穴住居跡（図版14、第31図）

1号住居跡の北東に近接し、切り合い関係にあると思われるが、間に1号溝が掘削されていること、



第30図 1号堅穴住居跡実測図 (1/60)

遺構の残存状態が悪いことなどがあつて先後関係は確認できていない。3号土坑を切る。

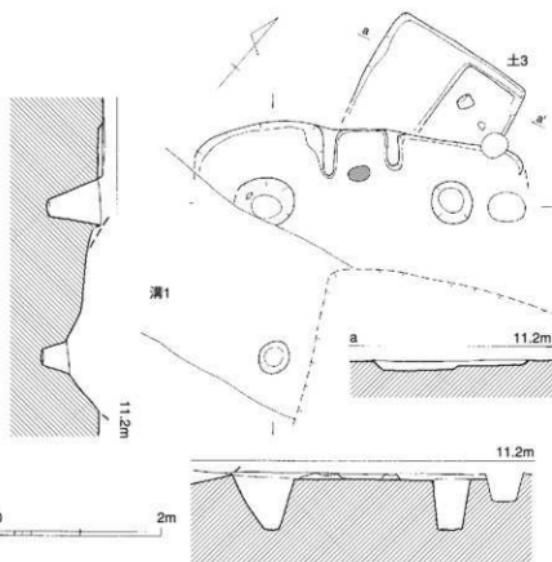
これも深さは0.1mに満たないが、北辺には青灰色粘土を用いて袖を作ったカマドが残存し、その前面には火床も残っていた。

北辺長は約4.0mを測る。北西の主柱穴と両辺との位置関係を参考にすれば南北長も4mほどに復元できよう。

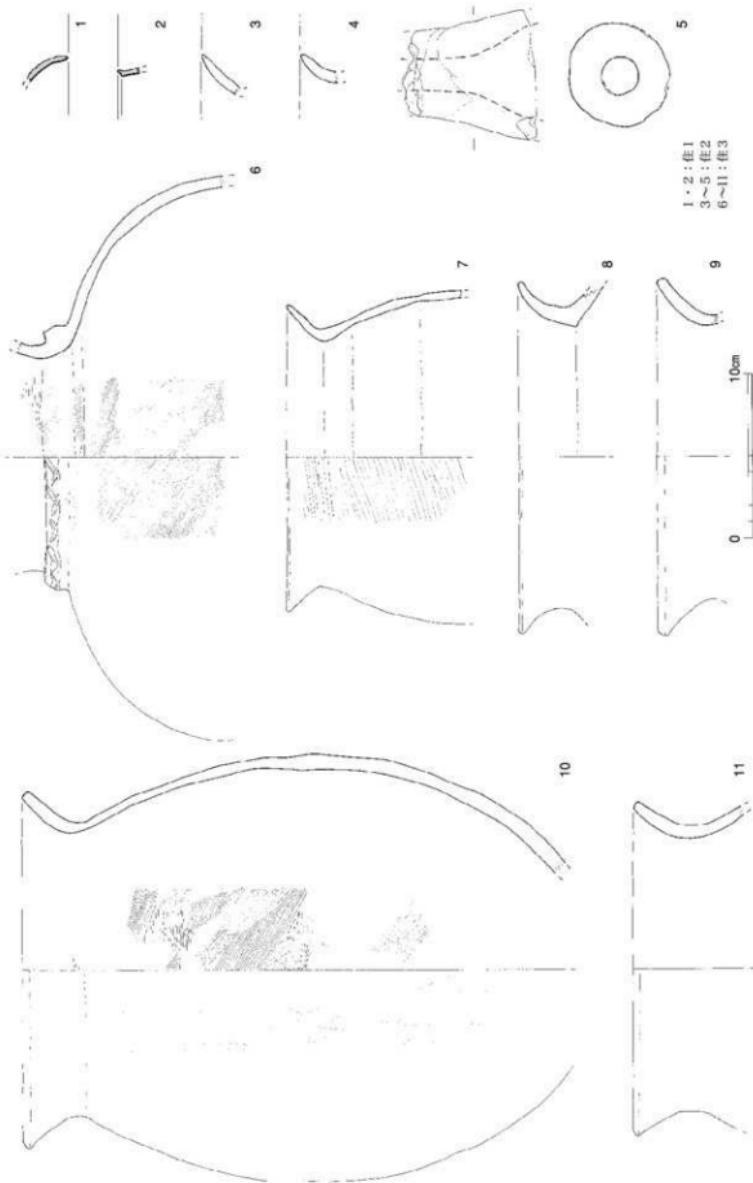
出土遺物

土器 (第32図3~5)

これも出土遺物は少ない。3・4は埋土出土の土師器甕口縁部小片。5は



第31図 2号堅穴住居跡実測図 (1/60)



第32圖 1～3号窯穴住居跡出土土器灰陶圖 (1/3)

北西の主柱穴から出土した土師質の輪羽口で、内径が大きく異なる。灰黄褐色であるが、先端部は部分的に暗灰色、その下は白色化している。

3号竪穴住居跡（図版14、第33図）

1号住居跡の東に石材を埋め込んだ攢乱坑があるてその東に近接して位置するが、これも中央部を1号溝が横断していた。現状では $3.1 \times 3.9m$ の平行四辺形のような平面形となつていて、深さはやはり $0.1m$ に満たない浅いものであった。断面に示した2本の柱穴が主柱穴と思われるが、壁に近くかつ東に偏していることから南北両辺及び西辺にベッド状遺構を伴っていたと考えられる。炉跡は1号溝に壊されたのである。

なお、北東隅で住居跡を切る遺構を6号土坑としているが、床面形状が乱れていて通常の遺構とは思えないものであった。

出土遺物

土器（第32図6～11・第34図1～8） 遺構の残存状況に比して多くの土器が出土したが、図示できたものは少ない。5・6は1号溝の南側から、他は北側からの出土である。

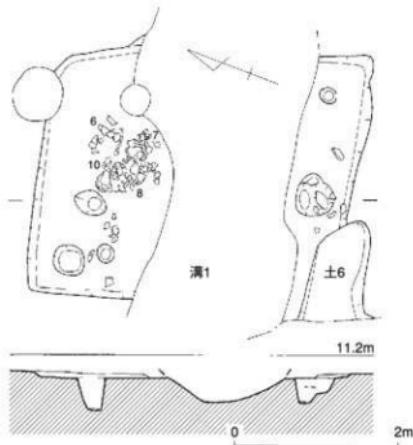
第32図6は頸部に籠描刺突文の突帯を付す壺片であるが、突帯は摩滅して潰れる。内外面を細かい刷毛目で調整する。7～11は甕で、体部の様子がわかるものはいずれも張りが弱い在地系の形態である。7は頸部がく字形に外折するが、口端部が本来の形状を示すものか確信はない。口縁部から体部にかけて外面に煤が付着する。胎土は直径5mmほどの砂粒を含む粗いものである。8・9は小片で傾きや復元径に不安がある。10は口端部を断面方形とする長脚の甕。体部内外面は主として刷毛目で仕上げる。11の頸部は曲線を描く。

第34図1は無頸壺として表現しているが、口縁部は擬口縁であるかも知れない。灰黄色を呈し、大粒の砂粒が見えるが概して胎土は良好といえる。2・3は平底傾向の底部で、体部との境は丸味をもつ。いずれも完存する。3は鉢としたが、口縁部は剥落して形状がはっきりしない。4はより小さな平底となり、体部が高く立ち上がる。5は薄手の丸底となる。6・7は3方に円孔をもつ高杯の長脚。8は直径1.5cmほどの棒状品で、スプーン状となるか。胎土等に特別なものはない。

4号竪穴住居跡（図版15、第34図）

3号住居跡の北に近接し、西側を攢乱坑・小規模な溝によって大きく壊されていて西辺が不明であった。加えて深さも5cm前後に過ぎない。

主要な施設として、南東辺に接する土坑がいわゆる屋内土坑と思われるが、主柱穴は不明である。北東部の張り出しがベッド状遺構の可能性があるが、このような配置の同種遺構は延永ヤヨミ園遺

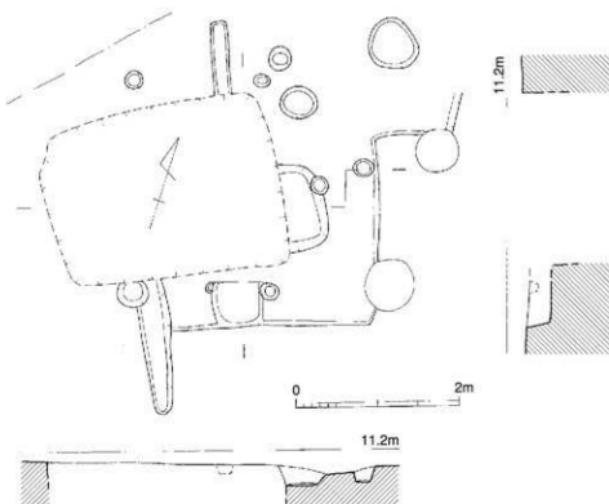


第33図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

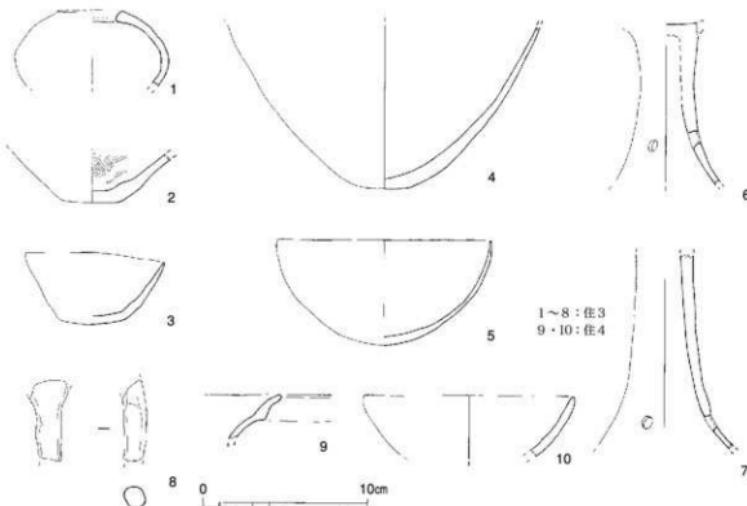
跡では珍しく、断定はできない。

出土遺物

土器 (第35図9・10) 9は二重口縁壺小片で胎土・作りは良好である。10は鉢小片。



第34図 4号竪穴住跡実測図 (1/60)



第35図 3・4号竪穴住跡出土土器実測図 (1/3)

5号竪穴住居跡 (図版15、第36・37図)

1号住居跡の南東に位置

し、北隅が不明瞭で終わつたが全体を窺うことはできる。平面規模は $3.6 \times 4.2\text{m}$ の長方形で、深さは 0.1m ほどが残存するに過ぎない。

北西辺中央付近で青灰色砂質土の広がりが見られたが、断ち割っても袖の形状は見えず、意図的にカマドを潰したものと思われる。なお、支脚として使用された高杯の脚部が遺棄されていた。火床に接するような位置にあることから使用時のままの姿を留めているのであろう。

出土遺物

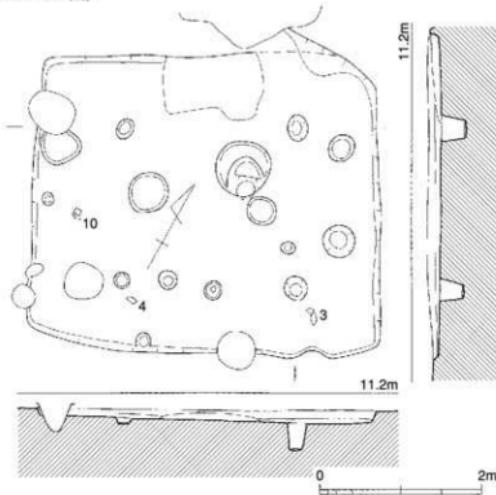
石製品 (図版57、第167図12) 石製品として紹介することに躊躇を覚えるが、加工痕があるようなので紹介する。黄色系の砂岩を用いていて、直径・深さともに 1cm 弱の孔が穿たれている。自然に生じたものも可能性もある。

土器 (図版48、第38図) 1～6は須恵器、他は土師器であるが13の皿は後世のものである。

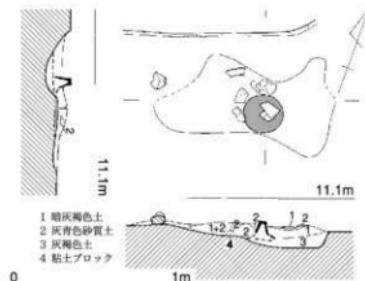
1は肉厚で作りが雑な杯蓋。天井部・口縁部の境に弱い稜をもち、天井部内面に同心円当て具痕が見える。1/4の残片。2・3は天井部から口縁部にかけて丸く移行し、口端部に弱い面をもつ。2は調整が粗雑で、胎土に黒色粒が目立つ。なお、天井部内面に箋記号が残るが、線刻ではなく箋磨き原体を用いたようなもので形状は不明。これは1/2ほどの残片。3は胎土・調整とともに良好であるが焼成が甘く灰白色となる1/3の残片。これらの杯蓋は口径 $13.1\sim 14.6\text{cm}$ である。

4～6は杯身。口径 $13.0\sim 15.1\text{cm}$ で、いずれも口端部を丸く收めている。4は焼け歪み、内面の横撫では丁寧、外面の箋削りは雑である。1/3の残片。5は胎土・調整とともに粗雑な感がある1/3の残片。6は胎土良好で、内面は丁寧、外面は雑な調整となる1/4ほどの残片である。

7は土師器壺口縁部。胎土良好で、残存する内外面に赤色顔料の痕跡が残る。8は甕小片で、復元径に不安がある。9は灰黄色となる樽状の土器で、胎土にクサリ礫が目立つ。



第36図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

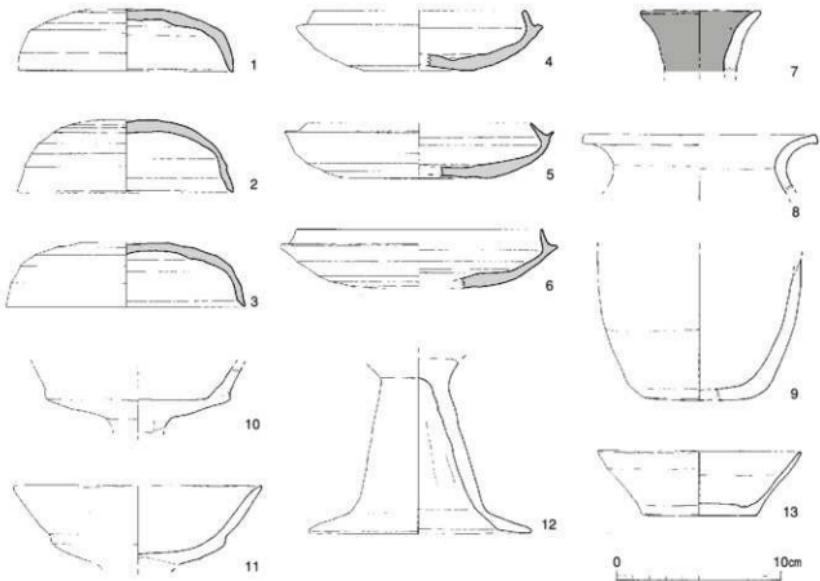


第37図 5号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

0

1m

11.1m



第38図 5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

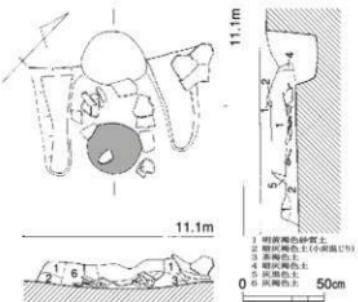
10～12は高杯。10は口縁部下の稜線がしっかりといるようである。焼けているようである。11はカマド付近出土で下半分の1/2が残存。12は支脚に転用されて立った状態で出土したものである。縦方向に1/3ほどが焼けて特に赤くなる。

13は金雲母が目立つ皿で、体部から口縁部にかけて大きく長く直線的に立ち上がる。外底面は一部で糸切り痕が見えるが、スダレ状圧痕が優勢である。「カマド下の小ピット」の注記があるが、該当する遺構ははっきりしない。

6号竪穴住居跡（図版16、第39・40図）

5号住居跡の東に近接し、7・8号住居跡を切って位置する。辺長はそれぞれ4.8mほどで正方形プランを有し、残存する深さは0.1m前後である。

北西辺中央に鮮やかな灰黄色粘質土が広がっていて、同様の土で作ったカマドの袖及び火床を確認できた。また、カマド内には瓶片が散乱していた。全体にこの調査区で検出した住居跡ではカマド袖内側が焼けて赤変化した例が乏しく、袖を平面的に検出することが困難な例が多かった。

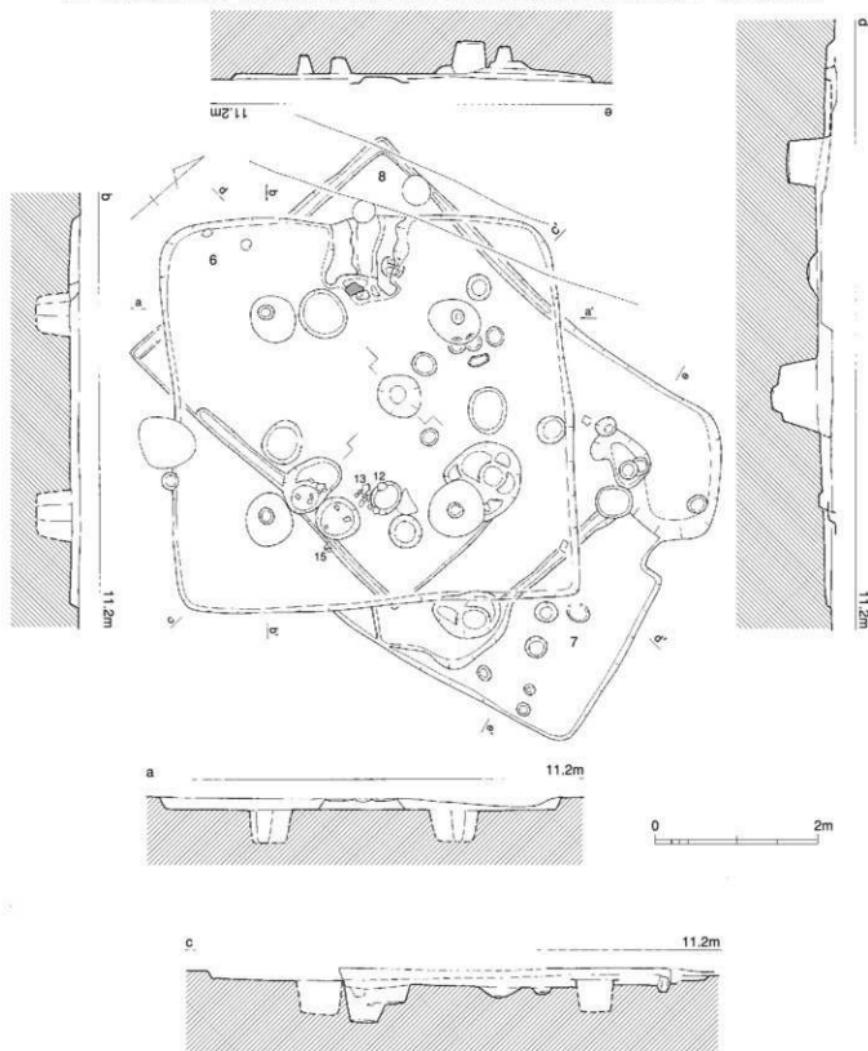


第39図 6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

4本の主柱穴は柱痕は径0.2mほどであったが、掘形は0.6m前後と大型である。

出土遺物

石製品（図版57、第167図8・第168図3） 第167図8は暗灰色といってよい滑石製紡錘車で、背面の多くを欠く。直径3.6cm、厚さ1.1cmで、孔径は0.8cmである。側縁は平滑化せず、縦方向の弱い稜線が数条残る。第168図3は青灰色を呈する片岩を使用した石斧で、刃部の一部と頭部を欠

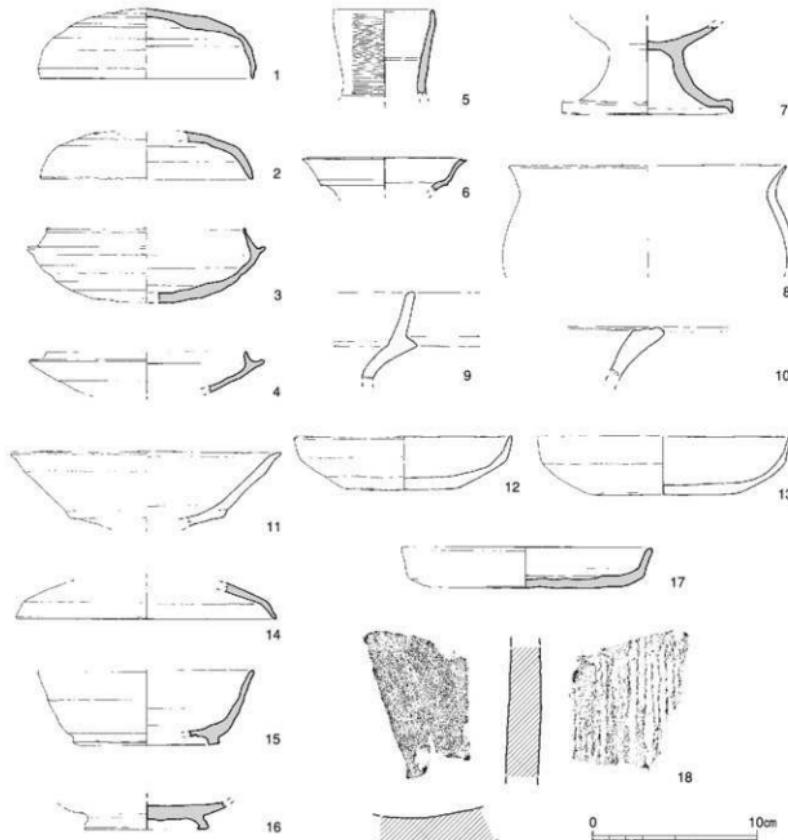


第40図 6～8号竪穴住跡実測図 (1/60)

損する。身の処々が剥離していて、これは本来のものか使用に際して生じたものか断定できない。重量は73.4gである。

土器(図版48、第41図) 遺構検出した際に中央やや南西付近で8世紀代の遺物がまとまって出土している。窪地に遺棄したものであろうか。1~7・14~17は須恵器、18は瓦、そのほかは土師器である。

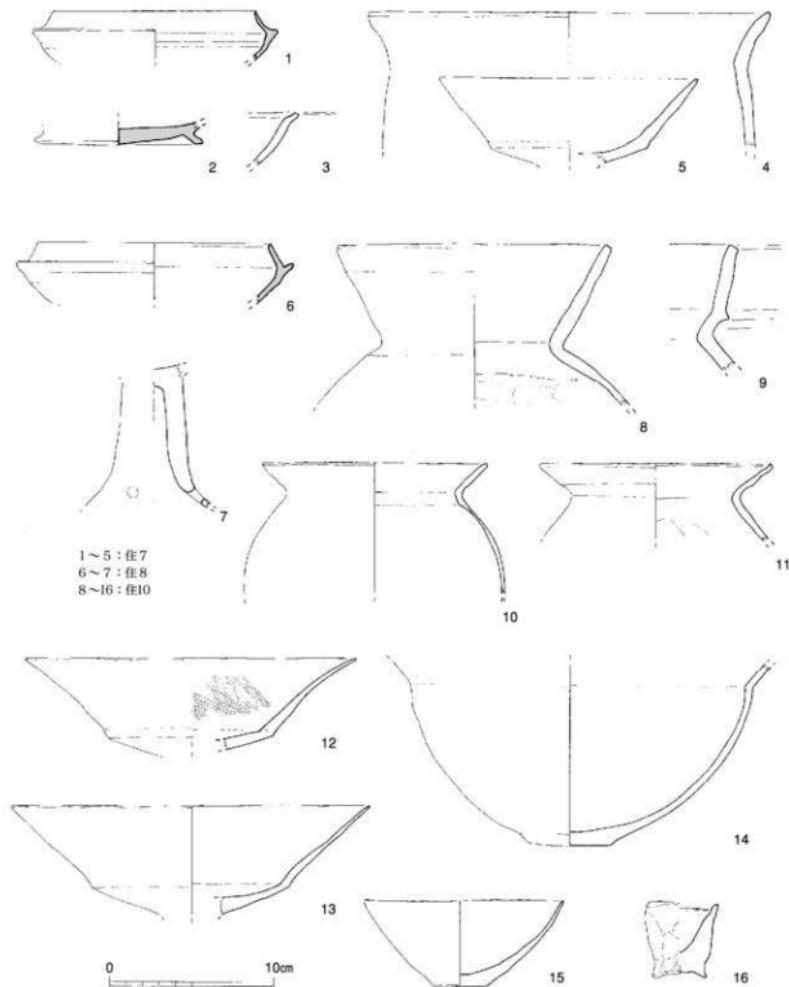
1はほぼ完形の杯蓋で、胎土精良でとても丁寧に作られている。天井部と口縁部の境は大きく凹ませて、口端部は丸く終わる。2は天井が低くなり、口端部が丸く終わる1/4の残片。これも胎土は精良だが調整が雑である。3は東側の主柱穴に切られた下層の8号住居跡の主柱穴から出土したものであるが、本来はこの住居跡の主柱穴に伴うものであろうと判断してここに示した。底部が丸く口端部が小さく外反する。胎土良好で、調整も丁寧な1/3の残片。4も胎土・調整ともに良好で



第41図 6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

あるがこれは小片。5は瓶類の口縁部。6はカマド付近から出土した處でこれらも丁寧に作られた小片。7は「カマド内」の注記があり、脚部上半は完周。図上面から外面は灰を被り、上面では器表が焼けて膨れたところがある。胎土は良好。

8は口端部の形状に不安がある。9は小片。10も小片であるが、口端部が肥厚して上面に凹線を2条刻む。胎土に特異なものはないが在地の土器ではない。11は3と同じ柱穴出土の高杯片で、1/3が



第42図 7・8・10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

残存。12・13は一見須恵器杯蓋を思わせる器形であるが、平底となる土師器で一般的な器形ではない。いずれも底部は完存、灰赤褐色・灰黄褐色となる。

14は杯蓋で、口縁部が大きく天井が高くなる。外面に灰を被って溶けた黒色粒が目立つが、胎土精良、丁寧に作られている。15も黒色粒が目立ち、外面に灰を被る。16は高台が外方へ踏ん張るもので、これも胎土・作りともに良好である。17は平底の皿で、焼成が甘く器表が荒れている。底部は完存、口縁部も3/4が残存する。

18は平瓦片。今回の調査では数十点の平瓦片が出土したがいずれも火を受けていて、凹面はほとんど何も見えず、凸面に縄目叩き痕を残すものがほとんどである。これもその一つ。

7号竪穴住居跡（第40図）

6号住居跡に切られて東に張り出す遺構を呼称した。北東隅及び南辺付近で乱れていていさか疑問があるが、4本の主柱穴を想定できることもあり、住居跡として良いと思われる。略南北長は4.2m、東西長は主柱穴の位置から推して4mほどと推測できる。これも深さが0.1mに満たない浅い遺構である。

炉跡・カマドは痕跡が認められなかった。

出土遺物

土器（第42図1～5）1・2は須恵器。1は1/4の残片で、胎土・調整ともに良好である。2は図示部が完存する高台付底部で、焼成が甘く器表が荒れる。高台内は回転籠削りで仕上げる。

3は熱を受けて赤くなる高杯小片。4は荒れていで口縁部の形状には不安がある。5は高杯脚部でこれも焼けていて、支脚に転用されたものであろうか。

8号竪穴住居跡（図版17、第40図）

6号住居跡に切られるが、7号住居跡との直接の関係は不明である。南北の辺はほぼ方位にのっていて、東西の辺がやや振れているため、平行四辺形に近い平面形となる。辺長は4×5.4m、北西隅と炉跡付近の床面とは0.2mほどのレベル差がある。

炉跡を挟んで2基の主柱穴が東西に配置されるが、通有な在り方として直線的な配置とはならない。また、東側の主柱穴の南に5cmほどの高さでベッド状遺構の痕跡が残っていた。他の遺構と重複していない西辺南北両隅では、炉跡付近の床面に比べて南隅で0.1m弱、北隅で0.15mほど高くなっていて、やはりベッド状遺構が配されていたことがわかる。

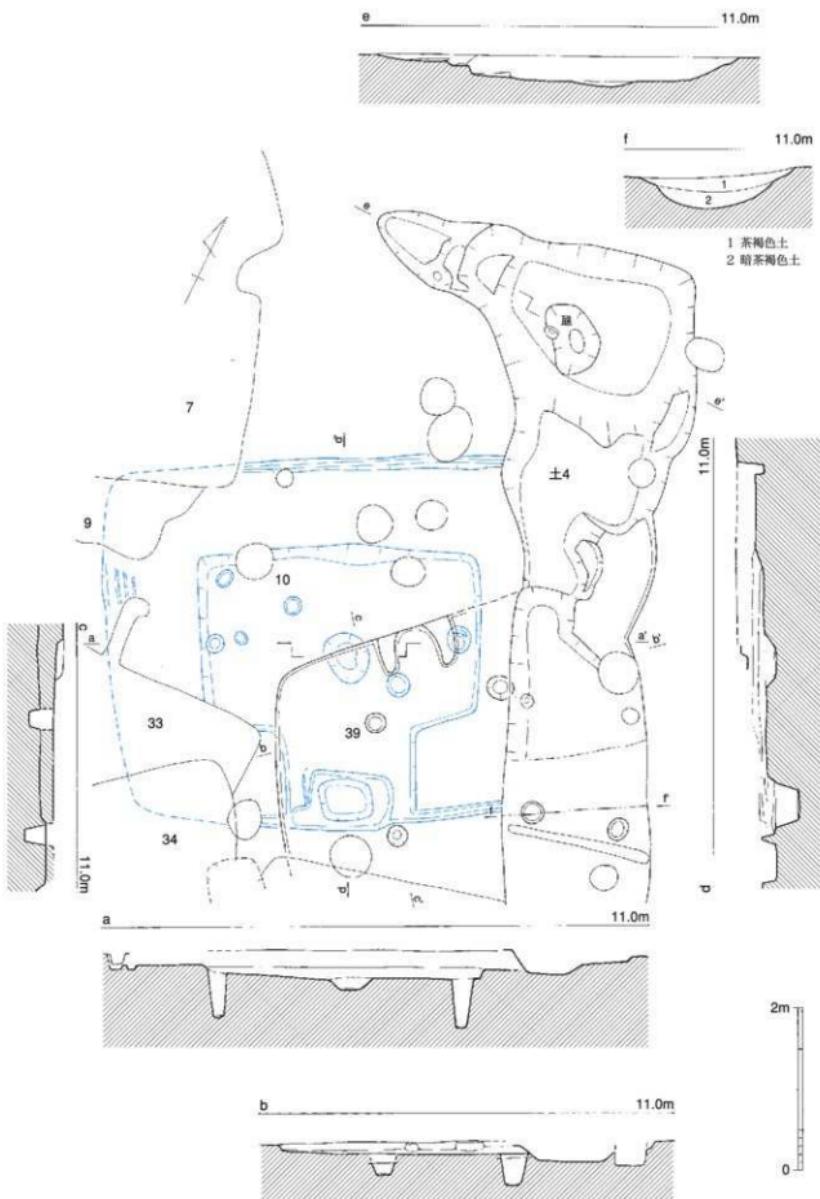
屋内土坑は深さのわりに小振りである。周壁溝は深さ0.1mほどで、南西隅付近を除いて全周する。

出土遺物

土器（第42図6・7）出土遺物は少ない。6は須恵器小片で混入したもの。口端部を切ったような面を付し、胎土・作りは良好である。7は土師器高杯片で2個の円孔が残る。胎土は良好。他に口端部を断面方形とする甕片などがある。

9号竪穴住居跡

7号住居跡の南の落ち込みを呼称したものであるが、不整形となつたので欠番とした。



第43図 10・39号竖穴住居跡、4号土坑実測図 (1/60)

10号竪穴住居跡（図版17、第43図）

7号住居跡の南東部に位置し、7・33・34・39号住居跡や4号土坑とした溝状遺構に切られているが、主要な部分は良く残存していた。

略南北長は約4.6m、東辺が失われているが、西辺のベッド状遺構を参考にすれば東西長は5.8mほどに復元できる。北辺中央付近と炉跡付近の床面では0.45mほどのレベル差がある。

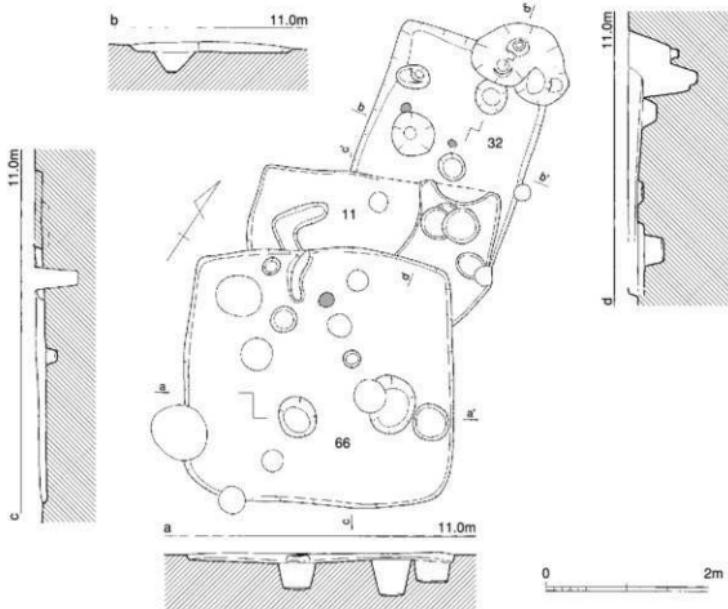
南辺の屋内土坑付近を除いてL・逆L字形に幅1mのベッド状遺構を配するが、その高さは0.15mほどである。また、ベッド状遺構の外周には幅・深さとも0.1mほどの周壁溝が巡る。

主柱穴はベッド状遺構に近い位置に配置された2基で、掘形規模に比して深いものであった。屋内土坑は長方形の整った形状で、二段掘りとなっている。

出土遺物

土器（図版48、第42図8～16）11・14は屋内土坑から、他は埋土中からの出土である。

8は広口壺で、図示部はほぼ完存する。口縁部は微妙な曲線を描き、口端部は断面方形とする。灰白色～黄白色となり、胎土は粗い。9は頸部が短く小さい二重口縁片で、小片のため傾きに不安がある。10・11は甌。いずれも器表剥落のために口縁部本来の形状を失っているかも知れない。それでも11は端部を擒んだ痕跡が残る。12・13は高杯片。12は灰赤色となり焼けたようである。内面に細かい刷毛目が見える。13は口縁部上半では灰黄色～明灰色、以下は灰赤色となっていてこれも火に掛かったのであろう。14は頸部以下がほぼ完存する鉢で、底部は丸みをもつ平底となる。内面は底部付近が灰黒色、以上が濃い灰赤色となる。外面は全体に赤くなっている。15は平底の鉢で口

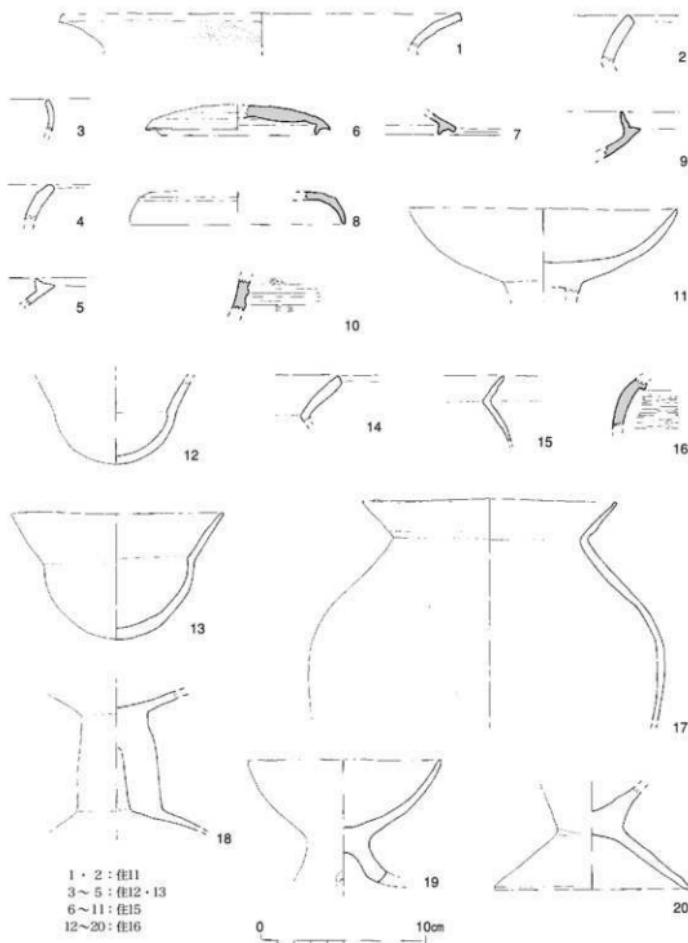


第44図 11・32・66号竪穴住居跡実測図 (1/60)

縁部付近を除いて完存する。これも口端部の形状には不安がある。16はほぼ完存の手捏土器。

11号竪穴住居跡（第44図）

調査区南西端付近に位置する。この遺構番号を付した段階では重複する66号住居跡付近はまだ表土掘削を行っておらず、この付近が調査区境となっていて遺構の一部が見えていた。結果的には66号住居跡に切られ、32号住居跡を切っているという判断をしたが、この遺構を住居跡とするに足る十分な根拠を得ていない。



第45図 11~13・15・16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

略東西長は3mほどであったと想定できるが、深さは0.1mに満たない。

出土遺物

土器（第45図1・2） いずれも土師器甕の小片で、口端部を断面方形とする。

12号竪穴住居跡（図版17、第46図）

調査区北西端近く、3号住居跡の北東に接続する。検出時には2軒の住居跡が重複しているものと判断したが、発掘の結果は主柱穴や炉などの主要な遺構を2軒分検出できなかった。

12号住居跡は南西辺に幅1mほどのベッド状遺構をもつが、これは検出面から数cmの深さが残るのみであった。今回の調査例ではベッド状遺構は炉を挟んで対称形となるのが一般的で、この住居跡の屋内土坑東の高まりをベッド状遺構と見ることには躊躇を覚える。

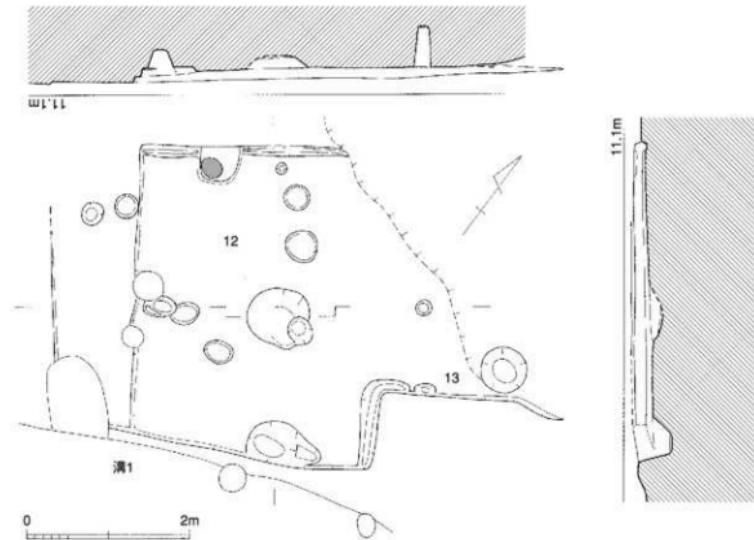
中央の炉跡、屋内土坑の位置は通有の在り方である。断面実測図に示した2基の柱穴を主柱穴と見たいが、炉跡までの距離に0.4mの違いがあつて疑問がある。また、北西辺に近いところに火床状の赤変部があるが、住居跡の床面から浮いていて、これに相応しい住居跡はなかった。

出土遺物

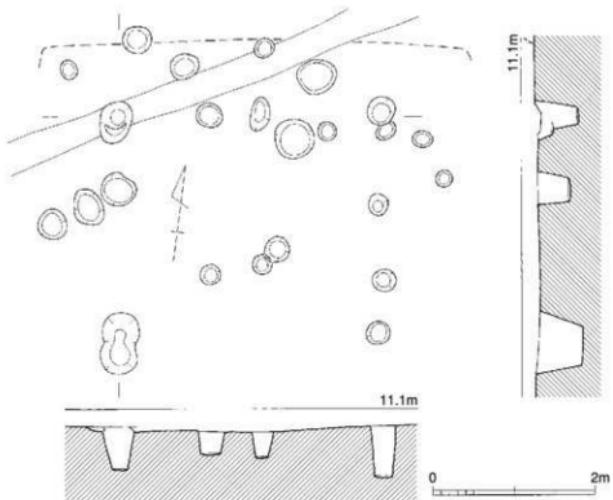
土器（第45図3～5） 良好的な土器ではなく、いずれもごく小片の土師器である。3は楕円で内外面が灰黒色となる。4は口端部を断面方形とする甕。5は一見須恵器のようであるが土師器である。小片で形状は不明。

13号竪穴住居跡（図版17、第46図）

12号住居跡の東の張り出しを重複した住居跡と推測して番号を付したが、上記したように住居跡との確信は持てない。



第46図 12～13号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第47図 14号竖穴住居跡実測図 (1/60)

14号竖穴住居跡 (第47図)

調査区北辺中央付近、4号住居跡の東に近接する。遺構検出時は住居跡北辺を確認していたが、非常に浅いために発掘後は住居跡のラインが不明となってしまった。検出時に作成した平板測量図からおおよそのラインを破線で示した。

主柱穴は断面実測図に示したもので間違いないであろう。4本柱を想定できる。炉・カマドとともに痕跡はなかったが、北辺を浅い耕作用の溝が横切っていて、カマド(火床)は壊されたのであろう。出土遺物はない。

15号竖穴住居跡 (図版18、第48図)

調査区北辺中央付近、14号住居跡の東に位置する。16・17号住居跡を切って、小溝に切られる。

この住居跡は平面形も $3.1 \times 4.3\text{m}$ と小型長方形で個性的であるが、カマドが東辺にあって、かつ東辺中央から南に偏するという点でも特異である。主柱穴が判然としないことも加えて良いかも知れない。カマドの袖は明黄褐色砂質土で作られていて、支脚の土師器高杯が伏せられていた。

出土遺物

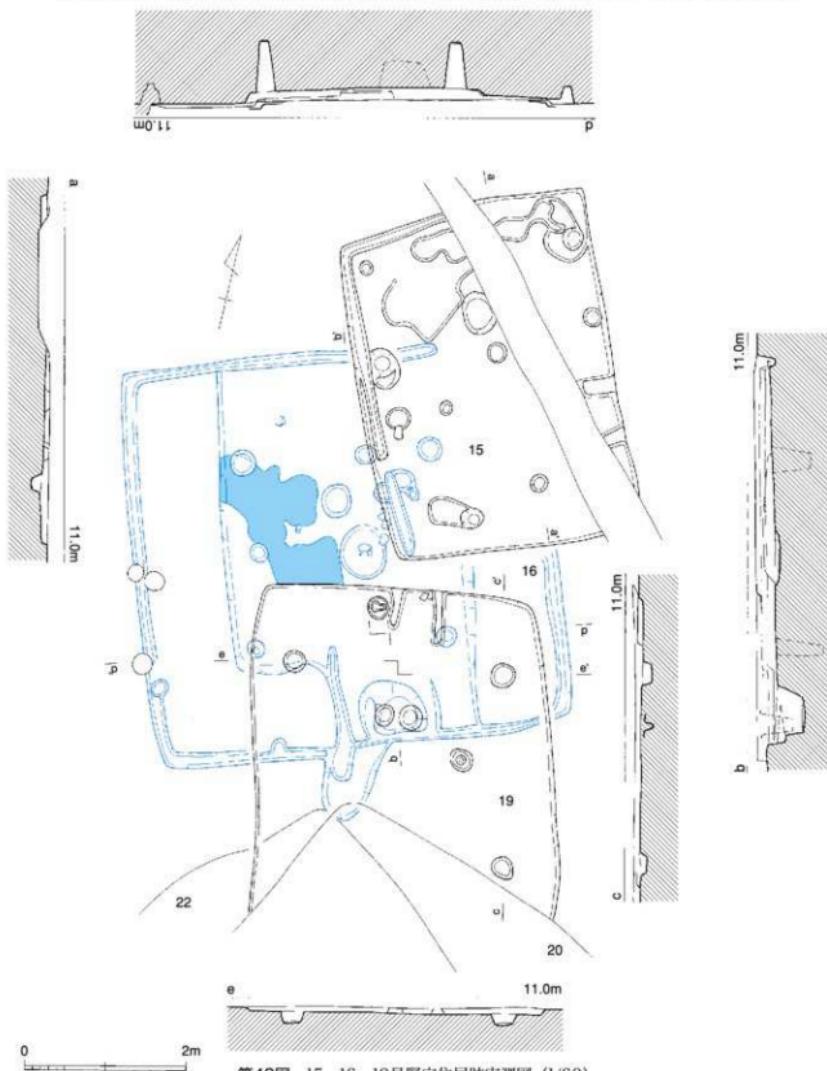
土器 (図版48、第45図6~11) 6~10は須恵器、11は土師器である。

6はつまみを有すると思われる蓋で、身受けの返りが小さく突出する $1/4$ の残片。胎土良好で丁寧に作られていて、外面は灰を被る。復元口径は 9.9cm 。7は同様の器形の小片で、これは焼成が甘く灰白色となる。8は天井が低平な変わった器形の土器であるが、外面に灰を被っていることから蓋としておく。これは胎土が粗い。9は小片で混入であろう。10も小片でこれは胎土・作りとも良くな、また繊細な波状文が施されることも古式の要素といえる。これも混入であろう。

11はカマド内に伏せられていた楕形の高杯杯部で、器表剥落のために口端部の形状には不安がある。

16号竪穴住居跡（図版18、第48図）

15号住居跡の南西にあって15・19号住居跡に切られていた。平面形は $4.8 \times 5.1m$ と正方形に近



第48図 15・16・19号竪穴住居跡実測図 (1/60)

く、検出面からベッド状遺構までの深さは西辺・東南隅付近ともに0.05mに満たないほど浅く、ベッド状遺構の高さは最大で0.2mほどとなる。

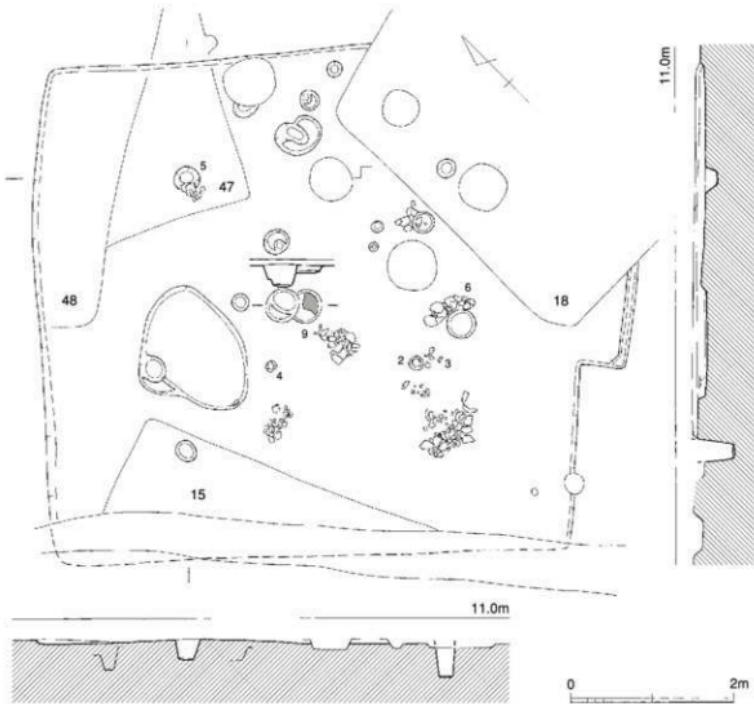
西辺のベッド状遺構はL字形で、東辺のそれは辺に平行しているが、屋内土坑の東に小さな段が残存しているので、本来はL・逆L字形に配置されていたものと思われる。

主柱穴はベッド状遺構の屈曲部などに配置された4本で、非常にしつかりした柱穴である。直径0.6mほどで深さが数cmの炉は、主柱穴の中央から南西に偏して位置する。

なお、炉から西側の低い部分には広く焼土が広がっていた。焼失した遺構にしては炭化材が出土しておらず、住居廃絶後に生じたものであろうか。なお、南の張り出しへは発掘ミスであろう。

出土遺物

土器（図版48、第45図12～20） 12・13は小型丸底壺というよりは鉢といった方が近い感じである。12は胎土が粗く、頸部内面の稜は甘い。13は口縁部を除いて完存し、全体が窪める。頸部内面の稜はしつかりしたもので、胎土は粗い。14・15は小片。16は混入の須恵器小片である。17は口縁部が完周する甕で、口端部を小さく摘む。18は高杯。肉厚で焼けて赤くなる。19は高杯あるいは脚付鉢で口端部を除いて図示部は完存する。胎土粗く、4孔が配されたようだが、口端部形状には不安がある。20は脚台で、脚端部の径に比して体部の立ち上がりが急角度となっている。



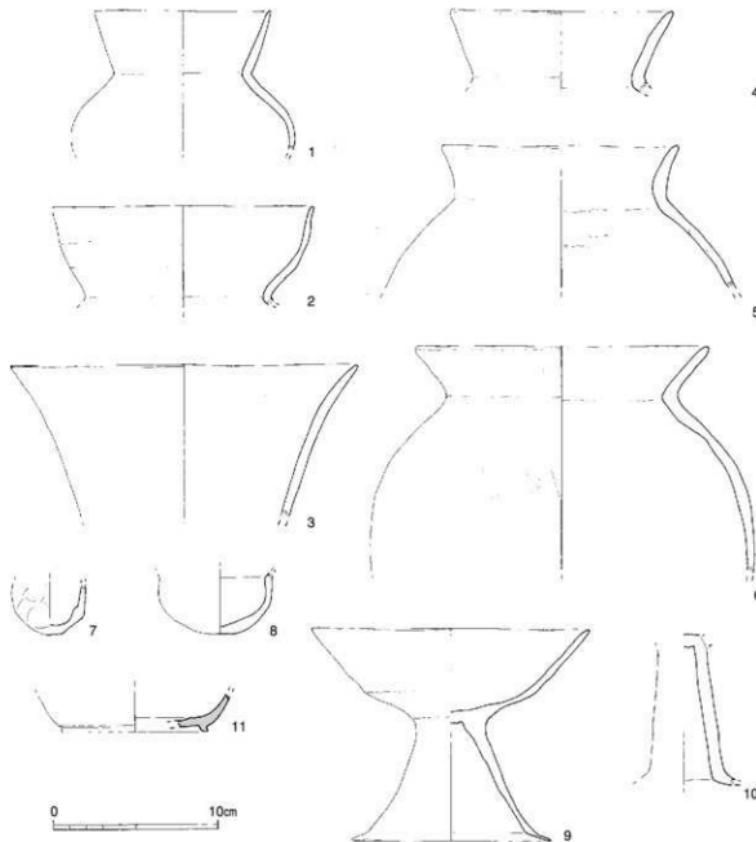
17号竪穴住居跡（図版19、第49図）

調査区北端付近に位置し、18号住居跡・掘立柱建物跡及び小溝に切られ、15・47～49号住居跡を切る。南西辺のほとんどを小溝に切られているが、辺長は $6.5 \times 6m$ 強のほぼ方形に近い平面形となる。南東辺中程に幅0.6m、長さ1.4m以上の張り出しがあって、この部分だけに周壁溝が伴う。ほかの住居跡と重複する可能性もあるがその確証が得られていない。なお、深さは0.1mに満たない。

床面中央付近に直径0.4m、深さ0.1mに満たない炉と思われる浅い落ち込みがある。炉を伴う方形住居跡では主柱穴は2本あるいは4本であるが、ここでは2本主柱穴は見あたらないので4本柱を想定したが、深さが揃わない。

出土遺物

鉄製品（図版58、第169図1） 鉄鎌であろう。ほぼ完存するようだが、鍔は見えない。



第50図 17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

土器（図版48、第50図）1は黄白色となる小型壺で、口縁部の1/3が残存する。2は二重口縁壺の末期的なものであろう。これは図示部が完存。3は口縁部が外反して終わる広口壺で、2/3ほどが残存する。4は口縁部が高く伸びるもので、壺としてよからうか。胎土がとても粗い。5も口縁部が高く開くが、これは体部が一部残存していて壺としてよからう。体部内面に粘土紐の継ぎ目が残る。6は口縁部がく字形に開く壺で頸部付近の3/4が残存する。器表剥落のため、口端部の形状に不安がある。7は手捏土器。8もミニチュアの壺で、図示部は完存する。9は脚部上端付近が完周するが、口縁部や脚端部は小片である。口縁部は直行して丸く終わり、脚端部は小さく開いて終わる。10は細身の高杯脚部で、混入であろう。

11は華奢な高台がつく須恵器杯身でこれも混入。

18号堅穴住居跡（第51図）

調査区北東端付近にあって17号住居跡を切り、掘立柱建物跡・小溝に切られていた。40号住居跡とも重複するが、これは非常に残りが悪くて先後関係は確認できなかった。

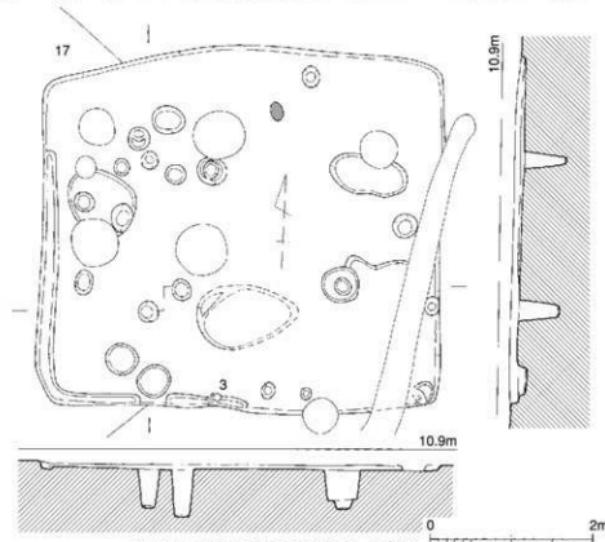
辺長は $4.5 \times 4.9m$ で、深さは0.1mほどであった。北辺中央付近、肩から0.8mほど離れて火床と思われる被熱部分があつて、カマドを想定できる。

主柱穴は断面図に示した2基は間違いないと思われるが、対応する2基がはつきりしない。

出土遺物

石製品（図版59、第171図1）淡灰色凝灰岩製の砥石で、上部は欠損、下端は本来の面を保つ。石材は非常に硬質な感があり、4面がよく使用されている。

土器（図版48、第52図1～5）1は口端部や下位の外縁に粘土帶を貼り付けて二重口縁としたもので、内面には拓影に見るような繊細な櫛描波文が施文されている。摩滅して拓影に現れな



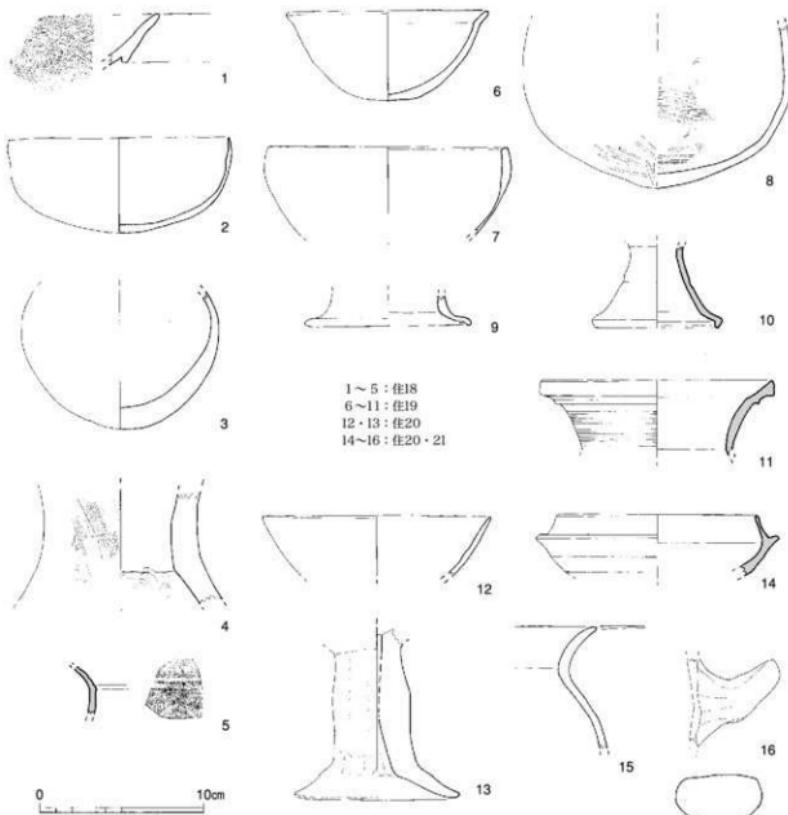
第51図 18号堅穴住居跡実測図 (1/60)

いので略しているが、外面にも同様の波状文と円形浮文が付されていた。こうした施文は在地ものではないが、この土器は灰黄色を呈しているものの胎土に変わった点は見えない。2はほぼ完存する椀であるが、これも剥落のために口端部の形状は失われているのであろう。3は底部が非常に肉厚となる小型壺の体部であるが、破片のために復元形状には不安がある。4は肉厚となる支脚の破片で、特別に熱を受けた様子は見えない。5は須恵器壺の小片である。精美な櫛描波状文が施文され、その上部にとても低い断面方形の削出突帯を付す。

19号竪穴住居跡（図版19、第48図）

16号住居跡の南にあって、それと22号住居跡を切り、南を20号住居跡に切られる。

略東西長は3.7m。南北長は4mほどを確認しているが、主柱穴を基準に復元すれば約4.2mとなる。深さは5cmに満たない。北辺中央にカマドが設置されていた。袖は明黄褐色砂質土で構築されるが、支脚は残存せず、火床も確認できなかった。



第52図 18～21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

土器（第52図6～11）6は短い口縁部をもつ鉢で、外底面は籠削りのようである。器肉及び外表面は灰褐色、内面は黒色となる。7は体部から口縁部にかけて連続的に内彎する椀で、これも内面は黒色となる。8は底部付近が完存する丸底の底部で、胎土が粗い。外面は疊らな籠磨き、内面は細かい刷毛目で仕上げる。9は脚部としたが、確信はない。端部内面が一部剥離している。

10・11は須恵器。10は脚端部を内側へ折り曲げる変わった器形で、脚端部外面から内面に掛けて灰を被る1/3の残片。脚としたが口縁部であるかも知れない。11は細部の作りがシャープな壺口縁部片である。外面は細かいカキ目で調整され、胎土・作りともに良好である。

20号竪穴住居跡（図版19、第53図）

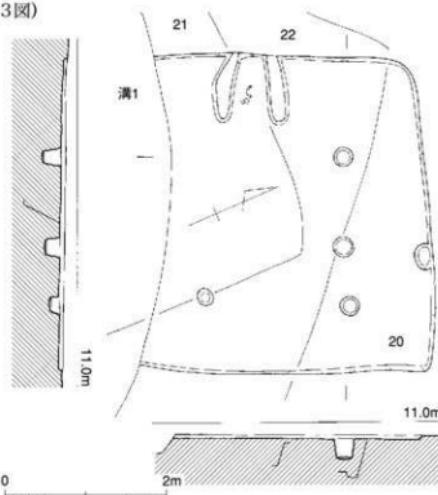
19号住居跡の南にあって、19・21・22号住居跡を切るが、この住居跡は南西辺付近を1号溝に切られていた。略東西辺長は3.9m、南北辺長はカマドが中心に位置するとすれば約4mほどの規模となる。深さは0.1mに満たない。

北西辺でカマドを検出したが、袖は明黄褐色砂質土で作られていて、土師器高杯を用いた支脚の一部が残存していた。

出土遺物

石製品（図版57、第167図3）

北隅付近から出土した滑石製の有孔円盤で、周縁の多くを欠くが、直径2.5cmほどと思われる。厚さは0.5cmで中央に小孔が1つある。



第53図 20号竪穴住居跡実測図 (1/60)

土器（第52図12・13）12はカマドに伏せ置かれた高杯杯部。1/2の残片で焼けて灰赤色となる。13は胎土良好、ごく肉厚となる高杯脚部で変わった形状である。

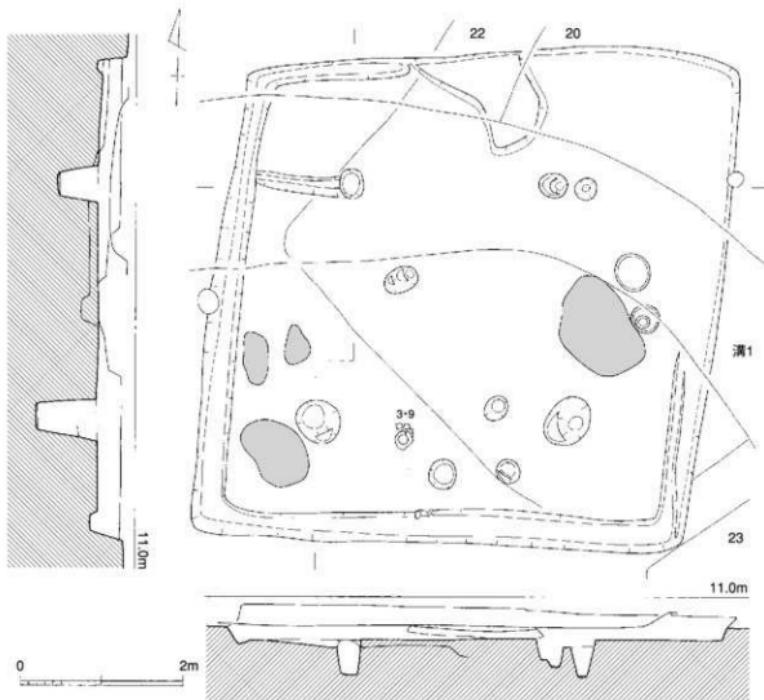
同14～16は「住20・21」の注記があるがここで紹介しておく。14は須恵器杯身口縁部の小片で、胎土・作りは良好。15は黄白色を呈する甕の小片。16は瓶把手である。

21号竪穴住居跡（図版20、第54・55図）

1号溝が大きく曲がる付近にあり、22号住居跡を切って、20号住居跡・1号溝に切られていた。23号住居跡ともわずかに重なるが、それに後出するようである。

平面形はやや平行四辺形に近い形であるが、ほぼ6.0mの方形としてよい。深さは最大で0.4mほどであった。北東隅付近を除いて幅0.2m前後の周壁溝が巡らされている。

カマドは北辺にあった。検出時は灰白色粘土や焼土がまだらに現れ、横断面でも袖は認められな



第54図 21号竪穴住居跡実測図 (1/60)

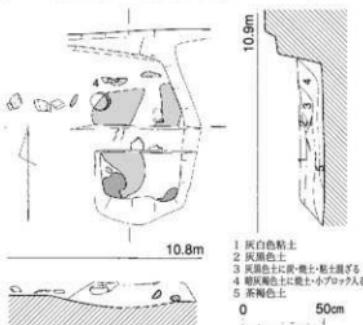
かった。ほかの住居跡でよく見られた支脚もここにはなく、火床も認められなかった。支脚がないことは住居を遺棄する際にカマドも処分したことであろう。火床については、下層に22号住居跡が重複することから発掘ミスであるかも知れない。

主柱穴は4本を想定したが、南側の2本と北側の2本では掘削規模・柱間隔が異なっていた。また、南北隅付近に白色粘土塊が床面から浮いた状態で、東辺に近い部分でも同様の粘土が敷かれたような状態で検出された。

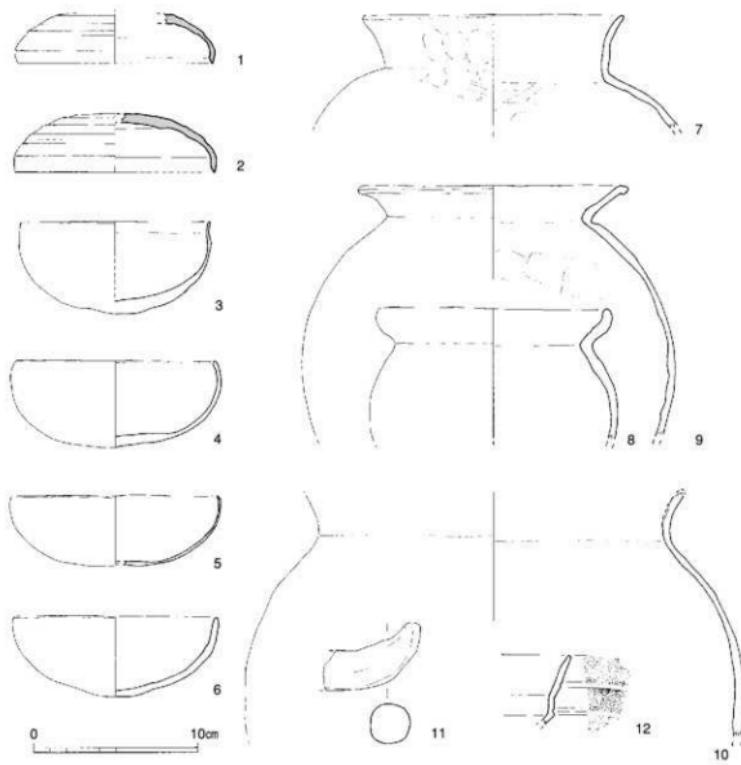
出土遺物

石製品（図版59、第171図2） 黄白色～灰色の緻密な砂岩製砥石で、図上部を欠損、下端は本来の面である。これも4面が非常によく使用されている。

土器（図版48、第56図） 1・2・12は須恵器、他は土師器である。1・2は天井部が丸く、口縁部がやや内向きとなるよく似た器形である。口径



第55図 21号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第56図 21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

12cm前後で、胎土・作りともに良好である。12は高杯の口縁部であろうか。外面は沈線で文様帶を画し、櫛描刺文を2段付す。

3は口縁部を小さく外反させる椀で、他の3点に比してやや身が深い。これは完存。4もほぼ完存する椀で、口縁部が内彎する。焼かれて変色・剥落する。5は4に似るが、剥落して器表がとても薄くなっている。これは1/4の残片。6は口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもので、3/4が残存する。これには「カマド埋土中」の注記がある。

7～10は甌。7は口縁部が高く立ち上がって端部を外反させるもので、頸部外面に指押さえの痕跡が見える。2/3の残片。8は口端部付近を内側へ強く曲げる変わった形状をしているが、口縁部は歪んでいる。9は口端部を外側へ短く曲げていて、口縁部はほぼ完周する。調整が雑である。10は口縁部の外反が弱い甌。11は瓶把手であるが、断面が丸くなる。

22号竪穴住居跡 (図版20、第57図)

調査区中央付近、1号溝が大きく曲がる付近に位置し、19～21号住居跡・1号溝に切られる。

平面形は方形となり、辺長は $6.0 \times 6.0\text{m}$ 、深さは最大で 0.6m ほどであった。最大幅 0.2m 、深さ 0.2m 弱の周壁溝が四周を巡っている。

周壁溝の内側には幅 1m ほどのベッド状遺構を屋内土坑を除く四周に付し、屋内土坑との関係で対称形となっていない。なお、床面からの高さは 0.1m ほどであった。

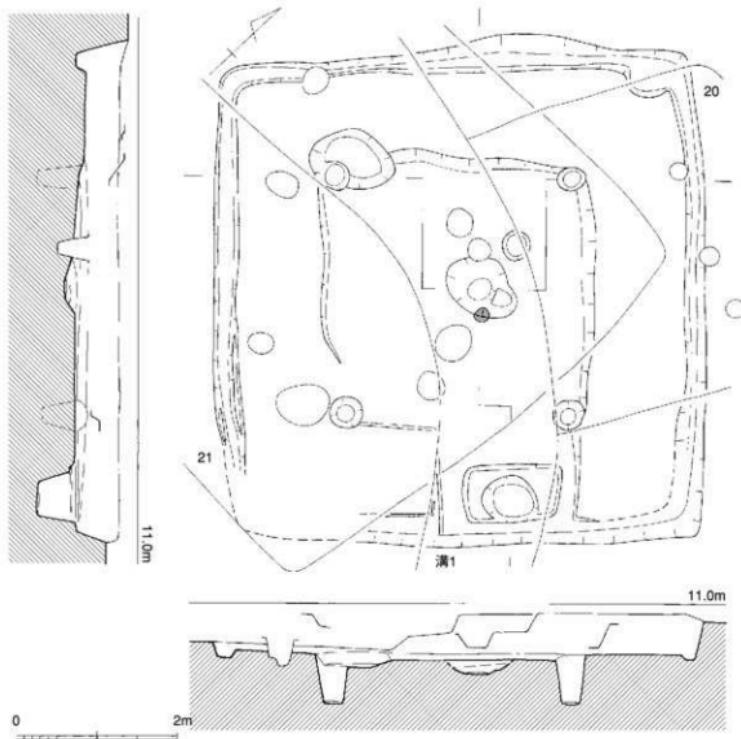
炉跡は若干偏するとはいへば床面中央に位置し、平面橢円形で東側にテラスをもつ。屋内土坑は南東辺にあって、ベッド状遺構が対称形となってないためにこれは随分東に偏っている。円形平面をもち、深さは 0.4m 弱としっかりしたものであった。なお、この上面には蓋受けと思われる浅い方形の掘り込みが巡る。

主柱穴は4本で、ベッド状遺構の隅にあって、ほぼ正確に方形に配置されている。

出土遺物

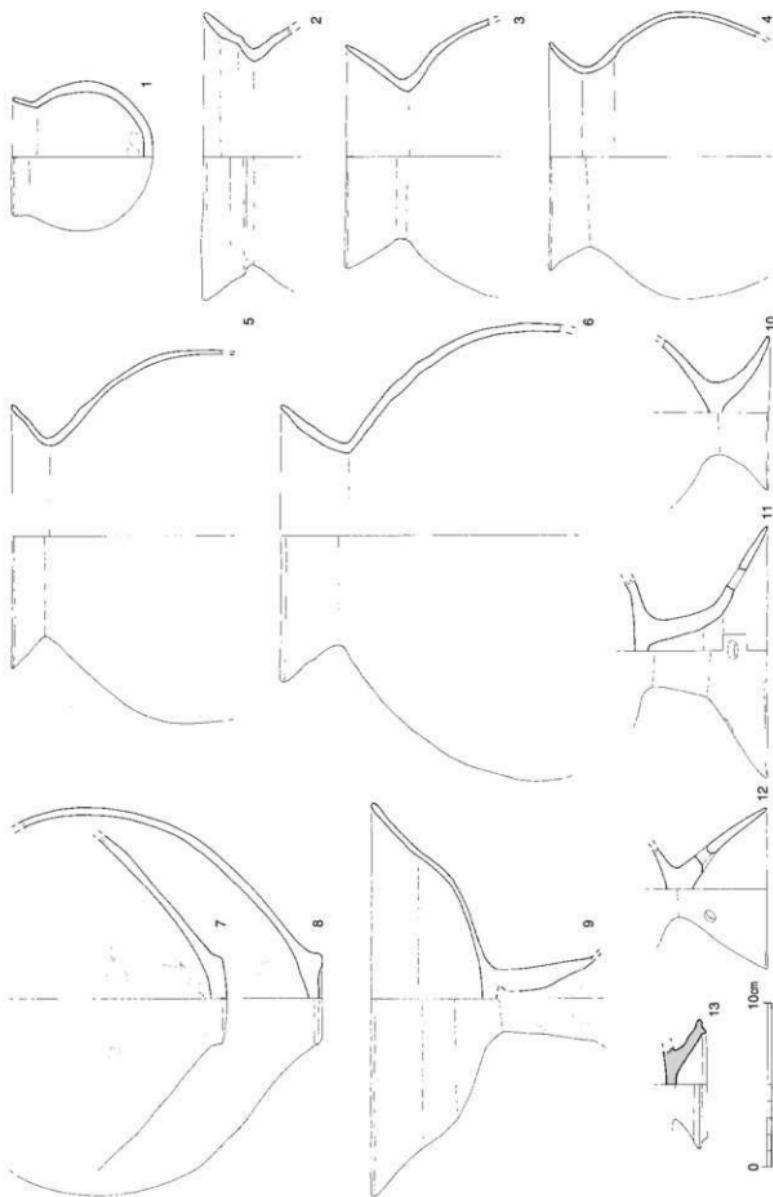
土器（図版49、第58図） 2の壺が炉跡から、7の甕及び9の高杯が屋内土坑から、他は埋土中からの出土である。

1は球形の体部に短く直立する口縁部を付す小型壺。2は頸部が短く強く外反する山陰系の二重口縁壺で、胎土に特別なものはない。



第57図 22号竖穴住居跡実測図 (1/60)

第58圖 22号聚落穴居跡出土器物測圖 (1/3)



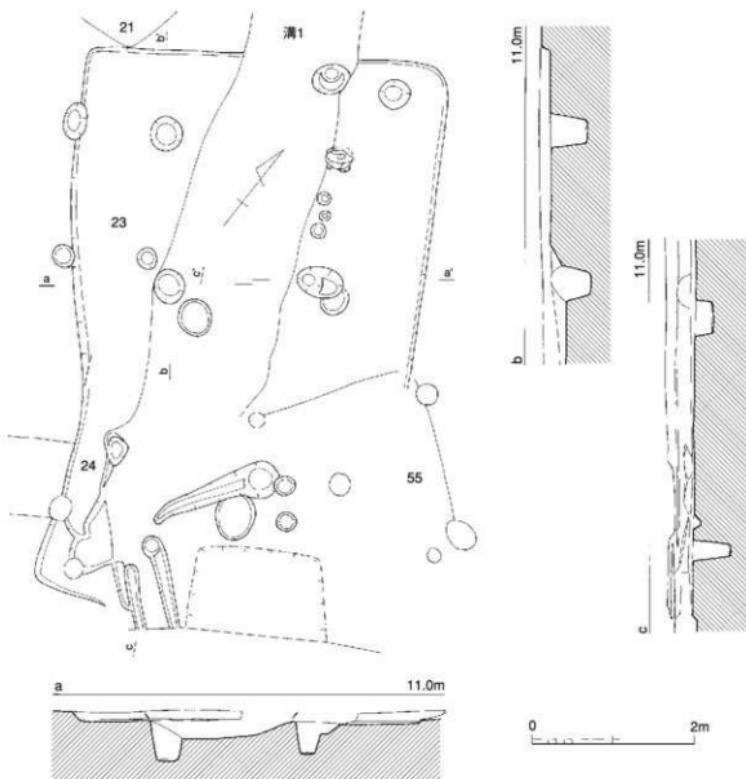
3～8は甕である。3は口縁部が直線的に伸びて端部に変化を加えていない。これはほぼ完周する。4は体部が張る形態で、口縁部にはあまり変化が見えない。9は口縁部を内彎させて、端部をつまむようである。9も口縁部にあまり変化を加えておらず、これは赤く焼き上がるようである。図示部はほぼ完存する。7・8はいずれも平底の底部。

9の高杯は形状がやや特異である。杯部上半が直線的に大きく開く点は一般的であるが、下半が緩く大きく彎曲する。器表が荒れているが、杯部内面上半は暗文が施されるようである。外面には範磨きが一部で観察できる。10は脚台である。11は脚部が完存する高杯で、脚裾が内彎する。円孔は4個である。12は小型器台で、これも図示部は完存。この2点も非在地系である。

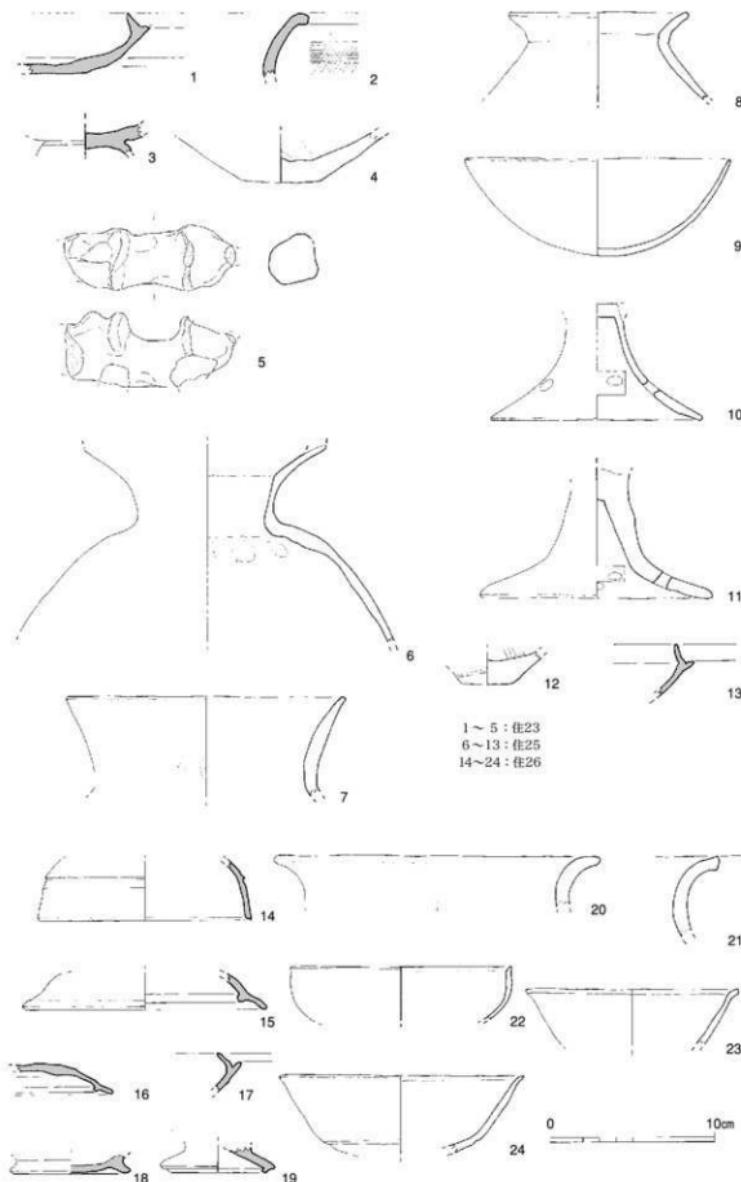
13は須恵器の脚台。内底面が非常に滑らかとなっていて、墨は見えないが転用窓の可能性がある。

23号竪穴住居跡（図版20、第59図）

21号住居跡の南東に接し、その南東隅にわずかに切られていたと判断された。この住居跡の中央



第59図 23・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第60圖 23·25·26號竖穴住居跡出土土器實測圖 (1/3)

部を1号溝が走る。また、南東部で24号住居跡と重複するが、その先後関係は確認できていない。

南西—北東方向の辺長は4.0～4.4mの幅があり、南東辺が失われているが主柱穴から復元して隣接する辺長は4m弱と推測される。カマドは北西辺に置かれたと思われるが、1号溝ですべて壊されている。なお、北に位置する主柱穴の上で、意図的に置かれたような状態で礫が検出された。

出土遺物

土器（図版49、第60図1～4） 良好的な出土土器はない。1は須恵器杯身、2は同甕の小片。2では頸部外面に刷毛目の痕跡が見える。3は須恵器高台付杯か。4は平底の土師器底部小片である。

5は土馬で本来は1号溝に伴うものであろう。土師質で灰赤色～灰黄褐色を呈し、頭部・尾・4足を欠く。図左側が頭部で、上部にたてがみが表現され、鞍の前輪・後輪ともにしっかりと表現されている。図右端は上方を向く尾が折れている。足は体部を大きく凹ませて、差し込んだようである。特に両前足がはずれた部分のくぼみが深い。胎土は精良といってよい。

24号竪穴住居跡（第59図）

23号住居跡検出時には24号住居跡の西隅がわずかに現れていたが、発掘の後には失われて連続的となってしまった。図では南隅とそれに連なるラインがこの住居跡の痕跡である。また、東側の55号住居跡とも大きく重複するが、これは先行する遺構である。ちなみに、遺構検出時に作成した平板測量図では24号住居跡の平面形は3.7mほどの方形として記録されている。

2本の柱穴を断面図に示したが、主柱穴も判然としない。

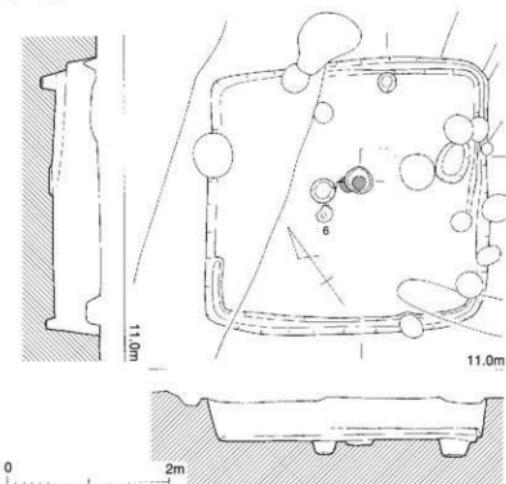
1号溝に大きく破壊されていることもあって、この住居跡に固有の出土遺物は確認できなかった。

25号竪穴住居跡（図版21、第61図）

調査区東辺の南寄り、住宅基礎の北東側に位置する。現状で他の住居跡との切り合いはないが、56号住居跡と重複する位置にあって、畑耕作に関わると思われる近現代の浅い溝に切られる。

平面形は3.4×3.5mの方形となり、深さは0.6mが残存していた。完周しないが、比較的しっかりとした周壁溝が巡る。

床面中央部からやや東に偏した位置に直径0.3mほどの浅い炉跡が検出されたが、主柱穴は不明である。また、南東辺に接するように、これも



第61図 25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

北東に偏して屋内土坑と思われる遺構がある。

出土遺物

土器（第60図6～13）6は口縁部が失われているが、現状で剥離部内側の色が帯状に異なっているので本来は二重口縁壺であったようである。頸部外面は外彎しながら大きく開くが、内面では中位に弱い稜線がある。図示部が完存。7は口縁部が外彎しつつ高く立ち上がる壺片で、焼けている。8は頸部が縮まって口縁部が短く外反するもので壺としてよからう。口縁部に変化を加えていない。

9は底部付近が完存、口縁部の1/3ほどが残存する椀。外底面にシワが多く見え、型押しで作ったものであるかも知れない。10は図示部が完存する高杯脚部で、透孔は4個ある。5も似た器形であるが、上方から見ると透孔は等間隔ではなく、長方形をなして配置されている。

12は平底で不整形となる壺底部、13は須恵器杯小片である。

26号竪穴住居跡（図版21、第62図）

25号住居跡の北に近接し、耕作に伴うと思われる溝に切られる。3.9×4.3mの方形に近い平面形をもち、深さは0.2mほどが残存、南半の三辺には周壁溝が掘削されている。

後世の溝が北辺を破壊しているために、カマドは痕跡を残さない。主柱穴は4本である。

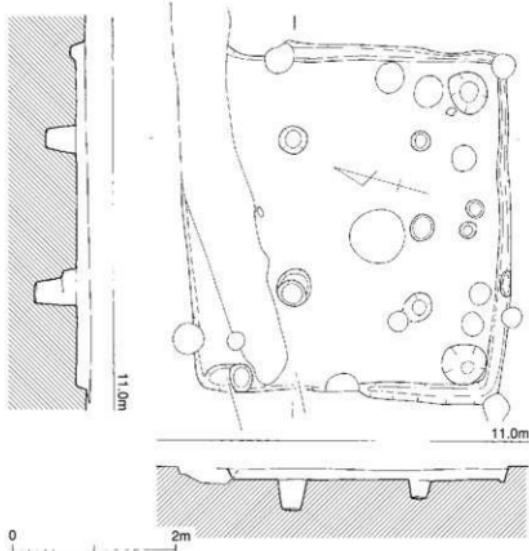
出土遺物

石製品（図版57、第167図4・6）4は滑石製の円盤で、直径2.3cmほど、厚さ0.4cmほどの大きさである。表面を磨った条痕が表裏で45度ほど斜位となる。6は灰黒色に近い変岩製の円盤で、直径2.5cmほど、厚さ0.4cm

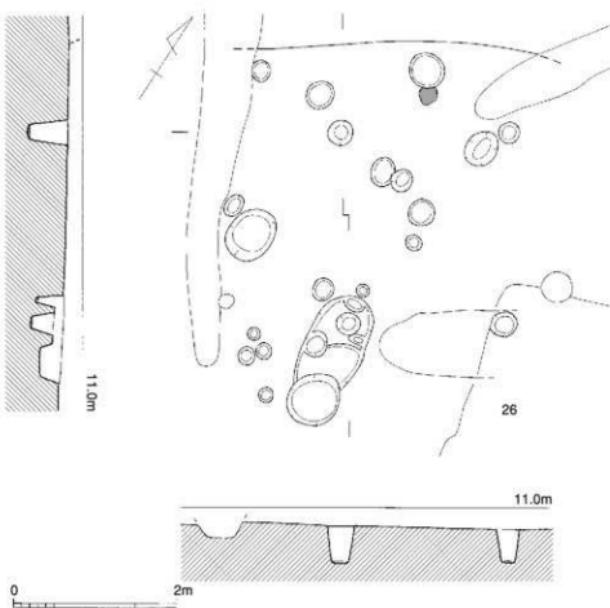
ほどの大きさである。表裏に磨った跡があまり見えず、側面は平滑化せずにいくつかの面をもつ。中央付近に中途で穿孔を止めた痕があり、その横、中央からやや偏して新たに穿孔している。

土器（第60図14～24）

14～19は須恵器。14は口端部に面をもち、天井部・口縁部界にシャープな稜を作り出す杯蓋であるが、小片。15は返りが小さく口縁部が伸びる杯蓋で、外面に灰を被る。胎土・調整は良好。16も同じような器形であるが、これは胎土が粗く肉薄となる。17は通有の古墳時代の杯身小片。18



第62図 26号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第63図 27号竪穴住居跡実測図 (1/60)

は杯身高台、19は脚台である。

20以下は土師器。20は小片のため口径に不安がある。21は口縁部が大きくC字形に外反する小片。22は口端部を小さく外反させる椀で、胎土・作りは良好。23・24はいずれも焼けて赤くなる高杯杯部。ともに口縁部が直線的に開いて端部を小さく外反させる。

27号竪穴住居跡 (図版21、第63図)

26号住居跡の北西、それと重複する位置にあるのだが遺構の北端付近がわずかに残存するだけで面的な切り合い関係は確認できなかった。想定される主柱穴の一つが同住居跡内にあるが先後は不明。

北東辺に近い部分でカマドの火床が検出された。それと想定される主柱穴から、一辺の規模は4.6mほどと推定できる。

深さがなかったこともあり、図示できるような出土遺物はない。

28-1号竪穴住居跡 (図版22、第64図)

調査区の南西端近く、一部が市道の下へ続く位置にある。31号住居跡を切り、29号住居跡に切られている。遺構検出時には全く気付かなかつたのであるが、結果的には南側で床面に小溝が見つかって、カマドがこの小溝と北辺の中央にあることからこの住居跡自体が2つの遺構が重複していることが判明した。改めて平面形を見ると、南辺・北辺は平行しておらず、東辺も南東隅に近いと

ころでわずかに屈曲する。従って、重複する遺構の中、北側を28-1号、南側を28-2号住居跡として以下を続ける。

平面形は4.2×4.8mの方形に近い形状となり、深さは0.1mほどが残存していた。西辺で青灰色砂質土を用いたカマドの袖が検出された。火床は確認できたが、支脚は残っていなかった。

主柱穴は4本であるが、想定した柱穴は比較的小型のものである。

出土遺物

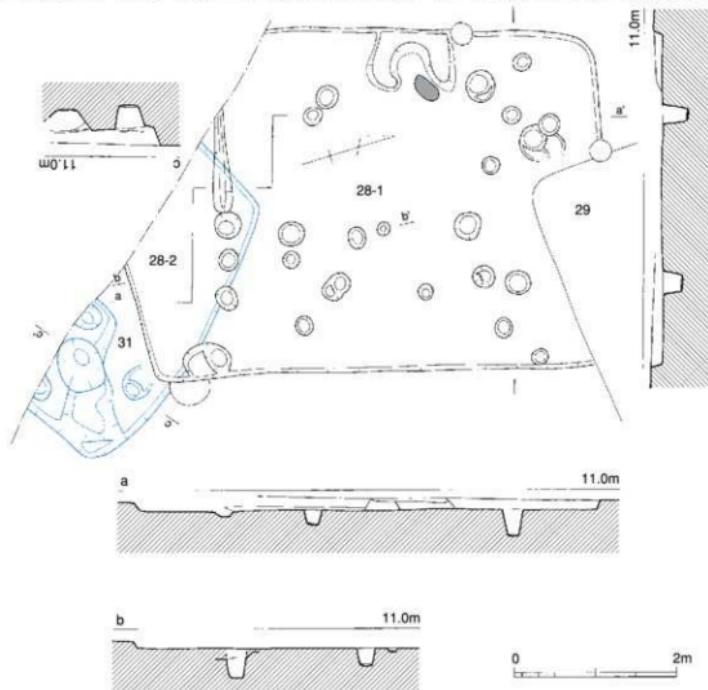
土器（第65図1～4） 図化に堪える遺物は乏しかったが、2・4は「カマド袖下」の注記があるのでこの住居跡に伴うとして良いのであろう。他の2点も出土地点を記していないので、まとめてここで紹介する。

1～3は須恵器。1・2はいずれも1/4ほどの残片で、よく似た器形となる。胎土・調整も良好である。3は腹の口縁部小片。端部は丸く終わる。

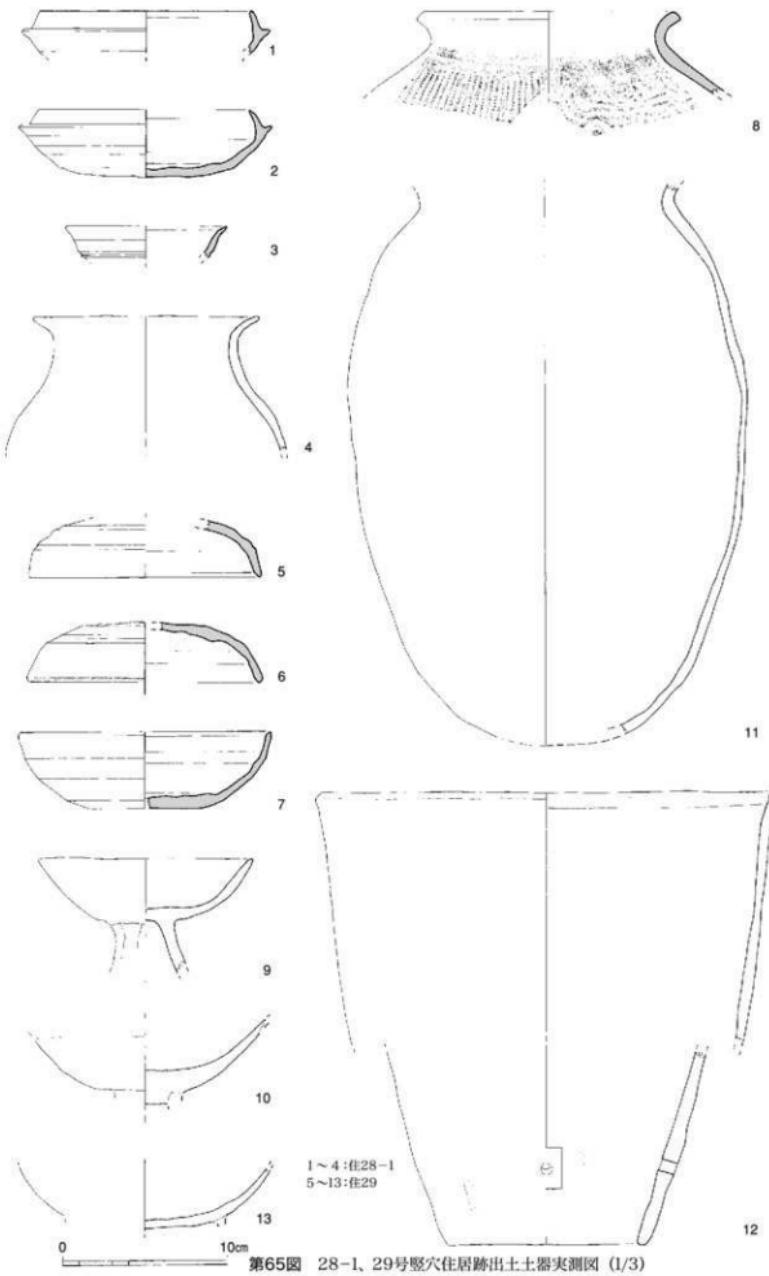
4は土師器甕の小片。

28-2号竪穴住居跡（図版22、第64図）

上記したように28-1号住居跡の南に重複する遺構で、確認できたものは東南隅だけである。主柱穴を検討してみたが、断面に示した南側の柱穴は間違いないのであろう。対応する北側は浅く、



第64図 28-1・2、31号竪穴住居跡実測図 (1/60)



北に対応させうる西側の柱穴は深さの記録を失念していて検討できないが、配置された位置から見てこの3基は妥当であろうと思われる。

固有の出土遺物は確認できていない。

29号竪穴住居跡（図版22・23、第66・67図）

28号住居跡の北東にあってそれを切る。東辺は35・38号住居跡を切つていて、そのために北東隅は床面を上手く発掘できなかった。平面形は $3.6 \times 4.0\text{m}$ のほぼ方形に近いプランとなり、深さは 0.3m 近い。

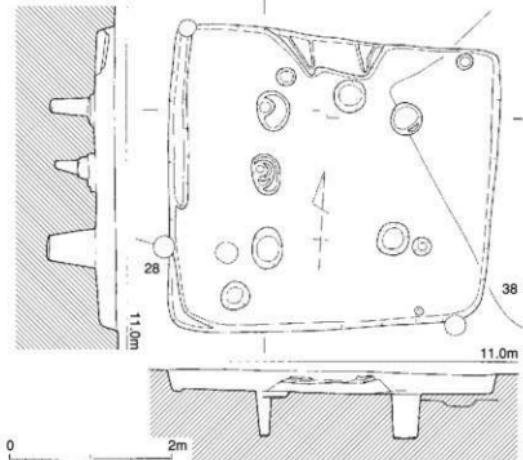
カマドは北辺にあって、これは非常に残りが良く、土師器高杯を二つ重ねた支脚の上に土師器甕が置かれた状態で検出された。明黄褐色砂質土を多用したもので、カマドの袖はほぼこれだけで作られていて、かつカマド背面にも厚く置かれていた。背面では更に暗茶褐色土などが下位に置かれていて、例を見ない構造となっていた。なお、図は平面と断面でずれがあるが、これも袖の内側がほとんど焼けていないために誤認したものである。

出土遺物

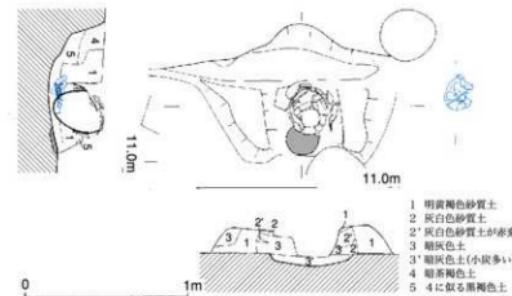
鉄滓（第170図2）「床付近」出土の鉄滓。重量は 28.4g である。

土器（図版49、第65図5～13）5～7・8は須恵器、他は土師器である。5・6はカマド周辺、7は住居跡北東隅付近、9・10・12・13はカマド内からの出土である。

5・6は1/4が残存する杯蓋。5は胎土・作りともに良好で、口端部に面をもつ。6は胎土良好であるが、調整は雑な感じとなる。口端部外面に刷毛目状の処置を行つて面を作るのが、内面には面をもたない。7は底部が平底となって、体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる椀形の土器である。外底面は撫でて、その他の部位も横撫で仕上げている。焼成甘く、口縁部がやや歪む1/3ほどの残片。8は口



第66図 29号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第67図 29号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

縁部を加飾しない甕である。

9・10はカマド支脚に用いられた高杯であるが、10が下に伏せられていて、その上に9が重ねて伏せられていた。いずれも焼けて変色する。11は支脚の上に乗っていた長胴の甕で、図示部はほぼ完存する。出土時は口縁部も乗っていたが、接合しなかった。外面が焼けていて、器表のほとんどが剥落している。12は甕で、接合しえないが同一個体である。出土時は割られて11に添えるように周囲に置かれていた。体部下端近くに焼成前の穿孔がある。

13は土師器椀で、これも器表のほとんどが剥落、高台もすべて失っている。灰黄色となる。混入であろう。

30号竪穴住居跡（図版23、第68図）

調査区南東隅付近で一部を検出した。検出した辺は4.0mの長さであるが、大部分が市道下へ統くことから隣接する辺長はわからない。深さは0.1mに満たない。

この住居跡発掘後に確認できた柱穴は辺に平行して位置する2基だけであるが、これは浅すぎる。後述するカマドを有する62号住居跡発掘後に検出した2基の柱穴の南側の1基がこの30号住居跡に伴うものと思われる。

出土遺物

土器（図版50、第69図1～3）1は須恵器杯蓋で、3/4が残存する。淡灰色を呈し、外面は凹凸が甚だしいが胎土・調整ともに良好である。2は須恵器甕でこれも丁寧に作られている小片。頸部外面に刷毛目が見える。

3は土師器甕小片で、これは口端部の形状に不安がある。

31号竪穴住居跡（図版23、第64図）

28-1・2号住居跡の南にあってそれらに切られ、半ば以上が市道下となる。判明した辺長は3.8m、深さは0.2mほどであった。

炉・カマドや主柱穴といった主要な構造は不明であるが、東隅付近の床面が乱れていて、あるいはこれも別の遺構が重複しているのかも知れない。

出土遺物

土器（図版50、第69図4・5）4はミニチュア土器で、器表剥落するために口端部の形状は定かでない。5は土師器甕で小片のため復元口径には不安がある。

32号竪穴住居跡（図版24、第44図）

11号住居跡とした遺構に切られている。検出時には西辺付近で比較的まとまった土器が出土していて住居跡としたが、東西長は2.0mを測るのみで住居跡とするには小型に過ぎる。南北長は2.6m以上で、深さは0.1mに満たない。

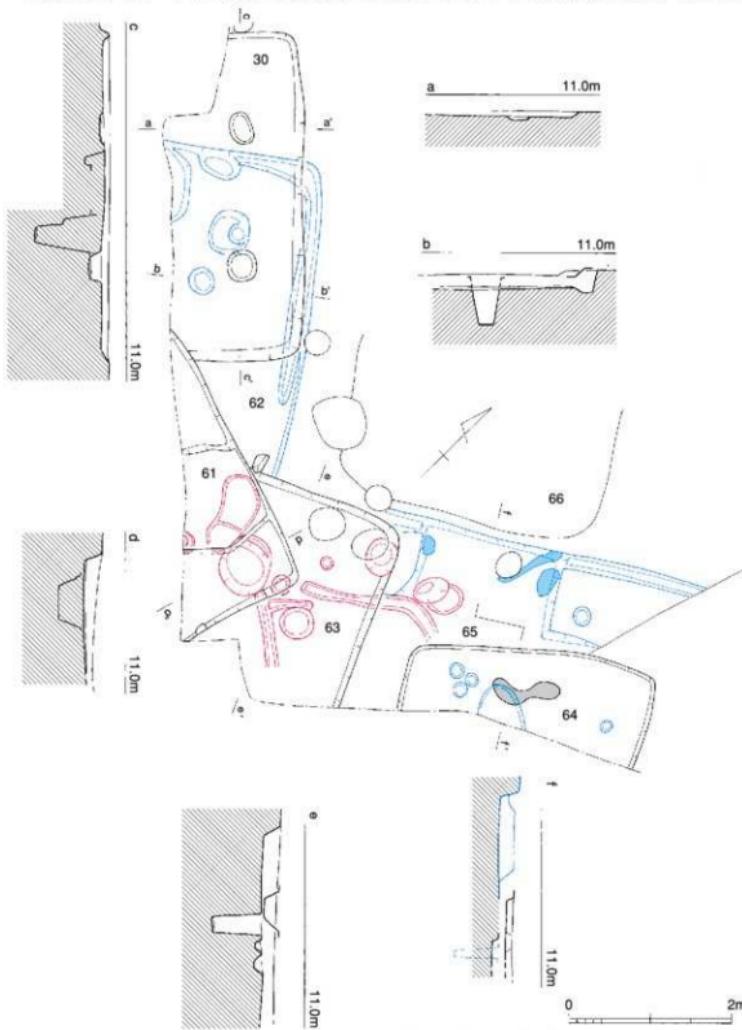
出土遺物

土器（第69図6～10）いずれも「上層」の注記がある。6は立ち上がりが肉厚の須恵器杯身で、受け部が厚くなるのは成形の手抜きであろう。7は小片。8は口縁部が強く外反する小片。9は口縁部の外反が弱く、頸部内面の稜はしっかりしている。10は肩部に櫛描直線文・波状文を施すが、いずれも乱れている。胎土などに特別なものは見受けられない。

11~14は「住32付近表層」の注記があって、必ずしも住居跡に伴うものではないがここで紹介しておく。11は突帯で加飾する口縁部小片。12は土師器壺小片。13は焼成が甘い高台付杯で、疊付が外傾する。14は凸面に縄目叩きをもつ平瓦で、凹面は摩滅して何も見えない。

33号竪穴住居跡 (図版24、第70・71図)

1号溝が大きくカーブする内側に4号土坑とした遺構があるが、その西側に近く位置する。10・35・



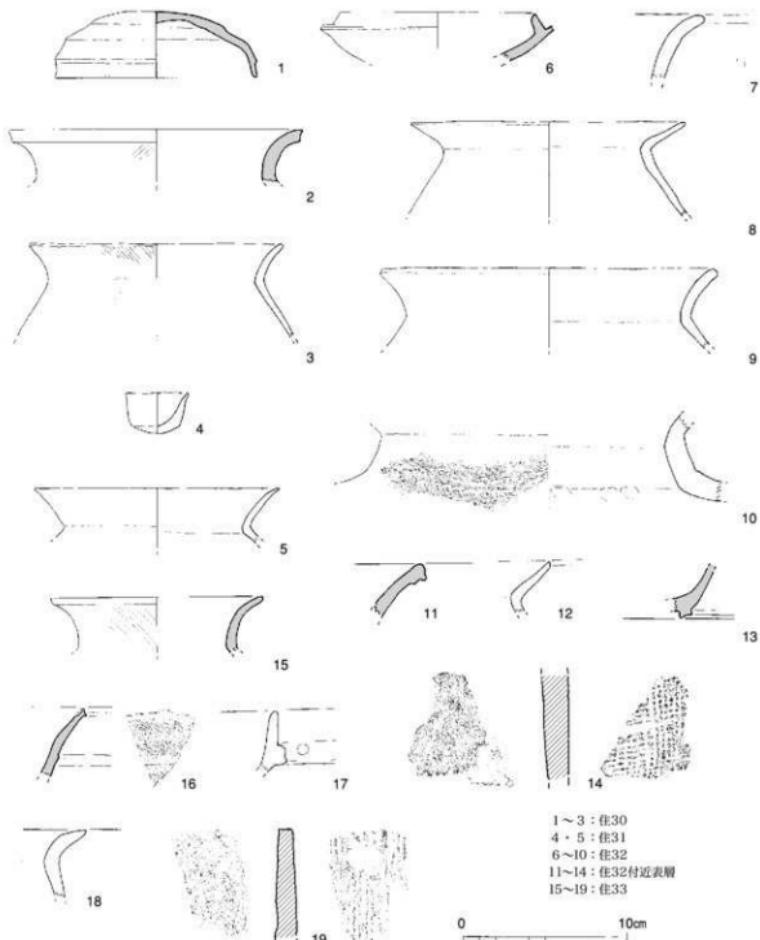
第68図 30・61~65号竪穴住居跡実測図 (1/60)

36号住跡などを切り、34号住跡に切られていた。ほぼ4.0m四方の正方形の平面となり、深さは0.2mほどであった。主柱穴を確認できなかったために断面図を略している。

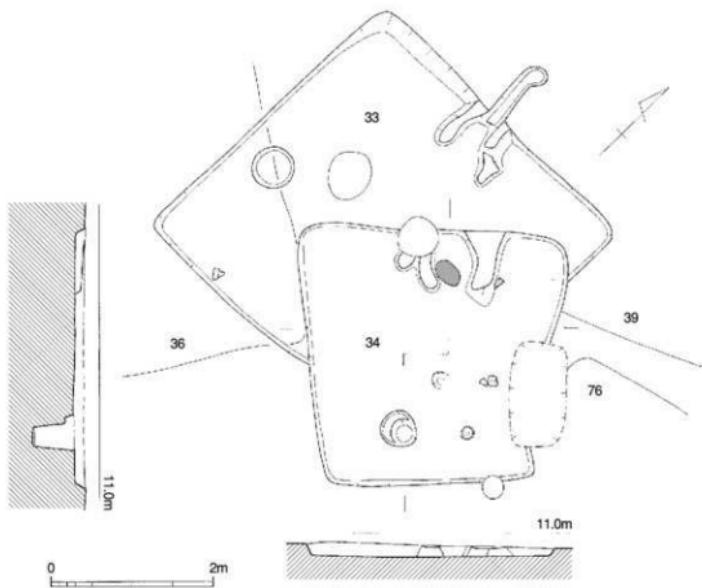
カマドは北辺にあって、今回の調査区内で唯一煙道が外側へ長く延びる。袖は灰黄色粘質土を使用して作られていて、断面方形となる礫を支脚としていた。支脚の前面は火床となって赤変する。なお、今回の調査で数少ない、カマド袖の内側が赤変・硬化した例であった。

出土遺物

石製品（図版58、第168図5・第171図5） 第168図5は小豆色を呈するいわゆる立岩産の石庖



第69図 30~33号竪穴住跡出土土器実測図 (1/3)



第70図 33・34号竪穴住居跡実測図 (1/60)

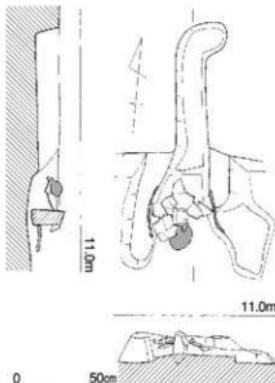
丁片。現状では両面穿孔された孔の位置が偏っていて、再加工されたものであろうか。刃部は鋭い。第171図5は目の細かい花崗岩製の砥石。図示した面はまだ緩やかな凹凸を残すが、左側面や背面は外周を除いて非常に滑らかとなっている。また右下側面も同様である。図上方は欠損。熱を受けているようで、破面は灰白色であるが赤くなった部分が多い。

土器（第69図15～19）15は口縁部を加飾しない須恵器壺で、1/4ほどが残存する。胎土は良好。16は丁寧に櫛描波状文で施文された須恵器壺小片。口縁部をわずかに肥厚させて外面にシャープな稜を作る。

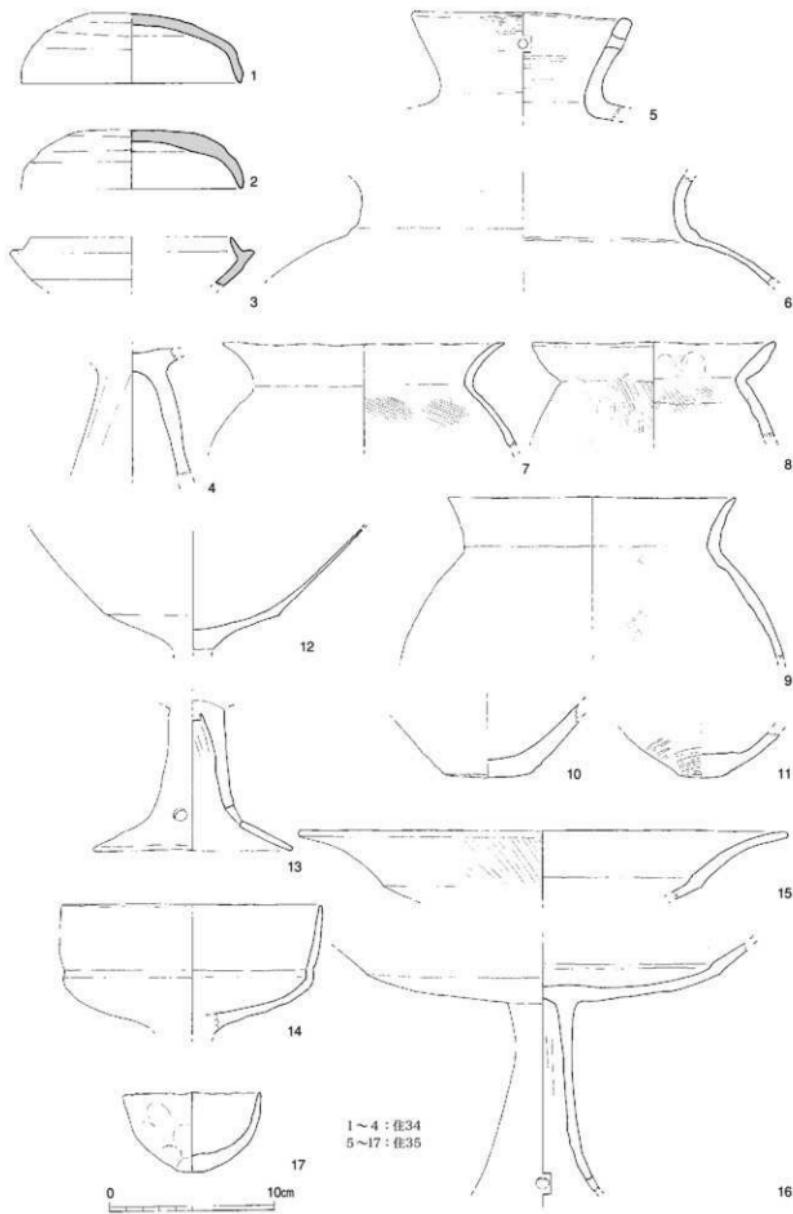
17は二重口縁壺小片で、外面に円形浮文が付される。18は口縁部が丸く短く外彎する壺小片。19は平瓦で、これも四面には何も見えない。

34号竪穴住居跡（第70図）

33号住居跡の南東部を壊して作られた住居跡で、76号住居跡も切る。カマドが覗いていたために精査して検出したが、結果は2.5～3.2×3.2mの不整形となり、いささか不安がある。深さは0.2m弱となる。これもカ



第71図 33号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第72図 34・35号窯穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

マド以外の主柱穴等は不明である。

カマドは北西辺の中央付近にあって、青灰色粘質土を袖に使用していた。火床は確認できたが、支脚は残存していないかった。

出土遺物

土器（図版50、第72図1～4） 1は完存する肉厚の須恵器杯蓋で、調整は丁寧になされる。2も肉厚の杯蓋で、これも調整が丁寧である。焼成が甘い1/2の残片。3も胎土・作りともに良好な須恵器杯身で、1/4の残片。

4は図示部が完存する土師器高杯で、器表が荒れている。

35号竪穴住居跡（図版24、第73図）

調査区西側にあって、36号住居跡を切り、33・37・38号住居跡に切られている。北西辺長は4.8m、隣接する辺長は不明であるが、38号住居跡の北主柱穴の下位で検出した土坑を屋内土坑とすれば4.4mほどとなる。深さは最大で0.4mほどが残存する。

南西辺に沿って幅1.0mほどのベッド状遺構があり、北東辺でも同規模のベッド状遺構が置かれてこれは北西辺に続くが、幅が0.5mと半分になっていた。検出面からベッド状遺構までの深さは0.2m、同高さも0.2mほどであった。

住居跡内には後世に掘り込まれた柱穴が多く、炉や主柱穴は不明で終わった。

出土遺物

鉄製品（図版58、第169図10） 全長9cmほどの有銎鉄斧で、完存するが銹化が著しく細部が見えない。

石製品（図版58、第168図6） 灰色の頁岩質砂岩を用いた石庖丁片。背は磨きが及ばない部分があるが、刃部側は丁寧に研磨されている。これも両面穿孔

土器（図版50、第72図5～17） 5は図示部が完存する壺口縁部で、口縁部下に焼成前の穿孔がある。肉厚で胎土も粗い。6は頸部が大きくC字形となる壺で、口縁部を欠く。肩部に低い突帯が巡る。7は剥落のため、口端部の形状に不安がある。8は口縁部が肉厚で、形状が不整となる壺。9も口端部の形状に不安がある。

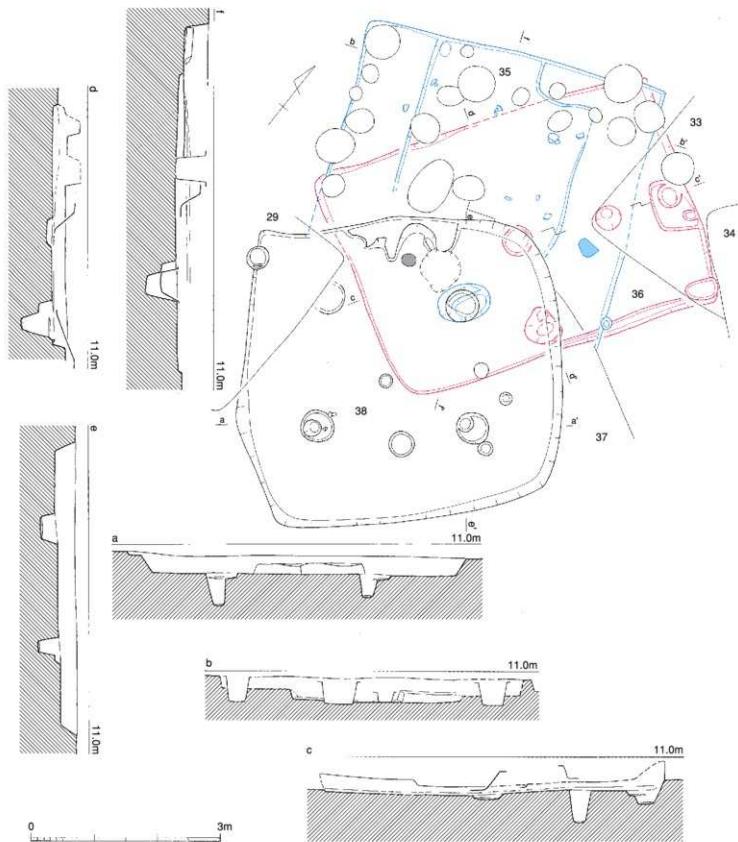
10・11は平底の底部であるが、体部との境界は丸みをもつ。11は叩き痕が残る。

12は口縁部が直線的に伸びる高杯であるが、剥落がひどい。13は図示部がほぼ完存する脚部で、焼けて赤変する。孔は3個。14は杯部下半が浅い楕形となり、口縁部が直立するタイプ。15は杯部上半が浅く大きく開く在地系の高杯で、内面に小さな弾けが多く見られる。外面には疎らな刷毛目が残る。16も同形態のものであろう。

36号竪穴住居跡（図版24、第73図）

35号住居跡に切られるほか、33・37・38号住居跡などにも切られていた。3.8×5.2mの長方形プランをもち、深さは0.4mほどが残存。床面中央からやや南東に偏して直径0.4mほどの炉があり、その北東のしっかりした柱穴が主柱穴の一つであろう。対応する柱穴の位置には攢乱坑があるが確認できていない。

通常、出入り口に利用されたとされる屋内土坑は南東辺中央のものであると思われるが、ここで

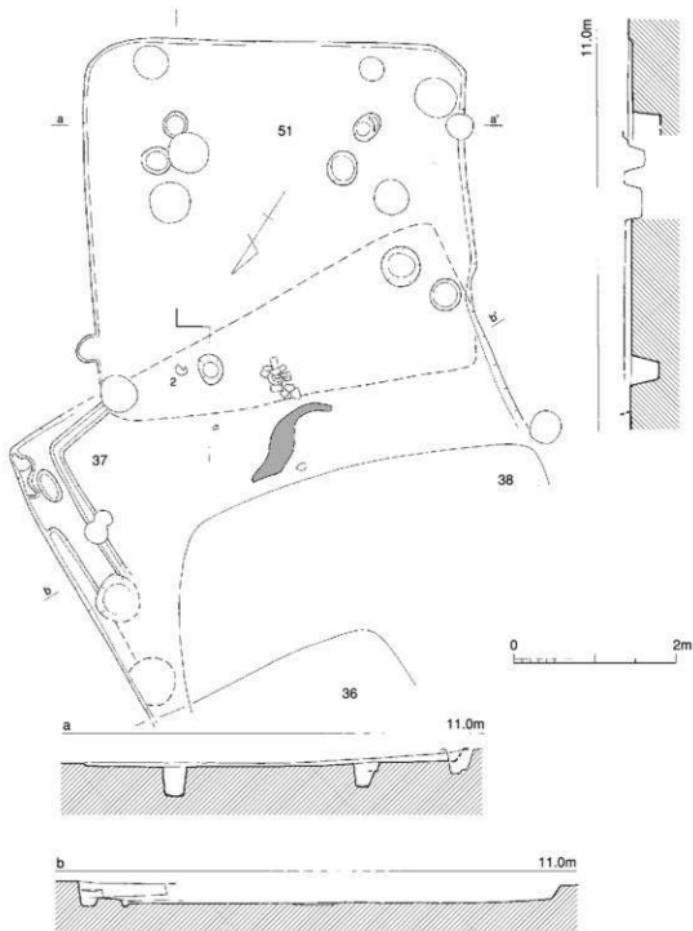


第73図 35・36・38号竪穴住居跡実測図 (1/60)

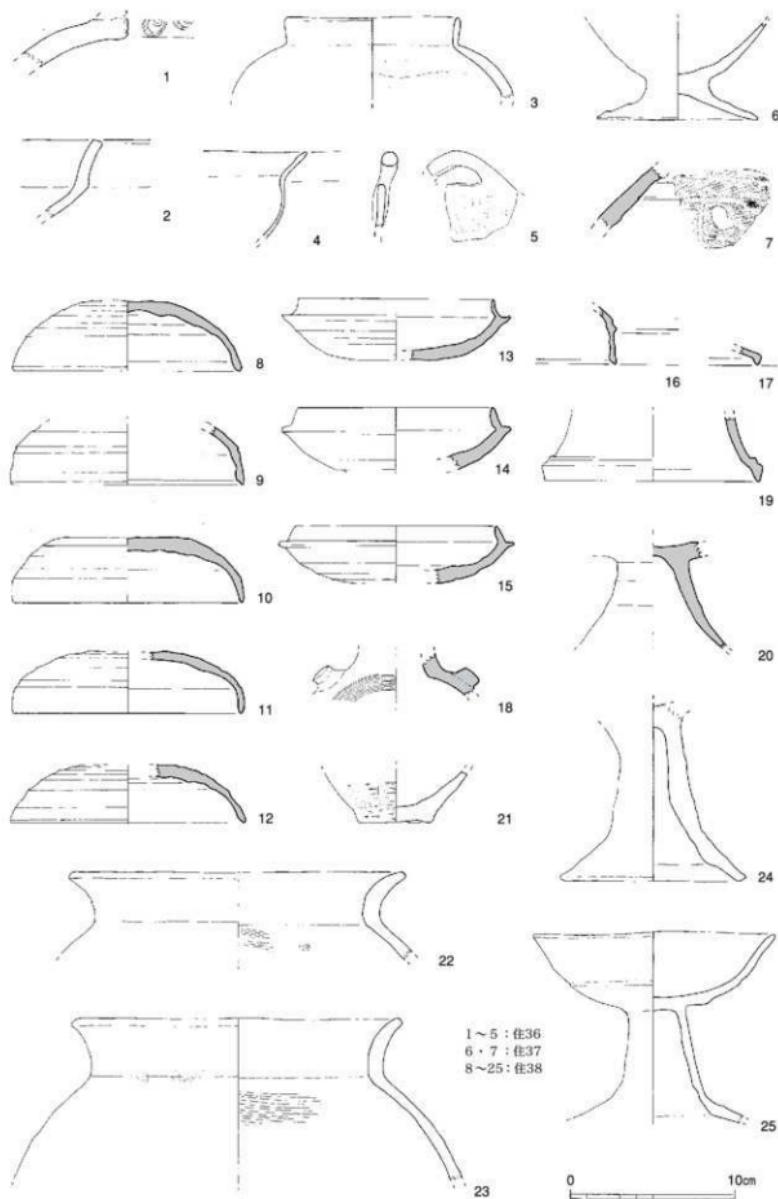
は北東辺中央からやや南に偏した位置にも屋内土坑があって、これには蓋受けのような掘り込みがあった。性格の異なる複数の屋内土坑が存在してもよいのであろうが、一般的ではない。

出土遺物

土器 (図版50、第75図1~5) 1は頸部に竹管文を付す円形浮文を並べる二重口縁壺片。2も二重口縁壺であろう。胎土良好で黄白色となる。3は口縁部が短く直立する短頸壺。4は鉢あるいは甌の小片で、器肉が薄くなる。5は半環状把手を付す異形の鉢。特に変わった点は見受けられない。



第74図 37・51号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第75図 36~38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

37号竪穴住居跡（第74図）

調査区西端付近に位置する。この付近は最も遺構の把握が困難であった場所で、遺構検出のために数cmずつ幾度か掘り下げたため、結局要領を得ないままに終わった遺構もある。37号住居跡もその一つで、東隅付近は確認できだが、南東辺が検出できずに終わった。南西辺でその一部と思われるラインを想定して図のように復元したが、柱穴等は不明である。

想定される一辺の規模は5.8mである。北東辺は部分的に周壁溝があって、その内側にさらにL字形の溝があるので、これも2軒の住居跡が重複している可能性がある。

出土遺物

土器（第75図6・7）6は脚付鉢であろうか。7は上下を沈線で画した文様帶に櫛描刺突文を刻む須恵器甕小片。

38号竪穴住居跡（図版25、第73・76図）

調査区南西部に位置し、35～37・51号住居跡を切って、29号住居跡に切られる。平面形は4.8×5.2mの方形に近いが、各辺が小さく膨らんでいる。深さは最大で0.4m近くが残存。

カマドは北西辺にあって、青灰色粘質土を用いて袖を作っていたが、検出した形状は乱

れたものであった。火床に接して土師器高杯が倒置されていた。主柱穴は4本。

出土遺物

石製品（図版58・59、第168図7・第171図3）第168図7は表面が淡灰色、新しい破面が灰黒色となる凝灰岩製の石庖丁片で、刃部がかろうじて残存する。刃部の研ぎ出しは幅が狭く、鈍重な刃という感じとなる。第171図3は灰黄色頁岩製の砥石で「住38南東辺床付近」の注記がある。最も使用された面は図示した面であるが、図左上の幅2mmほどの狭い面も含めて欠損部を除く全面が使用されている。

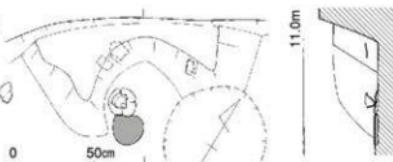
土器（図版50、第75図8～25）13・16・19には「住38南東遺構検出」とあって、厳密にこの遺構に伴うものかはっきりしない。8～20は須恵器、他は土師器である。

8～12の杯蓋は口径が14.0～14.4cmと規格が近いが、9だけが口端部内側に面を作り、10・11は口縁部が直立、12は口縁部が浅く開くなど細部の形状が異なる。13～15の杯身も口径は12.0～12.4cmと法量は近いが、13だけが立ち上がりが薄く内彎する。16は古式の須恵器、17は8世紀の須恵器でこれは混入であろう。18は提瓶片で、粘土板を貼り付けた肩部の一方が残る。19は短脚高杯の脚部と思われる。胎土・調整は良好。20も図示部が完存する高杯で、胎土・調整とも良好である。

21は不整形の小型平底。22は口縁部の1/4が、23は1/3が残存する甕。24は脚端部の1/4が残存、上半部は完周する。焼けて荒れる。25はカマド内で支脚に転用されていた真っ赤に焼けた高杯で、脚端部を除いて完存する。杯部中位には甘い沈線を刻んで口縁部と下位を区画している。

39号竪穴住居跡（図版25、第43図）

東辺は4号土坑に壊され、南辺はどうしても検出できずに終わった。10・80号住居跡を切る。



第76図 38号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

0

50cm

1.0m

1.1m

0

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

</div

北西辺のカマドが早くから認識できていたが、10号住居跡などと重複するために柱穴は非常にわかりづらく、最終的にすべての住居跡を発掘して後に4本の主柱穴を確認できた。主柱穴の配置から復元すれば、辺長は3.4×4.0mほどとなる。本来の深さは0.1mほどであった。

カマドは青灰色粘質土を用いて袖を作り、0.1m弱の高さが残存していた。内部から土師器高杯が伏せられた状態で出土、その前面に赤く焼けた焼土があるが、床面からやや浮いた位置であった。

出土遺物

鉄製品（図版58、第169図3） 小片であるが、厚さから見て鉄錆と思われる。

石製品（図版59、第171図4） 緑味帯びる灰色の層灰岩と思われる砥石の小片。3面が使用されているが、各面ともそれほど使い込まれた感じではない。遺構検出時の出土。

土器（図版50、第78図1～4） 1は口端部の一部を除いて完存する杯身で、「住39 土坑4」の注記があるがこの住居跡に伴うものと見て良いだろう。口径13.0cmを測り、立ち上がりがまだ長い。丁寧に調整されるが、焼成が甘い。2は口縁部がかなり大きく伸びていて、壺甌いずれともいえるような形状となる。3は小片で、復元口径等に不安がある高杯。4はカマドに伏せられていた高杯で、脚部を失っていた。肉厚で、口縁部下の稜がしっかりとしている。

40号竪穴住居跡（図版25、第79図）

調査区北東端付近にある。検出時に位置を記録したが、それも北西辺の一部が判明したのみで、非常に浅くて発掘後にはわからなくなってしまった。ただ、41号住居跡との重複部では、これが覆っていた。

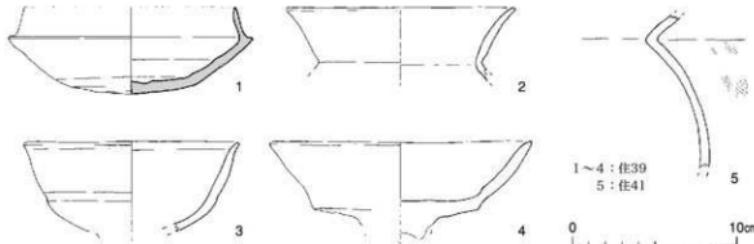
推定北西辺からやや離れて赤変部があり、カマドの火床であろう。主柱穴は判然としない。

出土遺物はない。

41号竪穴住居跡（図版26、第79図）

40・42号住居跡に切られ、5.0×5.7mの方形に近いプランをもつ。コ字形にベッド状遺構を配するが、検出面からその上面までの深さはわずかに5cmに満たない浅いものであった。ベッド状遺構の床面からの高さは0.2mほどである。

主柱穴は3本を確認したのみであるが、通常のようにベッド状遺構の隅に2本を置く。炉跡はこ



第78図 39・41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

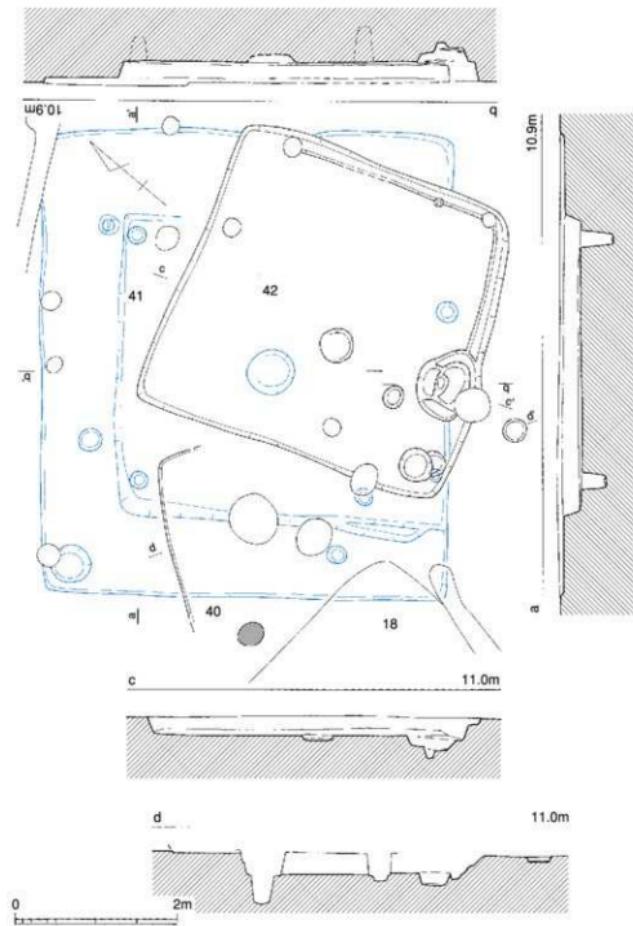
れも主柱穴の中心から東へやや偏している。

屋内土坑は42号住居跡の屋内土坑が重複しているよう、複雑な形状となる。

出土遺物

石製品（図版58、第168図8） 片岩系の石材を使用する石庭丁で、今回の出土例中唯一完存する。幅11.6cm、高さ3.4cmで、厚さは0.8cmとなる。重量は32.9g。刃部は丸みを帯び、背の凹んだ部分には研磨が及んでいない。

土器（第78図） 口縁部が強く外反する甕片を図示しているが、ベッド上で下部が浅い楕形となり、口縁部が大きく開く高杯が潰れた状態で出土していたことから、帰属時期は窺える。

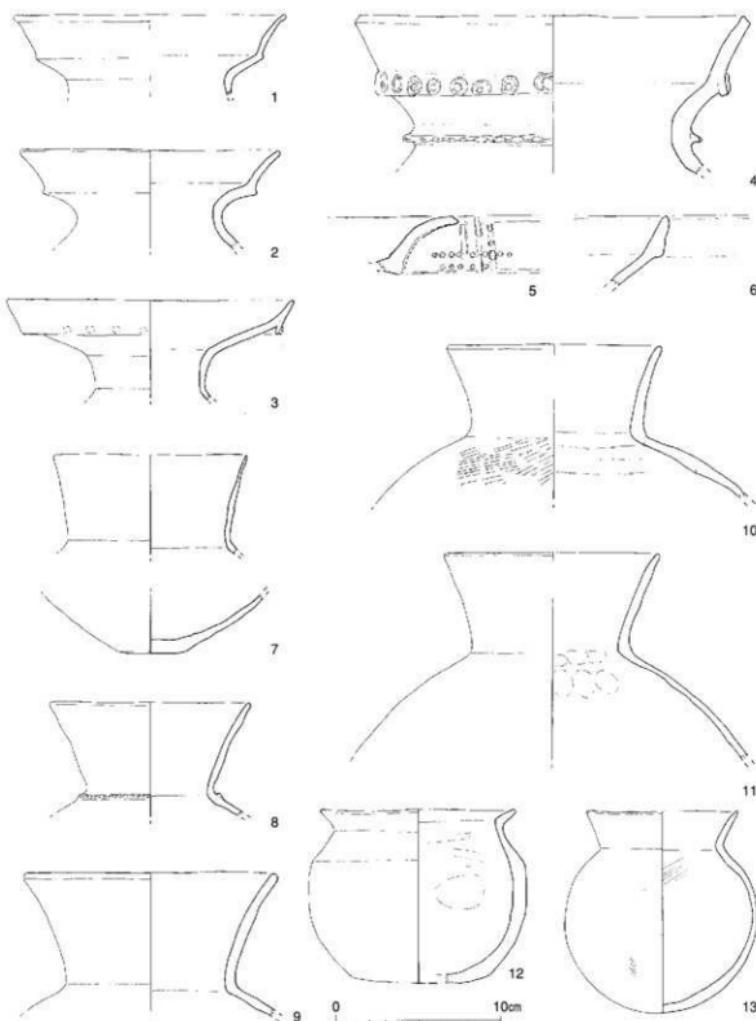


第79図 40～42号竪穴住跡実測図 (1/60)

42号竪穴住居跡 (図版26、第79図)

大部分が41号住居跡の上に掘り込まれていて、多量の土器が遺棄されていた。平面形は3.6×3.6～4.0mとほぼ正方形となるが若干歪である。深さは0.2mほどが残存していた。

東・南辺では溝底幅0.1m、床面からの深さ0.1m弱の周壁溝が置かれ、屋内土坑は南辺にある。炉跡・屋内土坑は対応するように配置されるが、住居跡中心から随分と西側へ寄っている。



第80図 42号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)

主柱穴は不明であった。

出土遺物

鉄製品（図版58、第169図2） 鍋のない鉄鎌で、茎を欠く。

土器（図版50・51、第80～84図） 1・2は頸部がC字形となり、浅く開く口縁部を付して二重口縁とするものである。5は頸部が残らないが二重口縁の成形法は同じで、外面に細い粘土紐3条を縦位に並べ、頸部に繊細な竹管文を2段付す。内面は縦方向の籠磨きで仕上げるようだが、外面の調整は見えない。赤味をもって焼き上がるが、胎土に特徴的なものは見えない。3は直立する頸部をもち、大きく開く口縁部を付した後に口端部外面下に粘土紐を付して見かけ上の二重口縁とするもので、4もそれに近い。3は非常に荒れているが、頸部に円形浮文の痕跡がかすかに見え、18号住居跡Iのような波状文が内外面に施文されていた可能性がある。4は大振りな土器で、竹管文を付す円形浮文を巡らせるが、これには波状文はない。頸部の刻目突帯は突帯は在地系の要素であり、折衷型の土器といえようか。6は3・4と同じような技法になるものの、頸下に凹部を残さず断面を三角形とするものである。

7～11は直口壺。7は口頸部の開きが小さく、これは剥落のために端部の形状が不安である。平底の底部が同一個体のようである。8は頸部に刻目突帯を巡らせる。9・10は焼けて赤変、11は黄白色である。

12は口縁部が短く外折し、平底に近い底部をもつ個性的な壺で、体部の1/2が残存する。口縁部は不整で、体部内面上半では籠削りが見える。これも焼けて赤くなる。13は小型壺ではほぼ完存するが、これも器表の大部分が剥落する。

14は口端部を欠く鉢で、内外面に赤色顔料を付す。小さなレンズ状の底部となり、丁寧に作られている。15は小片、16は3/4ほどが残存するが、いずれも口端部の本来の細部はわからない。

17は口縁部が短く外反する小型の壺で、1/4が残存。18・19は口縁部が緩く外彎するもので、19は口端部を断面方形とする。20も度合いが弱いが外彎の傾向が窺える。

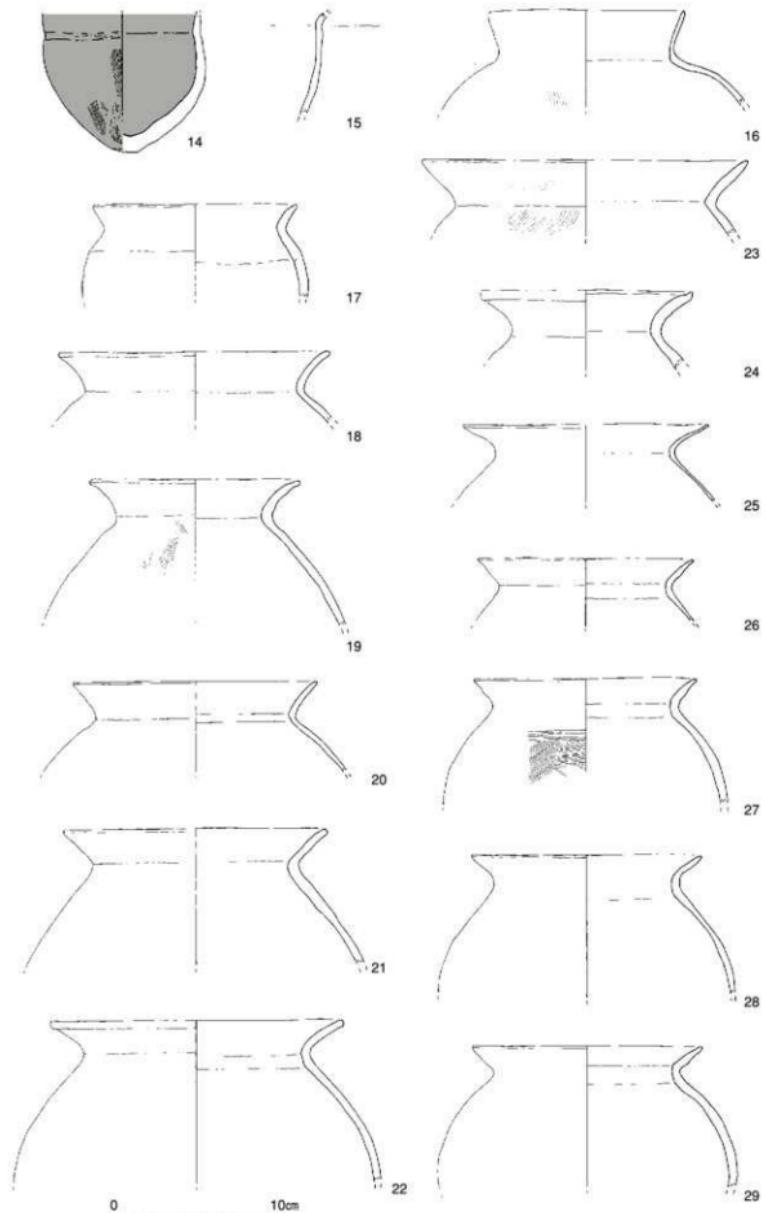
21～23は外反直行する口縁部をもつ壺で、23は口端部が薄くなる。

24～32は口縁部に変化を加える、畿内系土器の影響を受けたと思われるもの。口縁部外面に膨らみをもたせたり、口端部を摘むものを図示した。これらもやはり熱を受けて赤く変色し、器表が剥落し細部が失われたものが多い。中で、32に図示した土器は頸部内面に稜をもち、胎土が明らかに異なって暗灰色となる。搬入されたものであろう。

33は口縁部・底部を欠く鉢あるいは小型の壺である。

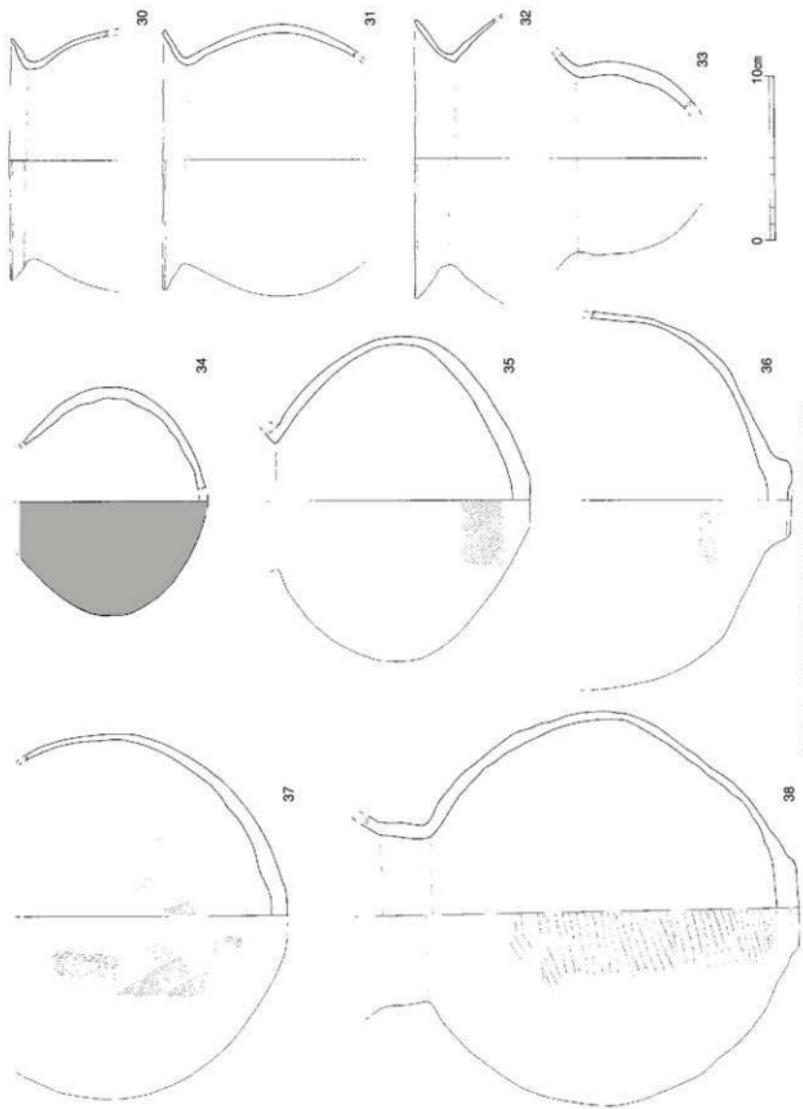
34～38は壺と思われる体部・底部片。34は球形体部をもち、外面に赤色顔料が残る。35は体部の張りが強く、底部が小さな平底となる。36は下膨れの体部に突出する小さな平底を付すもので、体部下半に籠磨きの痕跡が見える。37は球形の体部となり、38も厚い平底の底部をもつ。これは全体に叩き痕が残っている。

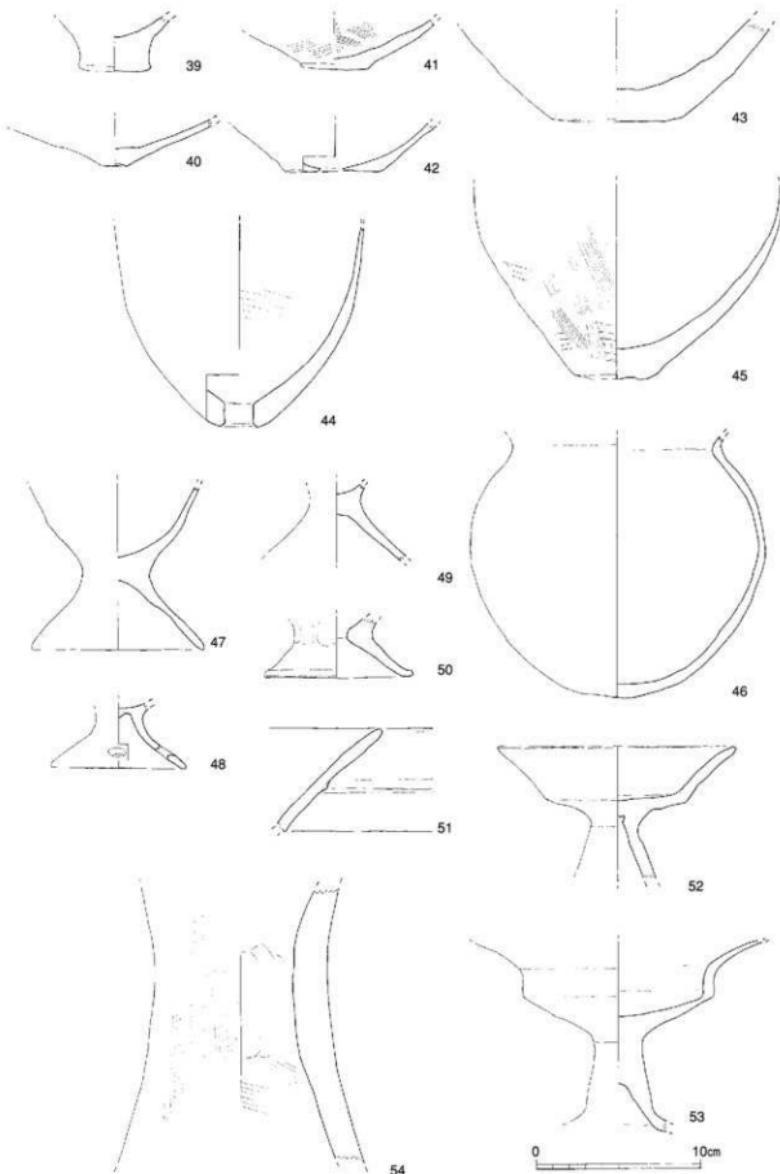
39～43は底部片。39は厚底となる底部。41～43はいずれも平底となって、体部の開きが大きいことから壺であろう。40はとても小さな平底、42は底部中央に焼成後に穿孔がなされている。43は非常に肉厚となるもの。44は底部に焼成前の穿孔があるが、縦長の残片であり復元図に不安がある。45は厚底の底部をもち、体部下端付近に叩き痕・刷毛目が見える。46は球形・丸底の体部で、体部の張りがやや弱いものの、壺であるかも知れない。



第81圖 42号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

第82圖 42号堅穴住居跡出土器実測図 3 (1/3)





第83図 42号竪穴住居跡出土土器実測図 4 (1/3)

47～50は脚台で、48には4個の透孔があるので小型器台であろうか。

51は直線的に長く伸びる口縁部で、中位に低い三角突起を付している。変わった器形であるが、小片のためどのような形状になるものかわからない。

52は杯部がほぼ同じ厚さで作られていて、口縁部下位の段も折り曲げただけで終わるようである。53は口縁部が一旦直立して強く外反する畿内系の高杯で、脚部上半は中実となる。

54は筒型の器台片である。55～57は2本の大きな角状突起を同じ方向に付して、反対側の上方に円孔と小さな突起をつける支脚である。いずれも手捏ねで、角状突起の先端や同方向の体部が火を受けて赤変する傾向がある。小さな突起はつまみであろう。

43号竪穴住居跡

(図版26・27、第85図)

調査区東端に近く位置し、44号住居跡及び円形周溝遺構を切っていた。3.3～3.8×3.9mほどのやや歪な平面形となり、深さは0.2mほどが残存していた。南辺を除いた3辺に浅い周壁溝が巡る。北辺中央付近には方形の屋内土坑があつて、床面付近に粘土が厚く置かれていた。

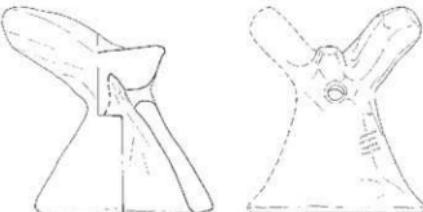
カマドは南辺の西寄りに位置していた。通常の青灰色・鮮やかな黄褐色土を用いた袖は見えず、ただ土器が潰れたように出土していたので少しずつ埋土を除去していく。土器を除去して断面方形の石製支脚が現れたことから、カマドであると判断したのだが、火床らしき赤変部もなかった。

主柱穴は断面に示した2基であろう。弥生時代末の頃から4本柱となり、カマドをもつ住居跡も通常4本柱となるのであるが、カマドの位置・主柱穴の在り方などこの住居跡は特異である。

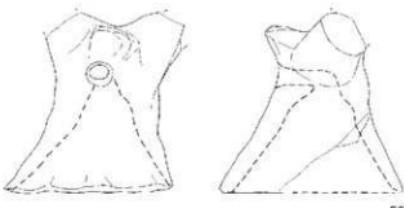
出土遺物

土器(図版51、第86図) いずれも土師器で、1・2・7・8・9・11がカマド付近から、5は住居跡内西半部から出土した。

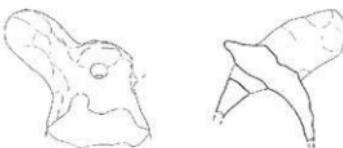
1は一見須恵器蓋のような形状であるが、土師器である。外面は灰褐色～灰赤褐色、内面は灰黒色となる。2はカマドの横から出土した口縁部の外反が弱い小型甕で、体部外面は焼け焦げている。



55



56

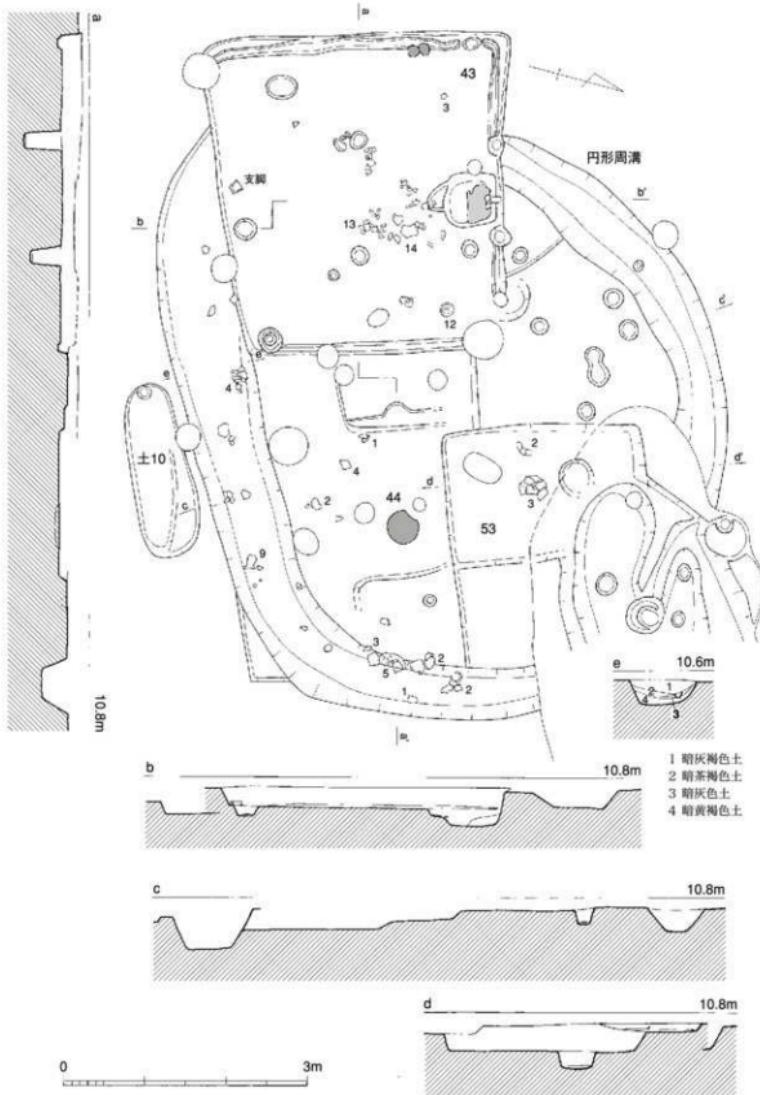


57

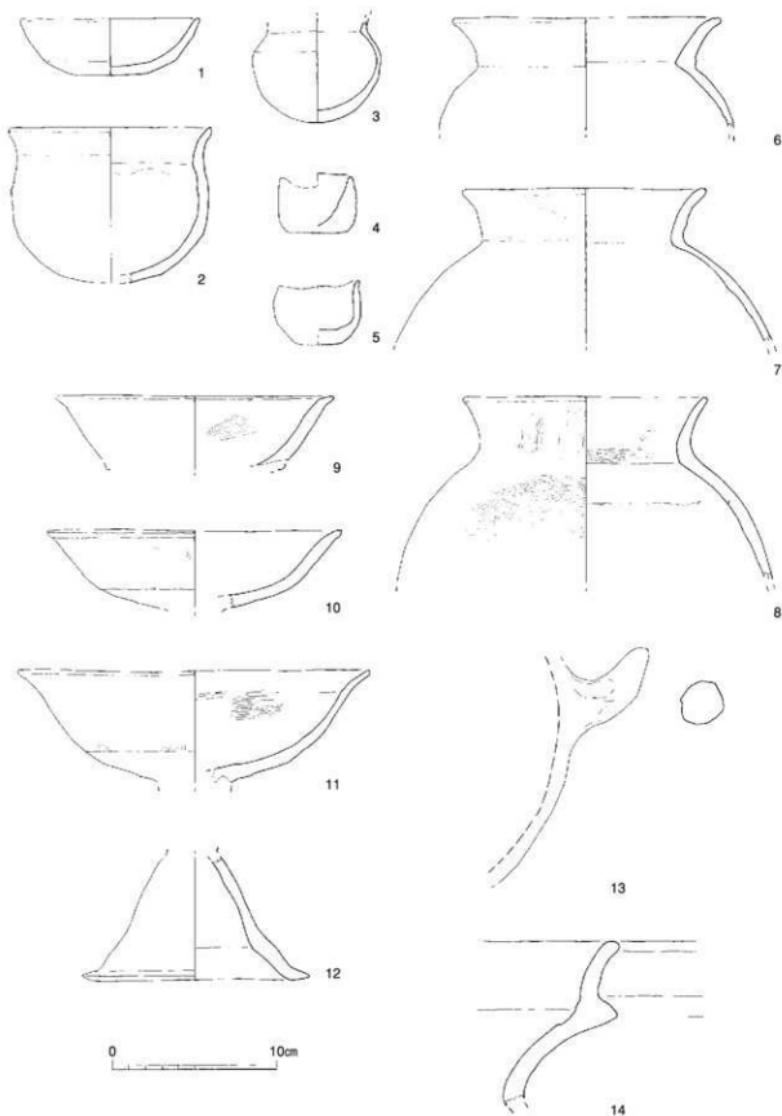
第84図 42号竪穴住居跡出土器実測図5 (1/3)

3は図示部がほぼ完存する小型壺。4・5は手捏ねのミニチュア。

6～8は口縁部の外反が弱く、短い点で似た器形である。6は頸部内面に稜をもち、口縁部が肉厚となる。これは小片で復元口径に不安がある。7は口縁部が完周するが器表が非常に荒れており、



第85図 43・44・53号竪穴住居跡・円形周溝実測図 (1/60)

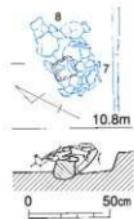


第86図 43号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

8は1/4が残存して器表の残りがよい。

9～12は高杯で、いずれも焼けて赤くなる。9は肉厚の口縁部片で、口端部を小さく外折させて面を作る。10は口縁部下位に明確な稜線をつげず、口端部がわずかに外反する。杯部全体が均一な厚さとなる。11も楕円形の杯部をもつもので、口縁部の外反は弱い。

13は把手が扁平でなく棒状となる瓶片。14は大型の二重口縁壺片である。



第87図 43号竪穴住居跡
カマド実測図(1/30)

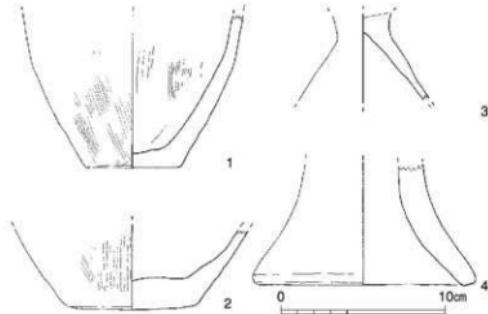
44号竪穴住居跡 (第85図)

43号住居跡の東にあって、43・53号住居跡・円形周溝遺構に切られると判断した。住居跡の南東隅が円形周溝遺構の南でわずかに確認できることから、略南北方向は3.3mとなる。東西方向は、わずかに残るベッド状遺構が対称形に配置されたとすれば3.0mほどの規模となるであろう。深さは0.2mほどが残存した。

中央付近から東に振れた位置で床面が赤変していて炉を想定できるが、主柱穴は不明。ベッド状遺構の高さは0.1mで、西辺では南辺に達していない。東辺は丁度測量杭が位置していて未確認であるが、おそらく同様になるのである。

出土遺物

土器 (第88図) 1～2は甕。1は明瞭に平底となるが、外縁はやや丸みをもつ。張りが弱く、内面に焦げが付着する1/2の残片。2も同様で、これは丸みがより強くなる。図示部は完存。3も図示部は完存する。図頂部は擬口縁となり杯部が剥離した高杯であろう。黄白色を呈する。4は肉厚の器台で、脚端部がピンク色に変色している。



第88図 44号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

45-1号竪穴住居跡 (図版27・28、第89図)

調査区南東端付近に位置し、略南北方向の耕作に伴うと思われる溝及びそれと直角方向に延びるより新しい耕作用と思われる2条の溝に切られているが、住居跡の床面はほぼ残存していた。検出時に2基が重複しているとは全く気付かず、結果的に2軒の住居跡となつたので外側の古い遺構を45-1号、内側の新しい遺構を同2号住居跡として報告する。新古の判断は完形の手焙形土器を含む土器群が、平面的にも、レベル的にも内側の住居跡に集中することによる。

この住居跡は5.8×6.0mの方形プランとなり、深さは0.1～0.2mが残存する。南東辺中央に屋内土坑を置くが、その部分を除いて幅・深さとも0.1m前後の周壁溝を巡らせる。ベッド状遺構は確認できず、主柱穴・炉とも判然としなかつた。

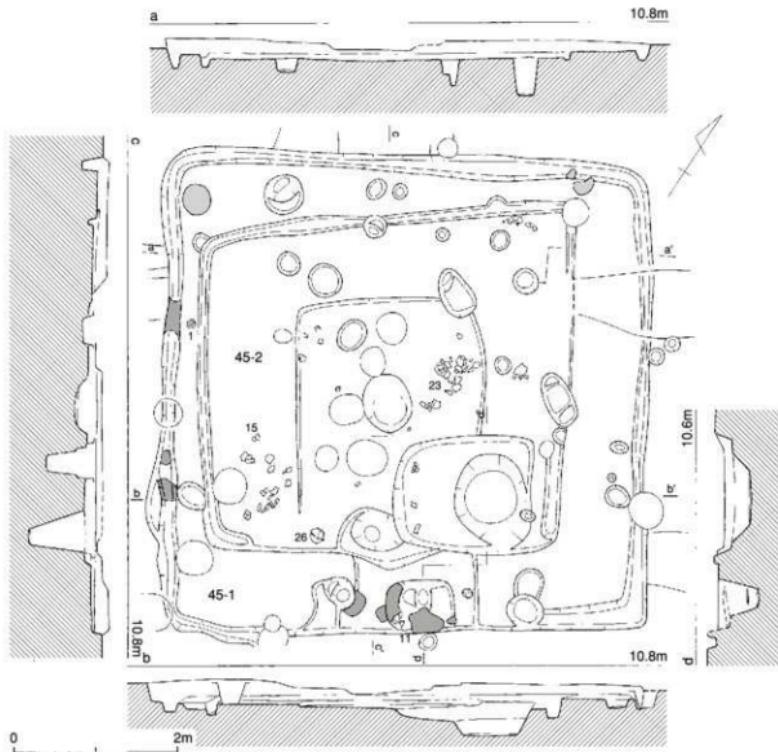
屋内土坑を挟むように深さ5cmほどの段があり、ベッド状遺構が想定できる。また土坑内には検出面付近で焼土・砂が広がっていた。焼土は南西辺周壁溝上でも検出されている。

出土遺物

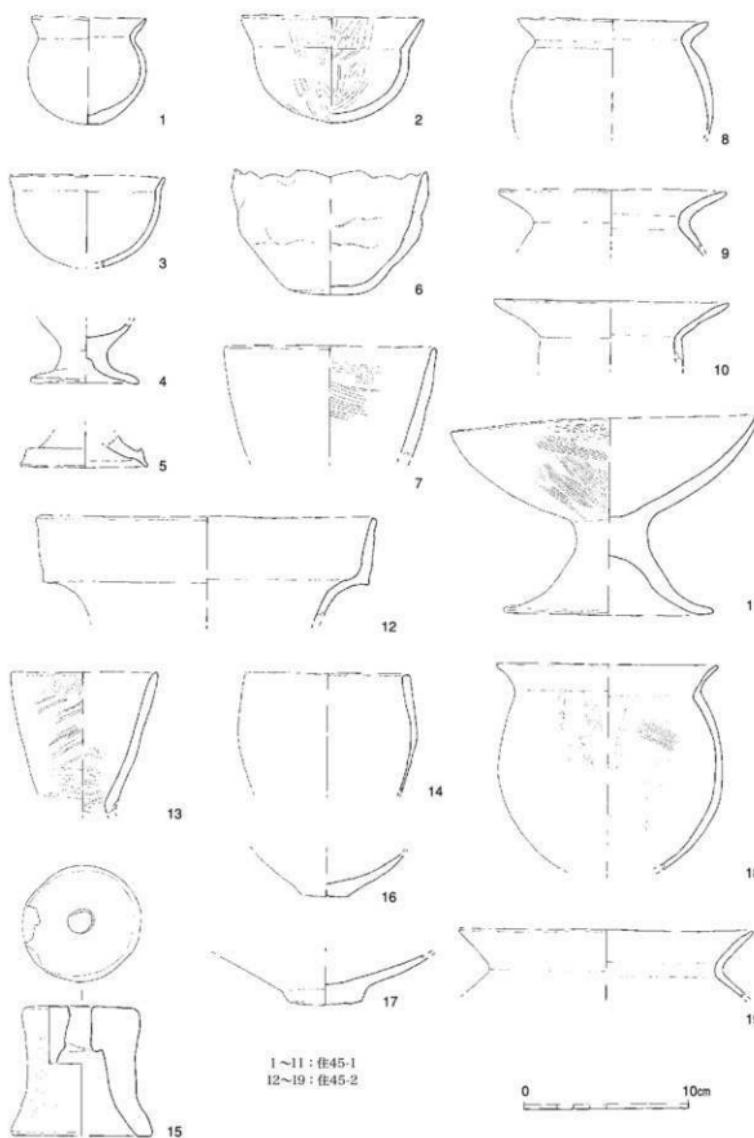
石製品（図版59、第171図6・7）どちらの住居跡に伴うものか判然としない。6は淡灰色凝灰岩製砥石で、図表面の一部だけに使用痕があるが他はすべて欠損している。7は淡灰色頁岩製で、図上下を欠損するが、4面が使用されている。

土器（第90図1～11）発掘着手時には重複に気付いていなかったので、埋土中から出土した土器の厳密な帰属はわからない。むしろ多くが45-2号住居跡に属するものと思われるが、注記にしたがって紹介する。ただし、1-11（「カマド」の注記があるが、「屋内土坑」の間違いである。）は出土状態の記録があって屋内土坑周囲の浅い掘り込み中から、4は「西辺周壁溝」の注記があることからこの遺構に伴うものと判断できる。

1はほぼ完存する小型壺で器表が剥落している。体部は球形に近いがやや長胴となり、口縁部を内彎気味に成形する。2は小型丸底壺状の鉢で、肉厚となる。頸部付近の1/3が残存し、これには箋磨きが見える。3は薄手小型の鉢で、小さく短く外反する口縁部を付す小片。4は手捏ねの脚台で、図示部が完存。5は須恵器瓶子の口縁部に良く似た形態であるが土師器で、脚であろうか。胎土や作

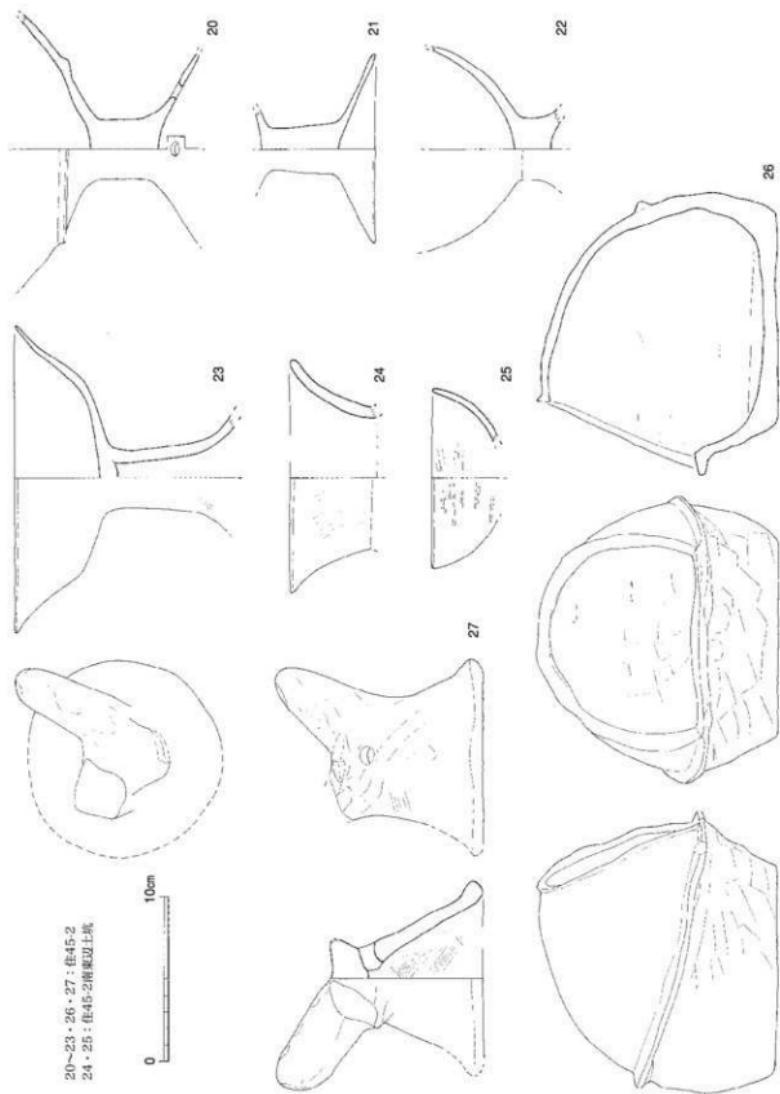


第89図 45-1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第90図 45-1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)

第91圖 45-1・2号堅穴住居跡出土土器夷制圖2 (1/3)



りに特別なものはない。6は手捏ねの鉢で形状不整、口縁部も粗雑である。7は小片で、長頸壺であろうか。内面は刷毛目であるが、外面は籠磨きのようである。8は口縁部が短く、体部の張りが小さい壺で、口縁部の1/3が残存。9は口縁部が伸びて、大きく外反する。10はさらに口縁部が長くなるもので、残存部下端が直立するような形となる。あるいは壺であろうか。1/3ほどの残片である。

11はほぼ完存する高杯だが、口端部は剥落のために形状に不安がある。緩く内彎する楕円形の杯部に短く大きく開く脚部がつく。杯部外面は刷毛目、内面は撫で仕上げるようである。

45-2号竪穴住居跡（図版27・28、第89図）

4.1×4.6mほどの方形に近い平面形となり、検出面である45-1号住居跡床面からの深さは0.1mほどに過ぎない。外周には深さ0.1mほどの周壁溝を巡らせるが、屋内土坑が設置された南東辺には及ばない。幅1mほどのベッド状遺構をコ字形に配し、その高さは5cmほどである。

床面中央付近で炉跡が検出されたが、ベッド状遺構下の床面規模に比して炉跡の径が大きい。主柱穴は不明である。

なお、東隅付近で検出した長方形土坑との関係は調査時には把握できなかった。

出土遺物

土器（図版50・51、第90図12～19・第91図）ほとんどが埋土中から出土したものであるが手焙形土器（26）は南辺際の床面直上に置かれたかのような状態で出土した。また、24・25は住居跡内南東隅の土坑に伴う遺物であるがここで紹介する。

12は口縁部が直立する二重口縁壺の小片。13は長頸壺の口縁部であろう。肉厚となるが、内外面に籠磨きが見える。これは図示部が完存する。14は鉢形の土器で、口端部が肥厚して最も厚くなる。

15は器高8.0cmの小型の支脚で、頂部に穿孔がある。側面の1/2ほどが良く焼けて赤変する。

16は平底となる底部片、17は粘土板を貼り付けたように突出する平底となる。18は図示した体部がほぼ完周するが、口縁部付近はほとんどを失う。これも器表が荒れているが、内外面に刷毛目が見える。19は口縁部が長く伸びる。

20～23は高杯。20は上下両端を欠くが、他の部位は比較的残っている。杯部中位の稜はしっかりしていて、脚部は中実、円孔は一つが残る。21も中実の脚部となり、脚端が1/2ほど残存するが孔は見えない。22は深い楕円形となる杯部をもつものであろうか。23は中空の脚をもち、口縁部は緩く外彎、下位の稜も甘い。

24は図示部が完周する広口壺で、外面は粗い刷毛目で仕上げる。25は1/2が残存する碗。

26は完存する手焙形土器である。覆いは体部から一体的に成形されていて、形式的に突帯を巡らせている。本来的に鉢形の上に覆いを付すものであることを認識していたのであろうか。開口部下は器面の平滑化が不十分で不整となるが、体部は全体に籠削りを多用する。覆い部は荒れている。なお、内面には熱を受けた痕跡や煤の付着といったものではなく、どのように使用したものかは判断できない。27は支脚で、角状突起先端部下位と脚裾付近が赤変する脚裾では、突起側がより高い位置まで変色している。

46号竪穴住居跡（図版29、第92図）

調査区東端に位置し、北辺は溝状遺構に、東辺は3区6号溝に続くと思われる遺構によって失わ

れている。また、北東部は大きく乱れていた、主柱穴配置から推定して、辺長は $5.1 \times 5.6m$ ほどとなろう。深さは0.1mほどであった。

主柱穴は4本で、その内部、西に偏して床面に赤変した部分があつて炉を想定している。周壁溝は完周しないが、しっかりとしたものであった。また、南辺に接して長軸0.6mほどの楕円形の落ち込みが2基並んでいるが、これがセットで通常の屋内土坑の機能を果たしたものと思われる。

出土遺物

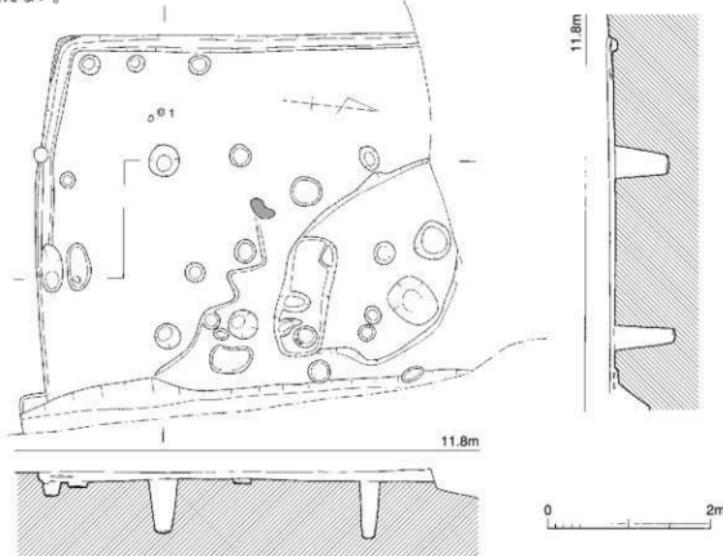
石製品（図版59、第171図8・12）8は3区6号溝に連続すると思われる落ち込みから出土した黄白色の緻密な細粒砂岩製砥石。図示した面及び左側面の一部が使用されるが、側面はあまり使い込まれていないようである。その他の面はすべて欠損。12も黄白色細粒砂岩製の非常に緻密な砥石。図示した面と破面の一部が使用されるが、他は大きく欠損する。

土器（第93図）住居跡及び周辺出土の土器をまとめて図示した。1・2は住居跡南西隅付近から出土したもの、4～8は3区6号溝に連続すると思われる落ち込みから出土したものである。

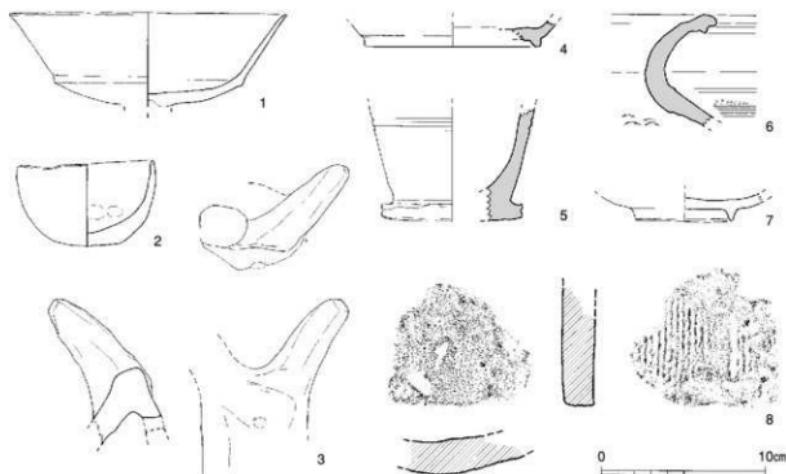
1は口縁部の1/2が残存する高杯で、口端部がわずかに外彎する。2は平底傾向の手捏ね土器で、口端部の形状には不安がある。3は支脚。

4は須恵器高台付の杯身。5は胎土・調整とともに良好な摺鉢で、底部の籠状突出部は不整となる。内面は横振で調整痕がよく見えるが、底部付近では不明瞭となり、手で触ると滑らかとなっている。外面は底部まで灰を被る。6は須恵器壺、7は外底面に回転糸切り痕が残る瓦器で、内面は籠磨きで仕上げるようである。

8は焼けて真っ赤となる平瓦で、図下端は生きている。凸面に網目叩き痕が残るが、凹面は何も見えない。



第92図 46号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第93図 46号竪穴住居跡および周辺出土土器実測図 (1/3)

47号竪穴住居跡 (図版29、第94図)

調査区北辺の中央付近に位置し、17・48号住居跡・8号土坑などに切られていた。

一辺長7.4mの正方形プランを有し、深さは0.2mほどが残存する。北西辺に幅0.6mのベッド状遺構が付設されるが、通常は1mほどの幅をもつのに比してこれは幅が狭い。

この住居跡ではベッド状遺構の裾も含めて、しっかりした周壁溝を巡らせている。北東辺では、壁に半ば食い込むように1.5～1.6mの間隔で柱穴が認められたが、東隅の柱穴は壁に食い込んでいない。他の辺でも同様の柱穴があるが、48号住居跡に切られていることもあるってすべてを確認できなかった。

主柱穴は4本で、炉跡は48号住居跡床で検出した2基の炉の中、北西に位置する円形土坑が相応しい。屋内土坑は南東辺に接して、南に偏した位置で検出した円形土坑がそれであろう。

出土遺物

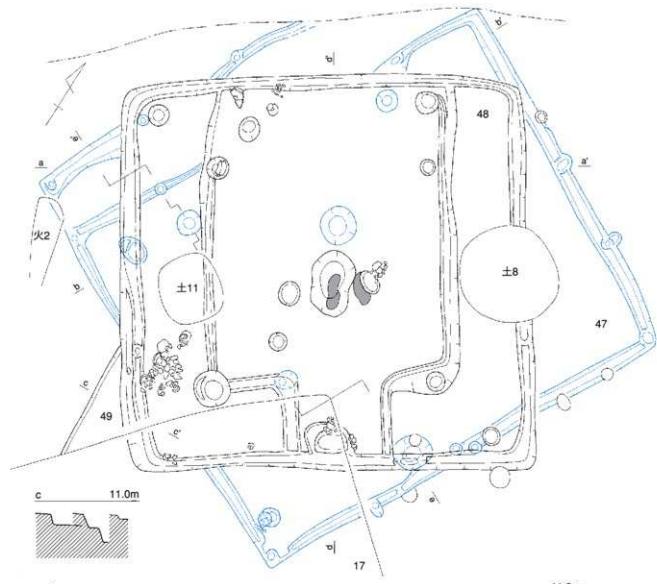
鉄製品 (図版58、第169図7) 図右端が緩やかに曲がっている。直刃鎌の基部であろう。

土器 (第95図1～3) 出土遺物は少ない。1は外面を刷毛目で仕上げる甕の小片で、内面は剥落して調整痕は残らない。2は高杯の脚裾であろう。開きが大きい。3は平底の底部であるが、器壁が薄いことから小型の鉢であろうか。黄白色となる。

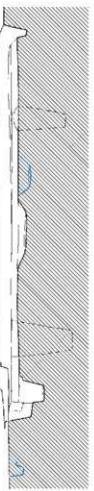
48号竪穴住居跡 (図版29・30、第94図)

調査区北辺付近、47号住居跡を切っていて、17号住居跡や8・11号土坑に切られていた。辺長6.2×6.4mとほぼ正方形に近い平面形をもち、深さは最大で0.3mを測る。

ベッド状遺構は検出面から0.2mほどの深さにあって、高さは0.1mほどである。この調査区で検出したベッド状遺構はすべてが地山削り出しであるが、この住居跡だけは濁った色相であって、



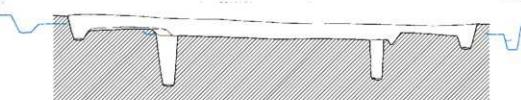
a 11.0m



11.0m



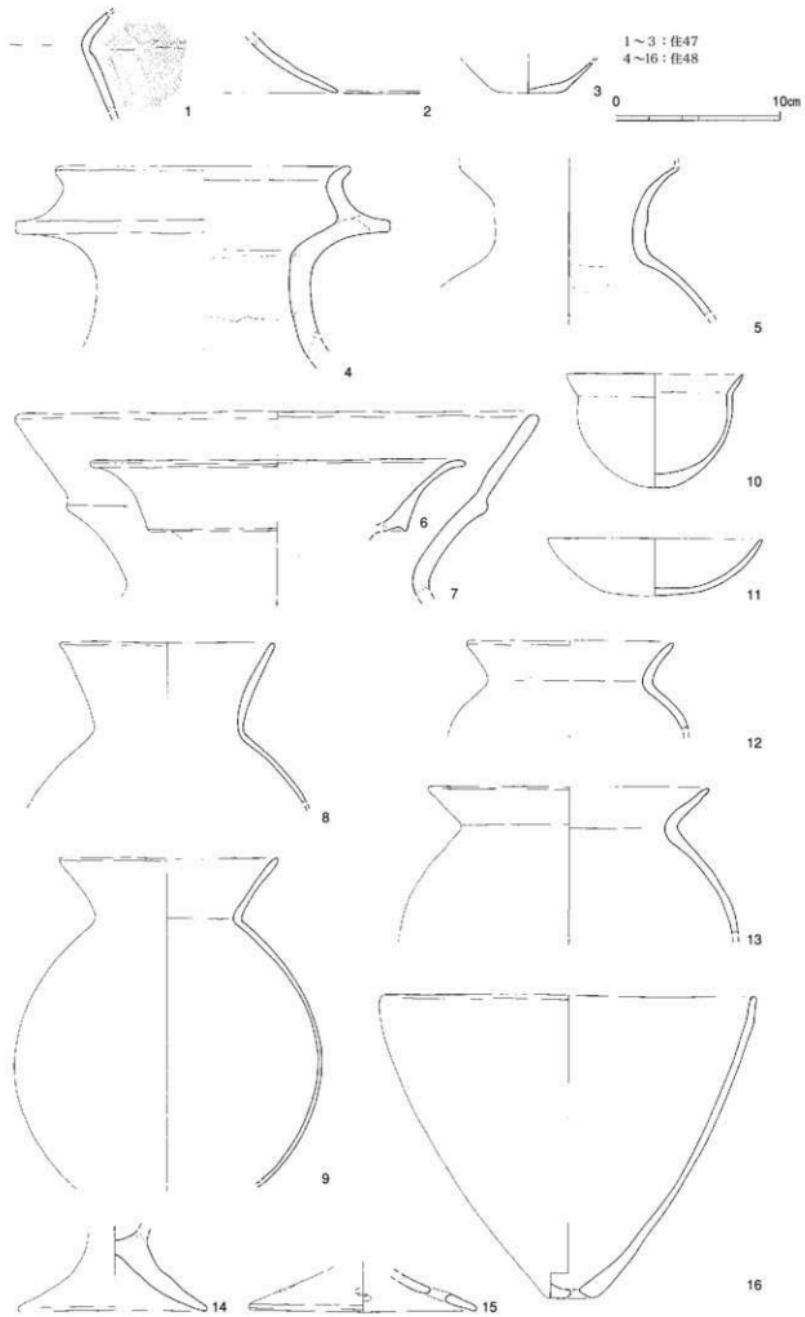
a 11.0m



3m
0



第94図 47~49号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第95図 47・48号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

断ち割っても確信を得られないが、盛土で構築したものであるかも知れない。幅は約1m、配置はL字形・逆L字形を対称に配置するものである。ベッド状遺構の外周及び裾に周壁溝が掘削されていて、後者は主柱穴に繋がるが、東側の柱穴だけ外れている。

主柱穴はしっかりした4本柱で、炉跡はその中央から南東に偏して位置する不整長円形土坑となる。屋内土坑は南東辺中央からやや南西に偏して位置する。

出土遺物

石製品（図版57、第173図28） 製品というものではないが、茶褐色となる軽石である。図中中央付近で縦方向に比較的自然面が残り、左右側面は破面となっている。顕著な使用痕は見えない。

土器（図版51・52、第95図4～16） 図示した土器のうち、5・10・11は屋内土坑周辺、13は「東隅ベッド直上」の注記があるので、これらは伴う可能性が高い。他の土器は住居跡南西隅付近でまとめて出土し、これは明らかに外部から投棄した様を呈していた。

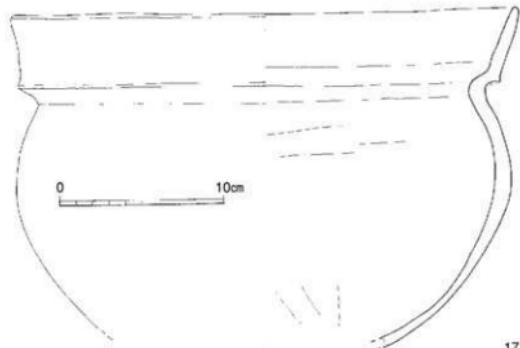
4は頸部が瘤状に突出する二重口縁壺で、口縁部も強く短く外反する。5は口縁部を失うが二重口縁壺であったと思われる。図示部はほぼ完存。6は口縁部が強く大きく外彎・外反し、端部を丸く収める二重口縁壺で、器表が荒れて装飾は見えない。7は口縁部が直線的に大きく開く壺で、復元口径32cmを測る。8は口頸部が完存、9は同1/3が残存する広口壺。いずれも口縁部は直線的に伸びて端部を丸く収める。

10は小型の鉢で、器表剥落のため口端部の形状には不安がある。11は浅い楕で、内底面に褐色の付着物が残る。

12・13は甕。12は口縁部が緩く外彎し、13では口縁部が直線的に伸びて端部に変化を加えているが、器表剥落のために細部が不明瞭となる。16は小さな底部に穿孔を施す瓶で、体部は緩く内彎、口端部は丸く終わる。

14は脚台であろう。15は高杯あるいは器台の脚部で、4孔を配する。

17は小さな頸部に直立する口縁部をつける山陰系の鉢で、体部は偏球形に近い。灰黄色を呈し、器表が荒れる。口縁部付近の2/3が残存。



49号竪穴住居跡 (第94図)

調査区北辺中央付近で17・

48号住居跡に切られて一部

第96図 48号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

を検出し、深さは0.2mほどであった。47号住居跡は49号住居跡よりも深いので重複部分は失われたのであろうが、浅い17号住居跡との重複部分でもこの住居跡の痕跡を確認できなかつたために住居跡との確信が得られない。

出土遺物

土器（第97図） 1・2はいずれも口縁部外面を一旦小さく膨らませていて、おそらく端部をつま

み上げていたと思われる。いずれも1/4の残片で、器表が荒れている。3は中実の高杯脚部。これも荒れている。

50号竪穴住居跡

調査区北辺中央付近、47号住居跡の北東部で、住居跡かと思われる埋土様の広がりを認めて遺構番号を付したが、発掘後に柱穴や炉・カマドの痕跡を確認できなかつたため、これも住居跡との確信はない。出土遺物もない。

51号竪穴住居跡（図版30、第74・98図）

調査区西端付近、37・73号住居跡を切っていると判断されたが、結果的にカマドが付設された北西辺は検出できなかつた。カマド付近で測った略南北長は4.4m、東西長は4.7mを測る。深さは南隅付近で0.1mであった。

主柱穴はすべてを検出できなかつたが、断面図に示した2基は妥当であろう。カマドは袖を検出できず、土師器高杯を用いた支脚とその周辺に散乱した瓶片、赤変した火床を認めたのみである。

出土遺物

石製品（図版57・58、第167図1・2・7・第168図2・9） 第167図1は「表層」出土とあり、遺構検出時のものである。くすんだ青色となる滑石製の勾玉で、全長1.5cm、体部は扁平で0.3cmほどに過ぎない。頭部は折損するようである。2・7は「遺構検出」時の出土で、この住居跡に帰属すると確認したものではない。2は灰白色となる滑石製の白玉で、長さ・直径ともに0.6cm。両端の孔径は見た目同じである。7は表裏が剥離する滑石製品で、紡錘車を思わせるが孔が偏して位置する。第168図2は姫島産黒曜石を用いた打製石器で、一見石鎌を思わせるが形状が不整であり、図下端が折損していることから石鎌と思われる。同9は「住51南東遺構検出」とあって確実にこの遺構に伴うものではない。片岩系の淡灰色の石材を使用した石庖丁で、穿孔は図で見る以上に直に見える。図背面の研磨は粗雑なものである。

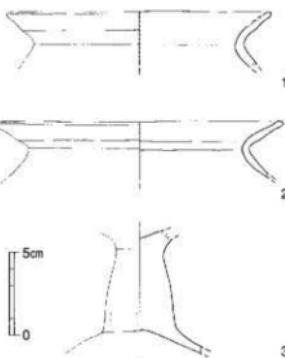
土器（図版52、第99・100図） 第99図1～6は須恵器。1は胎土・作りがとても良好な1/4の残片で、口端部内面に面をもつ。2は肉厚で調整も雑な杯蓋である。これは口端部を丸く収め、2/3が残存。3は粗い胎土の杯身小片。4は1/2が残存する肉厚で焼成の甘い杯身。4は胎土・作りとも良好な杯身で、これは1/4が残存。

6は明らかに混入の高台付杯である。器高が低く、高台が底部外周のやや内側につく。底部が肉厚となる1/2の残片。

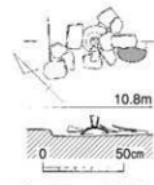
7は土師器瓶小片。8はカマド内に置かれていた高杯で、図示部はほぼ完周する。外面は縦方向に1/4ほどが特に焼かれていて、杯部内底面には灰黒色の付着物がある。

この住居跡付近は遺構検出が最も困難な場所で、数度にわたって面上に浅く掘り下げた。その過程で出土した遺物を第100図に示した。

1～11は須恵器で、1～4は蓋である。1は胎土・作りとも良好で、口端部に

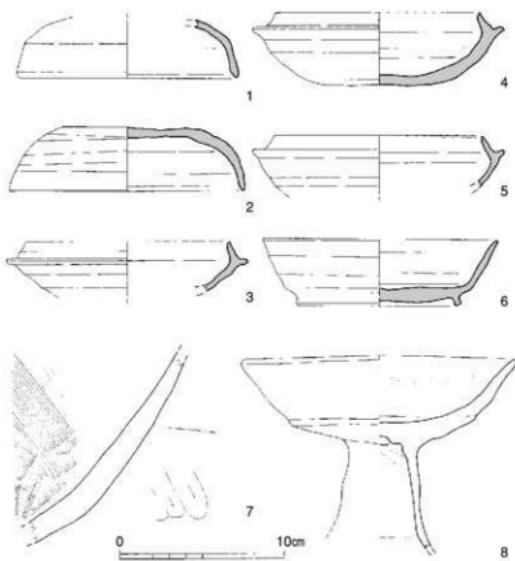


第97図 49号竪穴住居跡出土土器実測図
(1/3)



第98図 51号竪穴住居跡カマド実測図
(1/30)

面をもつ小片。天井部・口縁部界は凹ませている。2も1に似るがこれは器肉が厚い。3は口端部付近を小さく内側へ屈曲させるもので、これは調整が難である。4は折り返した口縁部が長くなる。胎土・作りがとても良好な杯身で、立ち上がりが長い。6は1/2が残存する肉厚となる身で、外底面は中央付近を不定方向の籠削り、その外周を回転籠削りで仕上げる。7は壺の蓋であろうか。高さが低く、天井が扁平となる。口端部に水平な面をもつ。8は壺類の底部で、肉厚で回転籠削りは難である。9は壺口縁部小片で、丁寧に作られていて櫛描波状文も精緻なものである。10はジョッキ形の器形となるようである。これも丁寧に作られていて、施文も同様である。11は口縁部を玉縁状に肥厚させる甕片で、これも胎土・作りとも良好。



第99図 51号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

12は二重口縁壺の小片で竹管文が残る小片。13は頸部が直立して直角に近く外反する。端部外面に剥離痕が見えることから二重口縁壺であったことがわかる。14は頸部から口端部にかけて緩やかにC字形に外彎する甕の小片。15は口端部を上方をしっかりととまみ出す甕で、外面に刷毛目、内面に籠削りの痕跡が見える。16は口縁部の開きが小さく、直線的に立ち上がる。17は口縁部が小さく外彎する甕。18は体部の張りが弱い長胴となる甕で、口端部を欠く。19は瓶片。20は高杯脚部であろうか、1/3が残存する。21は長さ4.5cm、太さ1.6cmの土錐である。

52号竪穴住居跡 (第101図)

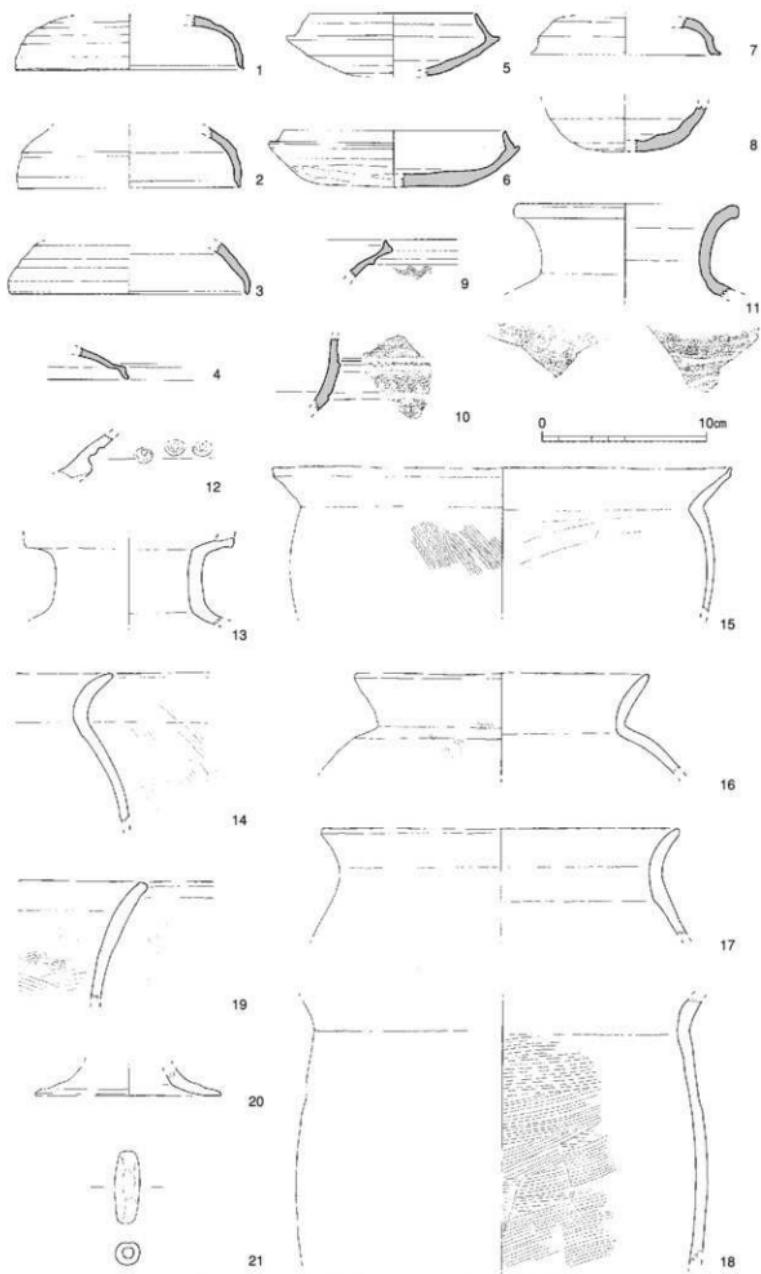
調査区南東隅、45号住居跡の東に近接して、その北西隅付近の一部を検出したものである。深さは0.1mほどが残存していた。

出土遺物

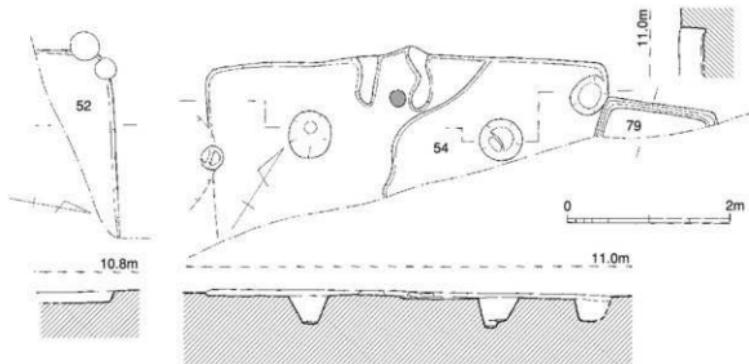
土器 (第102図1) 器表が荒れる土師器甕小片である。

53号竪穴住居跡 (図版41、第85図)

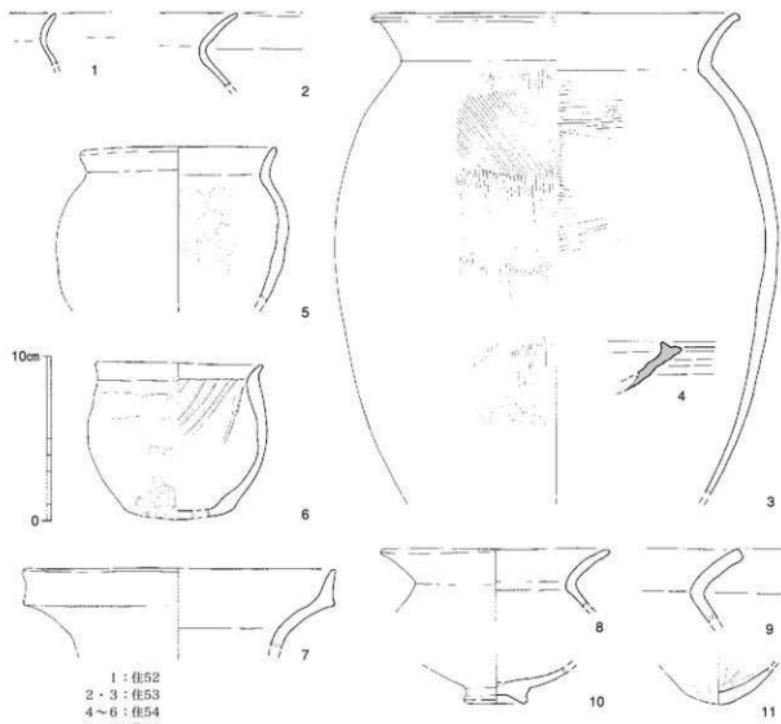
調査区東端付近に位置し、44号住居跡を切って、円形周溝遺構及び溝状遺構に切られていた。



第100図 51号竪穴住居周辺出土土器実測図 (1/3)



第101図 52・54・79号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第102図 52~55号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

略南北長は2.4m、東西長は3.0mまで確認できるが円形周溝遺構に壊される。深さは0.2mほど。遺構の中央付近で南北方向に0.1mの段があって、ベッド状遺構の可能性があるが、何よりも炉跡や柱穴を確認できないために住居跡と認定する材料が乏しい。

出土遺物

土器（第102図2・3）2は土師器甕小片である。口縁部がく字形に外折し、外面が小さく膨らむ。3は口縁部付近の1/3が残存する甕で、口縁部は屈曲が弱く、端部を外方に小さくつまみ出す。内外面で刷毛目を多用する。

54号竪穴住居跡（図版30、第101・103図）

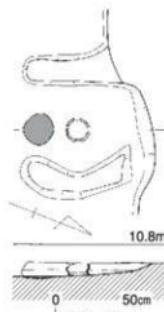
調査区南西部、住宅基礎の北東部で一部を検出し、79号住居跡に切られていた。カマドが設置された北西辺は4.9mの長さで、隣接する辺長は不明である。深さは0.1mに満たない。

カマドは明黄褐色砂質土で袖を作り、内部には底部を欠失した小型甕が伏せて置かれていた。その前面に火床があり、小型甕は支脚に転用されたものであろう。

主柱穴は2基を検出したが、掘形が大きい。

出土遺物

土器（図版52、第102図4～6）4は立ち上がりが短い須恵器杯身の小片。5は支脚に転用されていた甕で、図示部は完周。2/3ほどが焼かれて真っ赤となる。6は北東の主柱穴から出土した甕で、口縁部付近は完周、底部付近の1/2が残存する。やはり器表が荒れている。



第103図 54号竪穴
住居跡カマド実測図
(1/30)

55号竪穴住居跡（図版31、第104図）

住宅基礎の北東付近にあって、24号住居跡と重複するが、直接の切り合い関係は確認できていない。また56号住居跡とも同様であり、かつ基礎・攤乱などがあつて要領を得ないところがある。

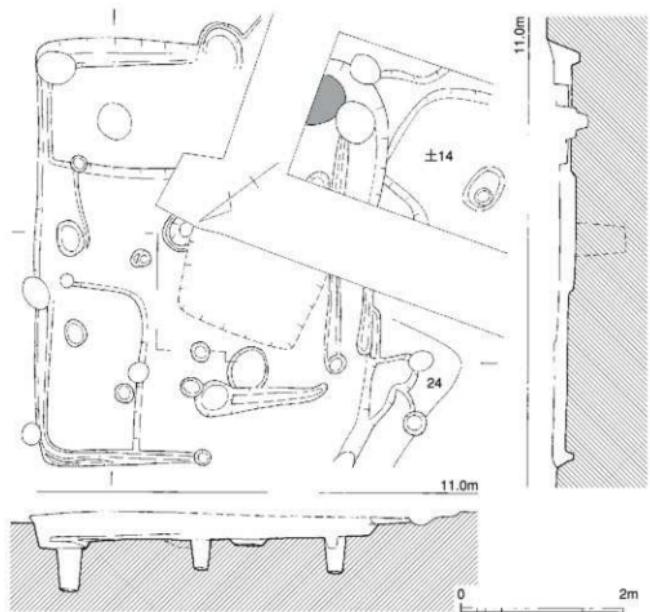
北東辺長は5.2m、南西辺は小溝が壁から離れて位置しているが、攤乱のすぐ北に位置するしつかりした柱穴を主柱穴の一つと見なせば辺長は4.0m、壁の立ち上がる位置となる。この小溝に伴うような別の遺構はなく、この住居跡に伴うとしても類例がなく、性格は不明といわざるを得ない。

南西辺に沿って幅1.2mのベッド状遺構があるが、それは検出面から0.3mの深さであった。また、床面中央付近からの高さは5cmほどに過ぎない。南隅では焼土が見られたが、床から0.1mほど浮いた位置である。北東辺の西半部にも幅1.1mほどのベッド状遺構があつて、通常は北西辺へL字形に延びるのであるがここでは途切れで続かない。特異なベッド状遺構の配置形態である。ベッド状遺構の間、北東辺近くに偏円形の土坑があつて、いわゆる屋内土坑であろう。これもしっかりしたものであった。

出土遺物

石製品（図版59、第171図11）「周壁南辺溝」の注記がある。淡灰色凝灰岩製の砥石で上端を欠損する。長側片の4面がいずれも使用され、図下端も使用されるようである。

土器（第103図7～11）7は「溝1 住55」の注記がある二重口縁壺の小片。8は屋内土坑出土



第104図 55号竪穴住居跡実測図 (1/60)

の甕小片。9は「床面」と注記がある甕小片で、これは肉厚で口端部を断面方形とする。10は高台風に図示したが、蓋の可能性も考えられる土師器である。11は尖底に近い底部片。

56号竪穴住居跡（図版31、第105図）

調査区中央付近南側、住宅基礎のすぐ北にある。北東に接するように25号住居跡が、南及び西に55・24号住居跡があるが、この住居跡自体非常に残りが悪く、先後関係は不明である。耕作に伴う2条の溝に切られているが、カマドの痕跡をかろうじて認めて住居跡の存在がわかった。

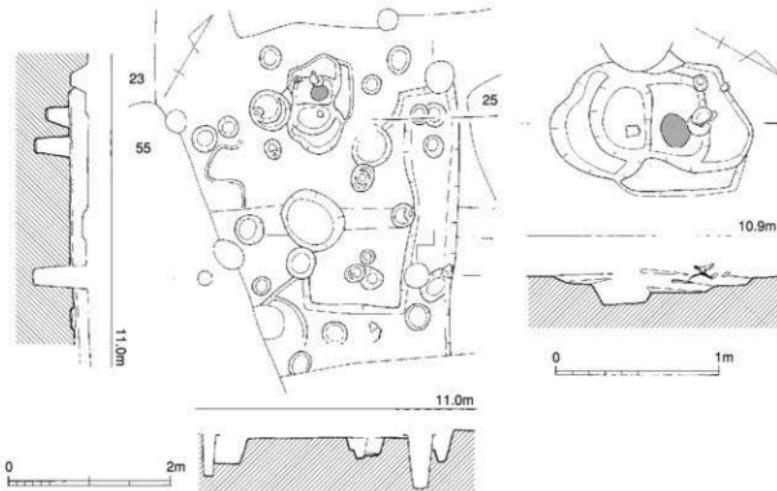
カマドは北西辺にあって、明黄褐色砂質土を用いて袖を作り、支脚として土師器高杯が倒置され、その前面が赤変していた。カマドの位置が先後の遺構と重複しているようで、平面的には複雑なものとなった。

このカマドを基準として4本柱を想定して図化したが、平面規模を窺える材料はない。

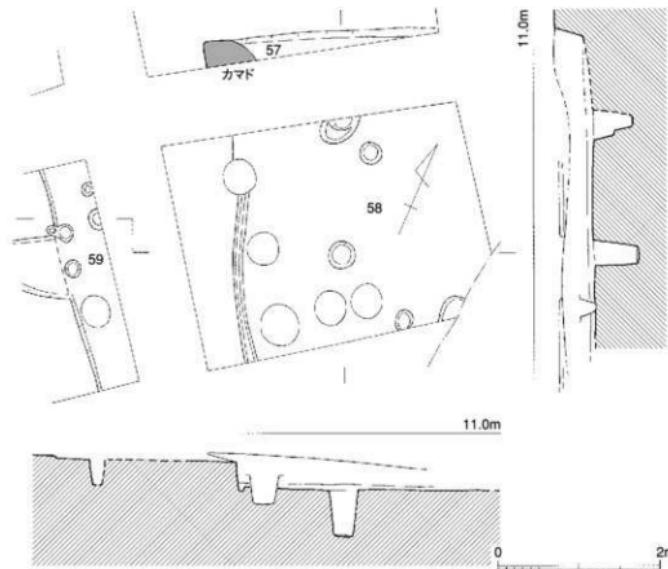
出土遺物

土器（第108図1・5） 支脚として使用された土師器高杯、その上から出土した須恵器は細片化して図示できなかった。

1は瓶の把手部分。5は須恵器甕の肩付近の残片で、図上方から自然釉が垂れている。



第105図 56号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)



第106図 57～59号竪穴住居跡実測図 (1/60)

57号竪穴住居跡 (図版31、第106・107図)

55号住居跡の南に近接して位置し、これも基礎があつて要領を得ない住居跡である。

住居跡の北西隅を検出し、そこでカマドの痕跡を認めた。住居跡隅にカマドを付設する例もこの遺跡ではごく稀である。検出時は全体が明黄褐色砂質土に覆われていたが、その下位には灰黒色土があり、倒置された土師器高杯が傾いて出土、周辺には瓶片も埋没していた。赤変した焼土も散乱していて、カマドが壊されたものであろうと判断している。

出土遺物

土器 (図版52、第108図2～4) 2は須恵器杯蓋の小片で、復元口径に不安がある。3は体部が完存する手捏土器。器表外面に小さな弾けが多く見られる。4は支脚として伏せられていた土師器高杯で、口縁・脚の両端は剥離して細部はよくわからない。杯部は楕形となり、中位には沈線など何も表現されていない。脚は太く、接地部が大きい。

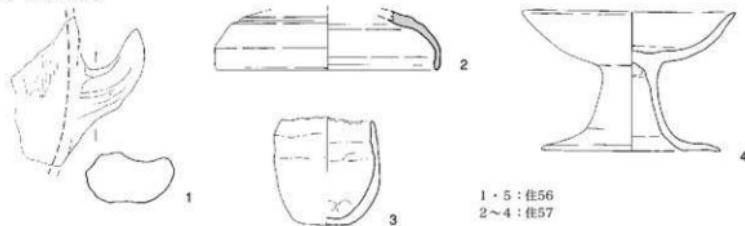
58号竪穴住居跡 (図版31、第106図)

57号住居跡の南にあって、西辺を検出したのみである。当初は57号住居跡と同一遺構かと思われたが、明らかに時期の異なる土器を出土したことから区別した。57号住居跡とほぼ重なっていたものと思われ、面的には区別できなかった。

周壁溝は0.1mほどの幅で、5cmほどの深さ。住居跡の深さは最大で0.3mほどであった。

出土遺物

土器 (図版52、第109図) 1は須恵器腹の口縁部片で、焼け歪むために復元図が大きくなっている。作りは雑。

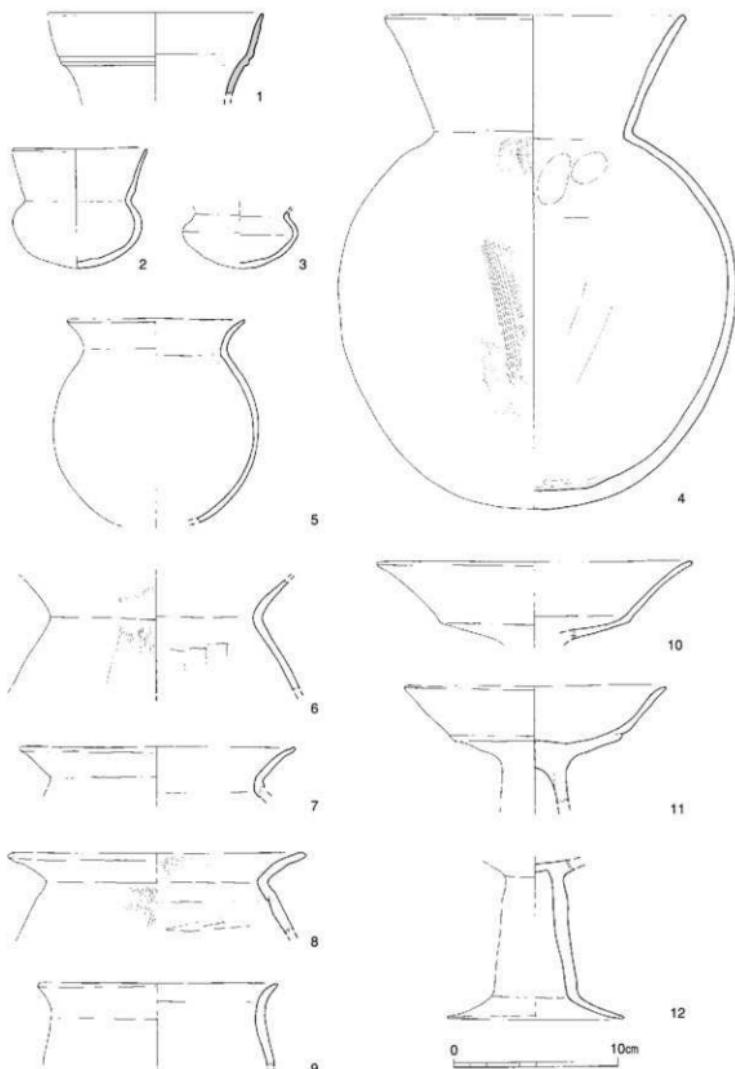


第107図
57号竪穴住居跡
カマド実測図(1/30)



第108図 56・57号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

2は小型丸底壺と呼んでよい形態となる。完存する偏球形の体部に直行する口縁部を付す。器面の調整痕は残らない。3も偏球形となり、図示部は完存するがこれも荒れている。4はほぼ完存する広口壺で、口縁部はわずかに外彫傾向があるものの直行といつてよい。端部に変化を加えていないうようである。焼けて部分的に真っ赤となる。



第109図 58号壁穴住居跡および周辺出土土器実測図 (1/3)

5・6は口縁部が高く緩く外側で丸く終わるものであろう。7は口端部を擒んでいる。8は口縁部が強く外折し、口端部は丸く終わる。9は体部の張りが弱く、口縁部へ連続的に移行する。

10は全体に器肉が薄い高杯で、内面には赤色顔料が塗布されていたかも知れない。11は口端部が小さく外反、段以下が厚くなる。12は中空の脚部で、低い位置で開くが、端部は剥離のために本来の形状ではないと思われる。

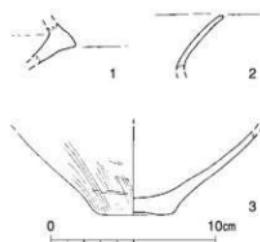
1・9・11などが57号、他が58号住居跡に伴うものとしてよからう。

59号竪穴住居跡（第106図）

住宅基礎の中、南西側で直線的なラインを認めて遺構番号を付したものであるが、その深さは5cmに満たない浅いものであった。また、広がりも確認できなかつたため、これも住居跡との確信はない。

出土遺物

土器（第110図） 1は口縁部が内折する二重口縁壺の小片。2は甕の口縁部であろうか、これも小片である。3は平底の底部で、外面は箇磨きで調整するようである。



第110図 59号竪穴住居跡出土土器
実測図 (1/3)

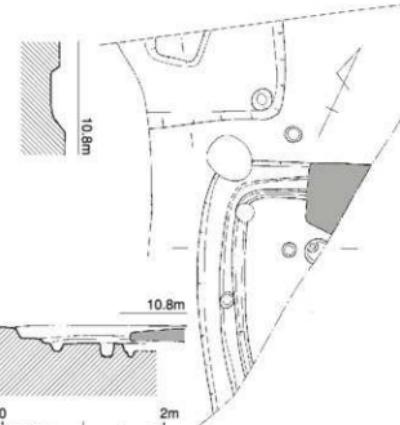
60号竪穴住居跡（図版32、第111図）

調査区南東端近くに位置し、北西隅の一部を検出した。この住居跡では壁が階段状となつてその下に周壁溝が巡る。筆者がこの遺跡で担当した住居跡は150軒を超えるが、このような例はない。2軒の竪穴住居が同じ方位をとつて規模を変えたと考えることもできるが、各段や溝がほぼ平行していることから偶然に帰すことも躊躇される。

調査区境で明青灰色砂質土を袖に用いたカマドを検出したが、詳細を確認していない。調査範囲内に主柱穴の1つが存在して良いのであるが、検出した柱穴は貧弱なものであった。

出土遺物

土器（第113図1） 須恵器杯蓋の1/4の残片である。「住60下」の注記があり、床面付近から出土したようである。



第111図 60号竪穴住居跡等実測図 (1/60)

61号竪穴住居跡（図版31、第68・112図）

調査区東南隅で一部を検出し、30・62・63号住居跡を切る。

カマドを設置する北東辺を3.4mの長さまで検出したが、まだ続くようである。検出の状況では

カマドは東に偏して位置し、検出時は袖に多用された明黄褐色砂質土、炭片・焼土片を交えた暗茶褐色土などが乱れて現れた。断ち割っても袖は明らかにできなかったが、これも破壊されたカマドの痕跡であろうと考えている。支脚として使用された土師器高杯部が地山に接して伏せ置かれていたが、火床も未確認である。

出土遺物

土器（図版53、第113図2～7）2は須恵器蓋の1/2の残片。胎土・作りともに良好で、天井部・口縁部界に甘いながら稜を巡らせ、口端部には面を作る。天井部が肉厚となる。3は「住61・62」の注記があって、帰属がはっきりしない甕の口縁部小片。4は「カマド覆土」出土の土師器甕小片。5は「カマド下」と注記があり、下層の遺構に伴うものか。体部は1/3が残存するが、体部外面は箇削りで仕上げる。口縁部付近は小片となっていて復元口径に不安がある。6は支脚に転用されていた土師器高杯で、口縁部が高く立ち上がって端部を小さく外反させている。下位の稜線は弱い。7は底部の2/3が残存する平底鉢で、底部外周は丸みをもつ。体部は直線的に伸びて、端部を丸く取める。内面は灰褐色、外面は黒色となる。

62号竪穴住居跡（図版32・33、第68・112図）

調査区南西隅付近、30・61・63号住居跡に切られている。北隅付近を確認ただけで、規模はわからない。深さは0.2mほどが残存、一部で周壁溝が見られた。

調査区にカマドがあつて、土師器高杯が伏せられた状態で出土したが、袖は確認していない。主柱穴の一つはカマド東で検出した2段掘りの柱穴であろう。対応する柱穴は61号住居跡のカマド下付近に位置するのであろうが確認できなかった。

出土遺物

土器（第113図8）杯部は中位の稜線がほぼ失われていて、口縁部が小さく外反する。脚部はあまり開かず、脚幅でわずかに開く。脚端部の形状が本来的なものか、はっきりしない。

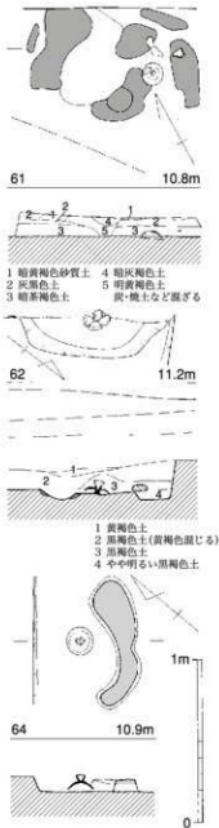
63号竪穴住居跡（図版33、第68図）

調査区南西隅にあって北東隅付近の一部を検出、62・65号住居跡を切り、61号住居跡に切られていた。62号住居跡に後出することからカマドが付設されていたはずであるが、残っていない。

深さは0.2mほどが残存し、断面図に示した柱穴が主柱穴の一つであろう。

出土遺物

土器（図版53、第113図9～12）9は肩部に突帯を付す二重口縁壺の小片。10は楕あるいは高杯の杯部であろう。内彎する体部から口縁部を小さく外反させている。11はほぼ完存する楕で、これ



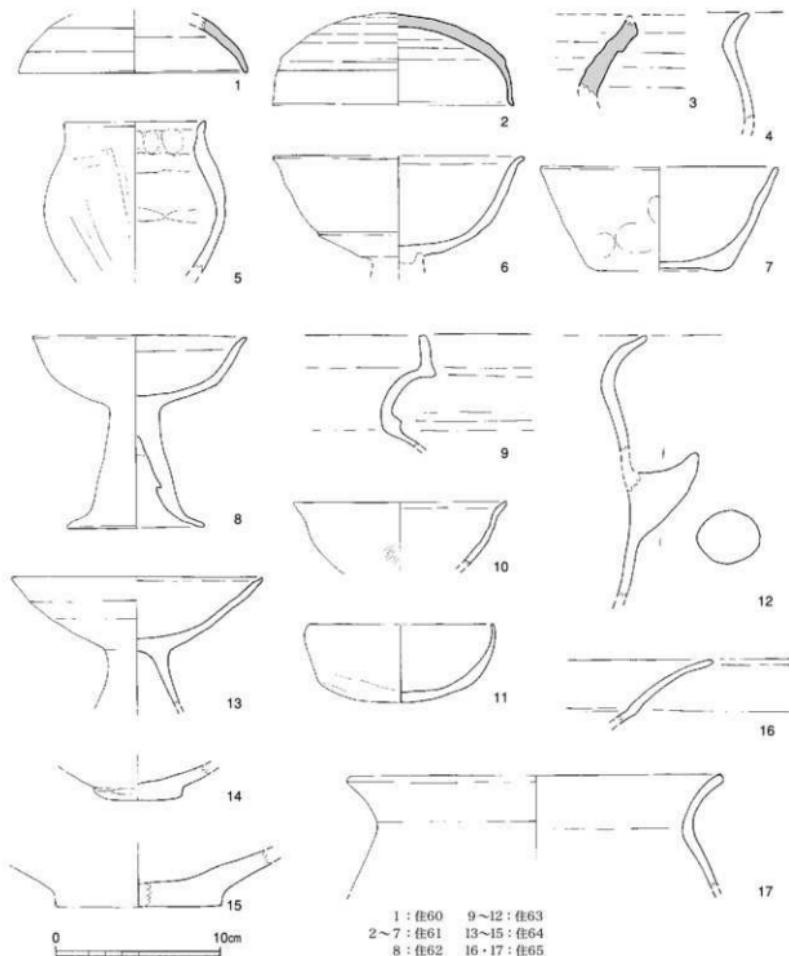
第112図 61・62・64号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

も口端部の形状には不安がある。12は棒状の把手をもつ瓶片。

64号竪穴住居跡（図版33、第68・112図）

調査区南西隅付近にあって、北西辺の一部を検出した。65・67号住居跡を切るが、V-4区とした調査区では検出できていない。

北西辺長は3.0mと小規模で、深さは0.1mが残存していた。北西辺の中央付近で伏せられた土師



第113図 60～65号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

器高杯が出土、その前面で灰黄色粘質土塊が見られた。袖は残っていないが、カマドの残骸であろう。

北炭に近い部分で直径は小さいが非常に深い柱穴を検出している。主柱穴の一つであろう。

出土遺物

土器（図版53、第113図13～15）13はカマドの支脚に使われていた高杯で図示部は完存する。杯部は楕形というよりは鉢形と表現するのが相応しく、連続的に緩く内彎して端部内側を小さく凹ませている。杯部内側では半分ほどが褐色、残る半分ほどが真っ赤となっている。14は突出する平底の底部片、15も平底の底部片で、これは器肉が黒色、内外器表が暗灰色となる。

65号竪穴住居跡（図版33・34、第68図）

調査区南西隅付近にあって、63・64・67号住居跡に切られていた。北西辺中央付近の一部を検出したのみであるが、そこが丁度ベッド状遺構が途切れるところであり、L字形のベッド状遺構を対称に設置していたことがわかる。通常、この位置には屋内土坑が置かれるが、ここでは検出できなかつた。検出面からベッド状遺構までは5cmに満たない深さで、ベッド状遺構の高さは0.2mを測る。

焼土が多く検出されたが、炉・主柱穴といった主要な構造は不明である。

出土遺物

土器（第113図16・17）16は大きく浅く開く高杯の口縁部小片。17は口縁部が緩くC字形を描く壺片で、1/3が残る。残存する外面下端付近が黒色、外面縁部付近から内面にかけて真っ赤となっている。

66号竪穴住居跡（図版33、第44図）

調査区南西端付近に位置し、11号住居跡とした遺構を切る。辺長3.1×3.3mのほぼ方形となる平面形をもち、深さは0.1mに満たない浅いものであった。

北西辺中央に明黄褐色粘質土を用いたカマドの左袖が残存していた。火床も残っていて、主柱穴は判然としないが、小型の住居跡である。

出土遺物

土器（図版53、第114図1～9）図示した土器のうち、1～3が住居跡埋土から、4～9は住居跡付近の遺構検出作業中に出土したものであって帰属が定かでないものであるが、ここで紹介する。

1～3はいずれも須恵器小片で、住居跡の時期決定には相応しくない。

4は2/3が残存する蓋で宝珠形のつまみをもつ。返りは小さく、口縁部が下に向かって折り曲げられる。5～7は小片。8は脚部として図示したが、口縁部であるかも知れない小片。9は脚台。

67号竪穴住居跡（図版34、第115図）

調査区南端中央付近に位置し、64号住居跡に切られるが、65・68・70号住居跡を切っていた。69号住居跡とも重複するが、先後関係は確認できていない。2辺ともに3.0mほどが残存するが、全体の規模は不明である。深さは0.1mほどが残存するのみであった。

北西辺付近にはほぼ一様な灰黄色粘土の塊があつて、断ち割ったところ住居跡外65号住居跡の方へ伸びていた。住居跡間の隙を取り払つたところ、この粘土塊の下位に小型不整形の浅い落ち込み

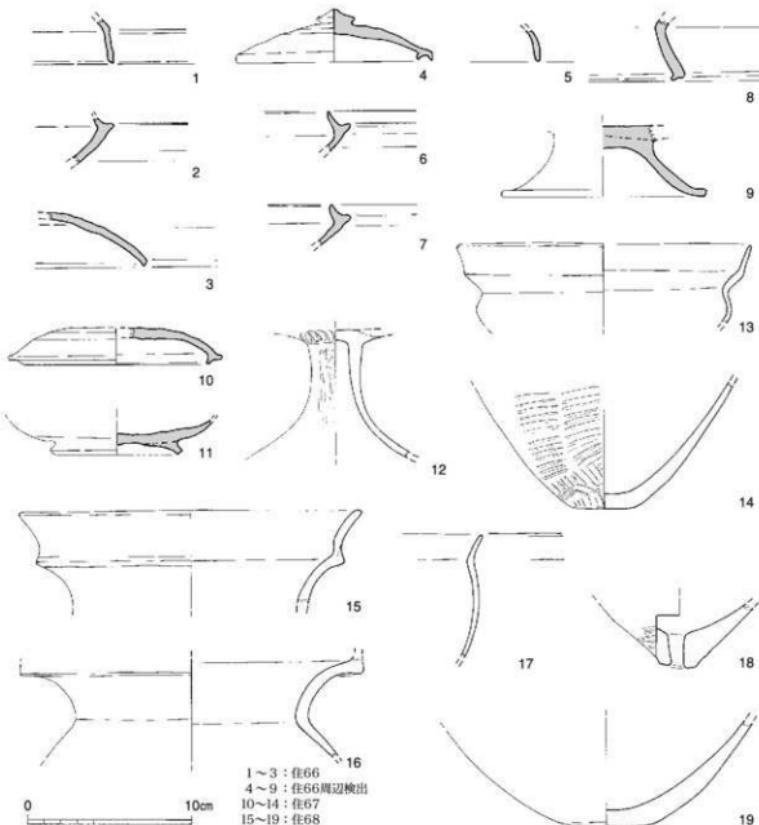
あったことから、この粘土塊はこの住居跡とは無関係の遺構であったようである。

炉・カマドも確認できず、主柱穴も定かではない。

出土遺物

鉄澤（第170図1） 出土位置の詳細がないが、この住居跡の上に鍛冶炉が置かれていて、それに関連するものである可能性も考えられる。図上半は方形に近い本来の形状を保ち、下部は折損している。重量は225g。

石製品（図版59、第171図10） 上記粘土塊の中から出土した淡灰色の頁岩製砥石で、出土状態から見て本来はこの住居跡に伴うものではないのであろう。図示した面がよく使用されていて、左側面は通常の使用とは別に、図表裏方向に浅く間隔が不規則な条線が多く入る。また、背面は剥離しているが、その盛り上がる部分の周縁と側面との間の稜に使用が見られる。



第114図 66~68号竪穴住跡出土土器実測図 (1/3)

土器（第114図10～14）10・11は須恵器。10は天井部の1/2が残存、口縁部は小片である。返りが踏ん張り、身受けは未発達である。11は高台付杯で、高台は小振りで外方へ踏ん張る。

12は土師器高杯で、図示部はほぼ完存。脚上端の側面に杯部接合のための刻みがある。13は二重口縁をもつ鉢で、口縁部付近の1/3が残存する。器表が荒れているが、本来的に薄手のようである。14は底部に多方向からの叩きを施して平底としている。

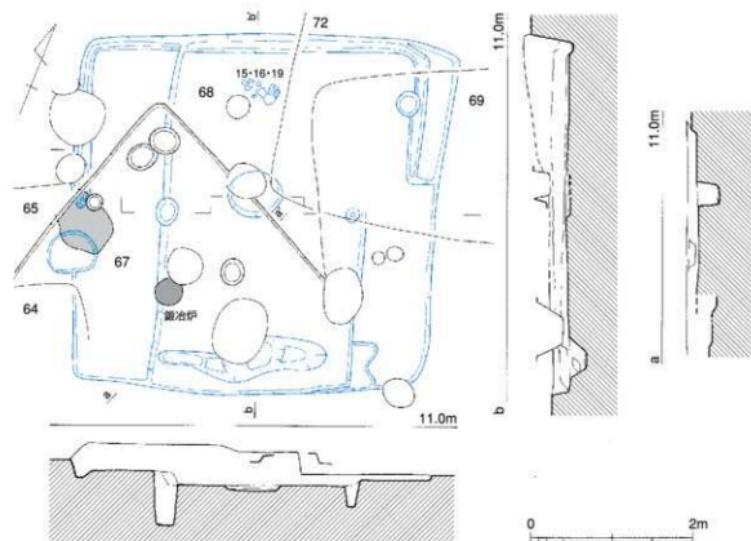
68号竪穴住居跡（V-4区16号住居跡）（図版34、第115図）

付近で検出したすべての住居跡に先行するようであるが、直接には67・69・70号住居跡に切られていた。略南北長は4.4m、東辺は形状が乱れているが、西辺のベッド状遺構の幅約1.0mを参考にすれば、東辺は南半部の在り方が本来的なものであろう。その場合の東西長は最大で4.6mとなる。東北隅付近の略南北方向の小溝は発掘ミスであろうか。

炉跡は住居跡中心からやや北へずれて位置する直径0.6～0.7mの浅いもので、2本の主柱穴はベッド状遺構の縁に配置される。なお、東側の主柱穴は杭と重なっていて、完掘できていない。

ベッド状遺構は遺構検出面から最大で0.4m近い深さがあり、炉周辺とは0.15mの差がある。周壁溝はしっかりしたものであるが、完周はしなかった。

V-4区16号住居跡とした南辺付近は、屋内土坑があつてよい位置に長い溝状の遺構が検出されているが、これは屋内土坑と他の遺構が重複しているのかも知れない。



第115図 67・68号（V4-16号）竪穴住居跡実測図（1/60）

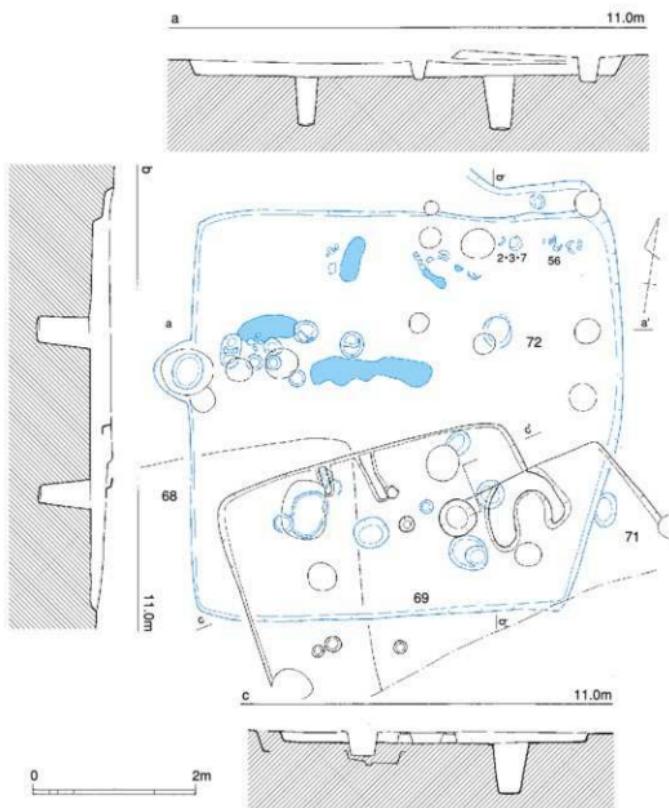
出土遺物

石製品（図版59、第171図9） 灰黒色となる泥岩を用いた砥石。図示した面は擂鉢状に凹んでいて、背面は上下方向に凹む。左右両側面を含め4面を使用。

土器（第114図15～19） 15は1/2が残存する二重口縁壺。16は口縁部を欠くが、1/3が残る二重口縁壺である。17は口縁部の外反が弱い壺あるいは鉢の小片。18は壺の底部で、外面は叩きで仕上げる。19は平底の底部であるが、外周は丸みをもって立ち上がる。

69号竪穴住居跡（図版35、第116・117図）

調査区南辺付近にあって、68・70・73号住居跡を切り、71号住居跡に切られる。北西辺は3.8mの規模をもつが、隣接する辺長は不明である。深さは0.1mほどが残存する。



第116図 69・71・72号竪穴住居跡実測図 (1/60)

カマドは北西辺中央からやや西に偏して設置され、明青灰色粘質土で袖を作っていた。内部には土師器高杯が倒置され、周辺には同瓶片も数点あった。また、カマド右袖の外側には土師器壺の口

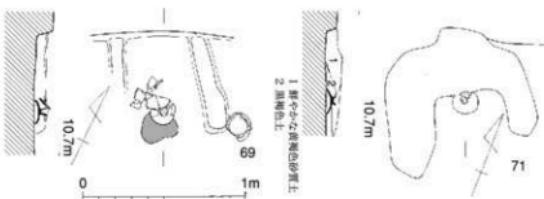
縁部がやはり倒置されていた。火床は焼けている。

断面に図示した柱穴が、位置からみて主柱穴に相応しいが、深さが多いに異なる。発掘ミスであろうか。

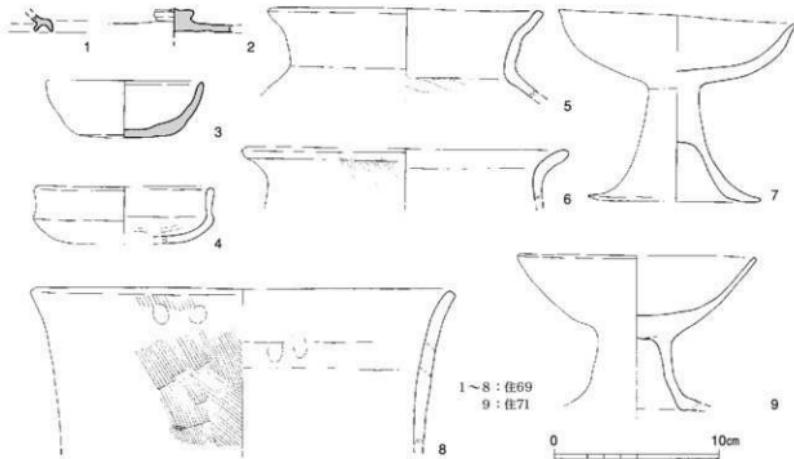
出土遺物

土器（図版53、第118図1～8）1～3は須恵器。1は極小片、2は扁平なつまみの杯蓋である。3は口縁部付近の1/3が残存する杯身で、胎土・作りは良好、外底面は箒削りの後に撫でているようである。

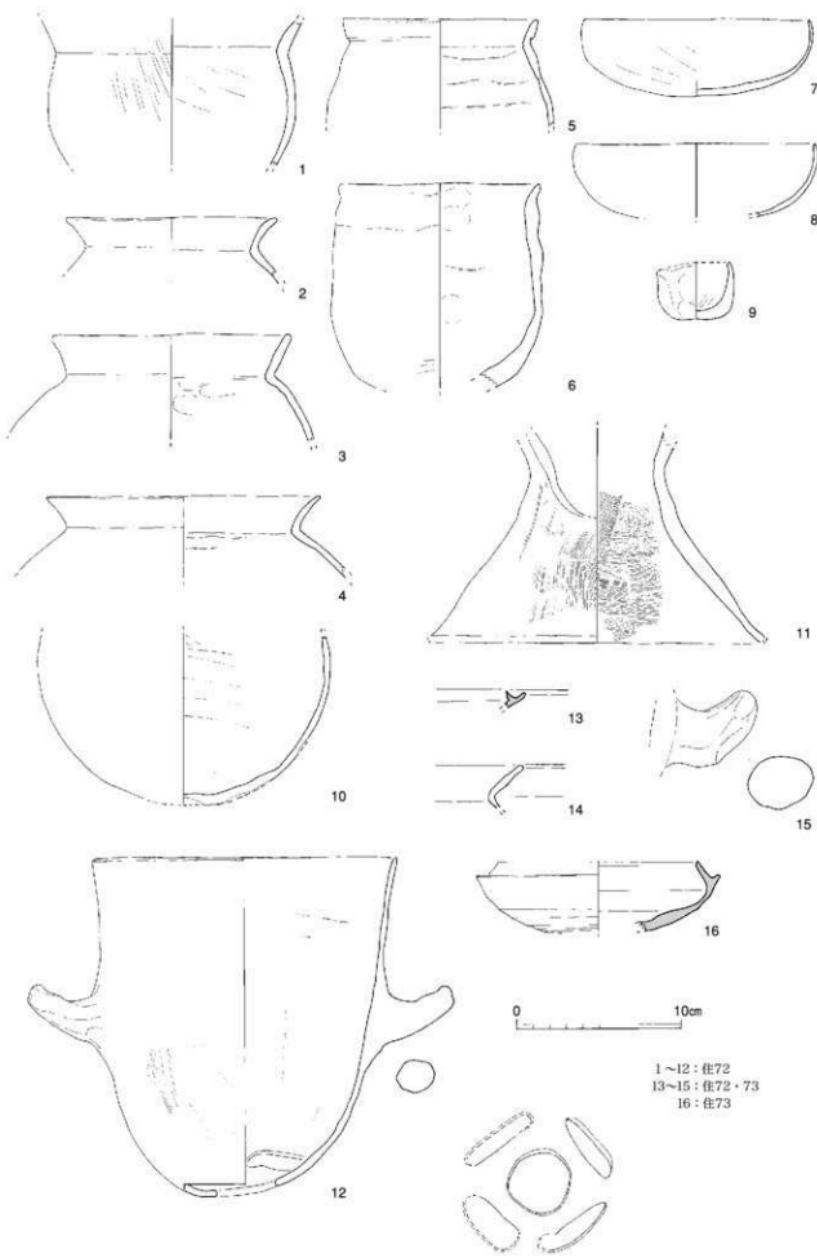
4～7は土師器。4は赤く焼き上がる杯で、内面に箒磨きが施されるようである。胎土・作りは良好。5は図示部がほぼ完存する壺で、口縁部が屈折しながら高く立ち上がる。「カマド右袖外」の注記がある。6は体部の張りが弱く、肉厚となる口縁部が短く外反する。7は支脚に転用された高杯で、器表の荒れがひどく脚部も1/2を欠く。杯部は肉厚で浅い椀形となるが、口端部の形状には不安がある。脚上部は中実、脚端部の形状にも不安がある。



第117図 69・71号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第118図 69・71号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



1~12: 住72
13~15: 住72・73
16: 住73

第119圖 72・73号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

71号竪穴住居跡（第116・117図）

調査区南辺の中央付近にあって、69・72号住居跡を切るカマドとその周辺の一部を検出したのみである。

カマドは鮮やかな黄褐色砂質土で袖を作り、内部に土師器高杯が倒置されていたが、袖内面には焼けた痕跡は見えず、火床も確認できなかった。

出土遺物

土器（図版53、第118図9） 図示部がほぼ完存する土師器高杯で、支脚に転用されていた土器である。杯底部が肉厚となり、口端部に向かって緩く内彎して伸びる。口端部には変化を加えていない。脚部は径が大きく、短い。縦方向に1/4ほどが焼けて真っ赤となっている。

72(70)号竪穴住居跡（図版35、第116図）

調査区南辺中央付近に位置し、67・69・71・73号住居跡に切られ、68号住居跡を切っていた。東辺と南西辺付近で別の遺構番号をつけていたが、最終的に同一となつたために70号を欠番とした。平面形はやや歪であるが東西長約5.3m、南北朝は5.0mである。深さは最大で0.3m。

埋土に焼土や炭が多く混入し、床面も数ヶ所が焼けていたが炭化材といったものはなかった。

主柱穴は4本であるが、炉の痕跡は確認できなかった。

出土遺物

土器（図版53、第119図1～12） 1は小さく外反する短い口縁部をもつ鉢あるいは甌で、焼けた器表が荒れる。復元口径には不安がある。2～4はそれぞれ口縁部の形状が異なる甌で、2は1/3、3は3/4、4は1/2が残存する。5・6は粗製の鉢で、粘土紐の継ぎ目が一部に残る手捏土器。5は口縁部付近の2/3が残存、6は同じく完存する。7は底部が完存する椀で、器表が剥落して薄くなり、口端部の形状に不安がある。8も同様の椀である。9は胎土精良な手捏ミニチュア土器。10は球形となる体部片で、外表に弾けが多い。11は抉りの入る器台で、内外面を細かい刷毛目で仕上げる。特に火を受けたと思われる部分はない。

12は住居跡の北西隅付近から出土したもので、重複する73号住居跡に伴う柱穴などがあったのかも知れない。底部が丸底となって、中央に大きな円孔、その周囲に長円形孔を4個配する。把手も断面円形で棒状となる。

73号竪穴住居跡（第120図）

調査区南辺付近に位置し、51・69号住居跡に切られ、68・70号住居跡を切っている遺構として番号を付した。しかし、特に北東辺が不明瞭で、少しずつ掘り下げていくうちに結果的にわからなくなつた。断面図に2本のしっかりした柱穴を示したが、4本柱を構成する柱穴は見あたらない。また、炉・カマド等を確認できなかつたことから、住居跡との確信はない。

出土遺物

土器（第119図13～16） 遺構に伴う固有の出土土器は16に示した須恵器杯身である。13～15は「住72・73」の注記がある遺構検出時の出土土器で、一部はこの住居跡に伴うと思われる所以ここで紹介する。

13は極小の須恵器片。身として図示したが蓋であるかも知れない。14は口端部を断面方形とす

る古式土師器壺の小片。これは72号住居跡に伴うものであろう。15は瓶把手で、断面は円形となる。16は口縁部付近の1/4が残存する通有の杯身である。

74号竪穴住居跡

(図版35・36、第121図)

調査区南側、住宅基礎の西に近接する。75～78号住居跡を切つていて、15号土坑とした本来4号土坑に繋がって溝状遺構となっていたと思われる遺構に切られている。

辺長は $4.9 \times 5.4\text{m}$ の正方形に近い平面形となり、深さは 0.3m ほどが残存していた。

北西辺中央付近に青灰色砂質土を用いたカマドが設置されていて、その部分がわずかに外側へ張り出していた。明瞭な袖は確認できず、土師器高杯が正立した状態で、それも青灰色砂質土に覆われて出土した。カマドは潰されたようである。主柱穴は4本。

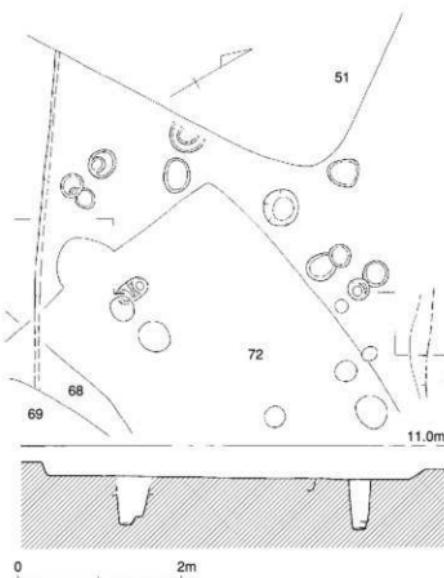
出土遺物

石製品(図版57・59、第167図9・13・第172図13) 第167図9は灰黒色滑石製の鉗鍤車で、直径 3.6cm 、厚さ 0.8cm 、口径は 0.7cm 、重量は 15.5g である。上面・側縁に研磨痕が著しい。同13は緑味帯びる乳白色の滑石製の用途不明の石製品である。右に図示した面の孔は比較的大きく、ほぼ直に入っているが、左に示した孔は比較的小さく、かつ斜めに入るものが多いようである。いずれにしても表裏の孔は対応していない。第172図13は灰白色に近い頁岩製の砥石で、2面を使用する。表面が脆い。

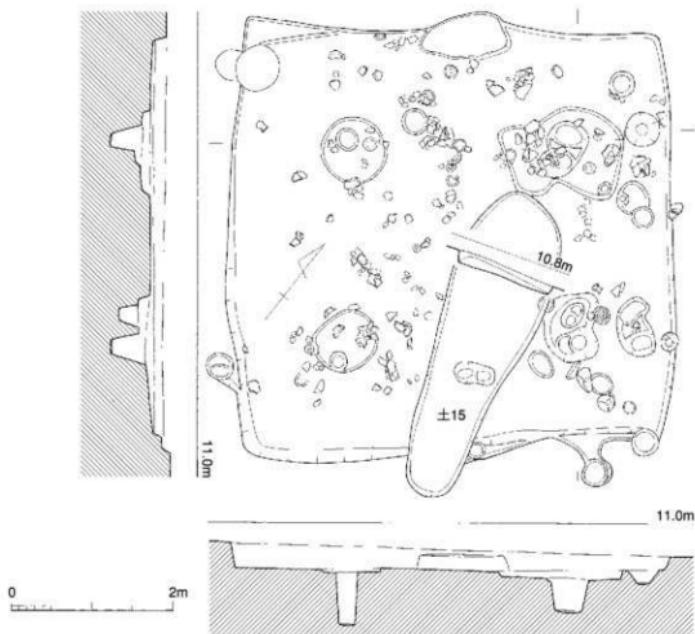
土器(図版53～55、第123～125図) 遺構図に示したように、多くの土器が無秩序な状況で出土した。1～37が須恵器、そのほかは土師器である。

1は天井部が丸みをもち、口縁部へ連続的に移行、口端部に面をもつ杯蓋である。2～7は天井部が扁平となり、口端部を丸く收める杯蓋で、2に図示した1/4の残片が復元口径 13.2cm である他は、いずれも口径 $13.8 \sim 14.6\text{cm}$ 、器高 $3.5 \sim 4.1\text{cm}$ と法量がまとまっている。8～10は天井部を不定方向の籠削りで調整するもので、口径 $14.0 \sim 14.4\text{cm}$ 、器高 $3.9 \sim 4.6\text{cm}$ とやや大きくなる。

11～26は杯身で、口径 $10.4 \sim 14.0\text{cm}$ を測る。口径が最小の11は他に比して立ち上がりが長く、内傾の度合いも大きいやや特殊な形態となるので、これを除けば12が最小で口径 12.2cm である。ほとんどが $12 \sim 13\text{cm}$ 前半に取まるといえる。16に示した土器は外底面を不定方向の籠削りで丁寧



第120図 73号竪穴住居跡実測図 (1/60)

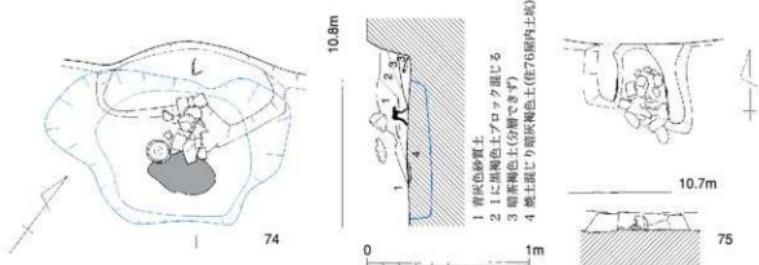


第121図 74号竖穴住居跡・15号土坑実測図 (1/60)

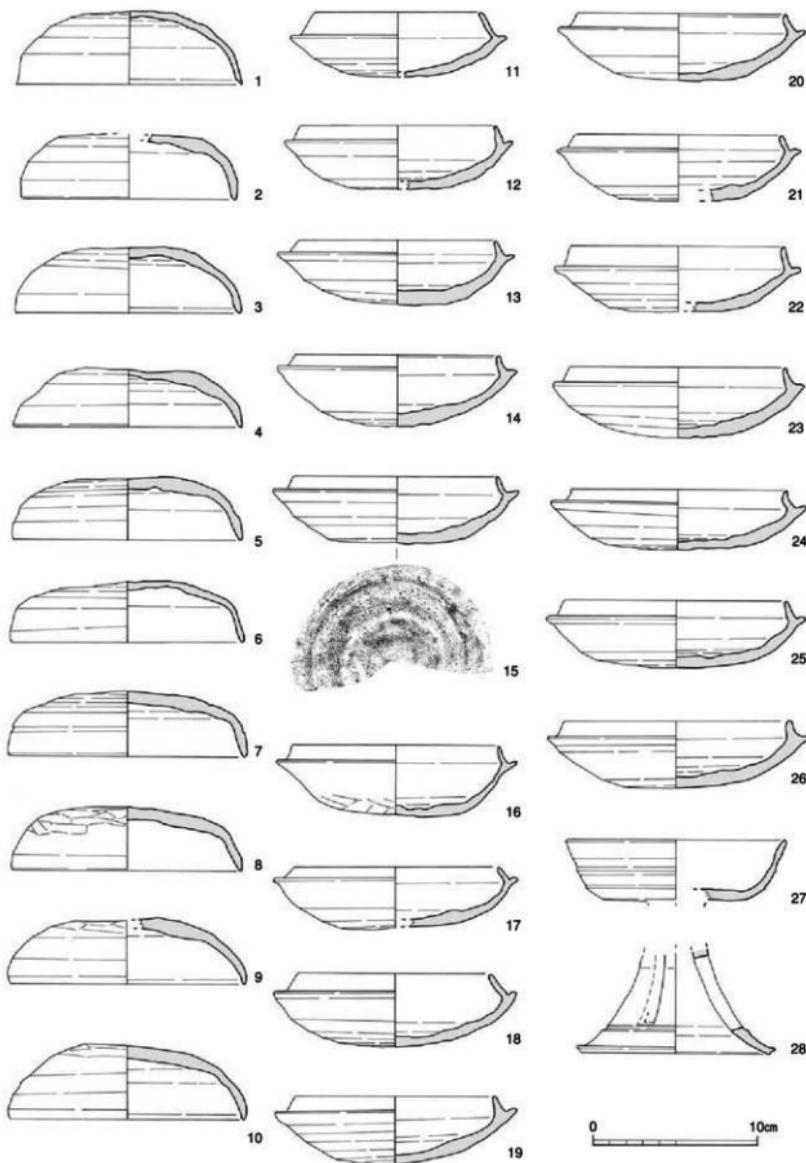
に調整していく、8～10とセットになるものであろう。なお、15では内底面に箇記号が見られるが、全体は不明。

27は丁寧に作られた高杯片で、無文。28は2段3方に透孔をあける脚部片。29は高杯の蓋であろう。天井部が低く、口縁部との境には段を付す。丁寧に作られた土器であるが無文。

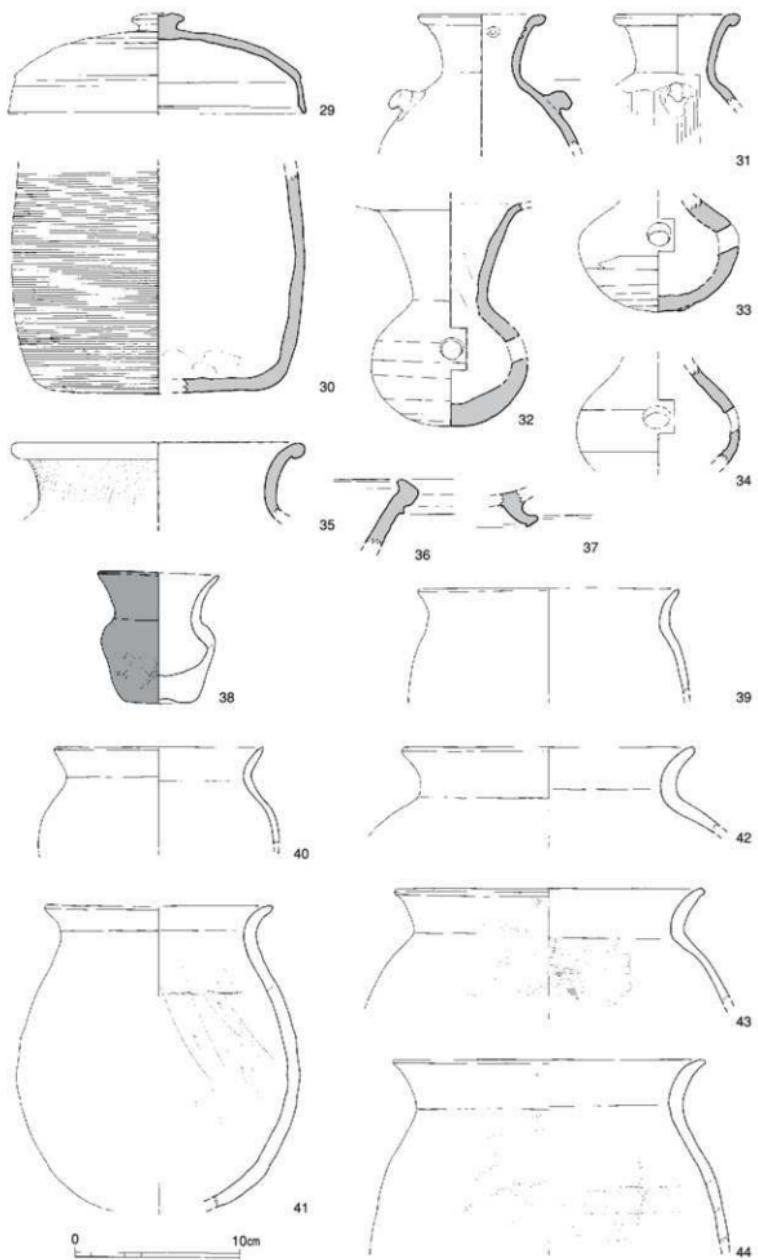
30は寸胴の体部で外底面まで全面にカキ目を施す異形の土器である。31は小型の提瓶。32～34は脇で、いずれも無文。32は図示部が完存。34は32に似て最大径部の位置が低くタマネギ状の体部となる。33は最大径部がやや高い位置にある。これは胎土に黒色粒が目立つ。



第122図 74・75号竖穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第123図 74号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)



第124図 74号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)



第125图 74号墓穴住居出土器物图3 (1/3)

35は口縁部を玉縁状とする壺で、頸部に刷毛目の痕跡が残る。36・37は小片。

38は口縁部の一部を欠くほかは完存する手捏ねの土器壺で、底部は平底。器表は灰黄褐色であるが、外面には赤色顔料の痕跡が残る。なお、器肉は黒色となる。39～48は壺。いずれも口頸部がC字形を描くものだが、48に示した土器は端部を断面方形として混入であるかも知れない。また、41の土器は頸部が縮まり、壺と呼んでもよいような形状となる。体部内面を幅広い沈線のような箇削りで雑に仕上げている。

49はカマドに向かって右手前、北側の主柱穴埋土上から出土した高杯で、赤く焼けている。杯部は中位に甘い稜をもち。口縁部は直線的に伸びる。脚部は端部が反転している。50も住居跡の北東付近から出土した高杯脚部で、3/4ほどが真っ赤に焼けている。

51・52は瓶である。

75号竪穴住居跡（図版37、第122・127図）

住宅基礎の西側に位置する。76・80号住居跡を切って、74号住居跡及び4号土坑の南端に一部を切られていると判断した。遺構のラインは識別困難で、カマドが見えていたので精査して図のように発掘したが、東辺は不明で確信は持てない。

カマドが北辺中央に位置するとすれば、東西長は3.6m前後と復元でき、南北長は2.8mほどであった。深さは0.4mほどである。

カマド袖は淡青灰色粘質土を用いて作られ、内部に角礫を用いた支脚が立っていて、その周りには焼土塊が多数散乱していた。また、支脚から前面の袖内側は焼けて硬化していた。

主柱穴は不明で終わった。

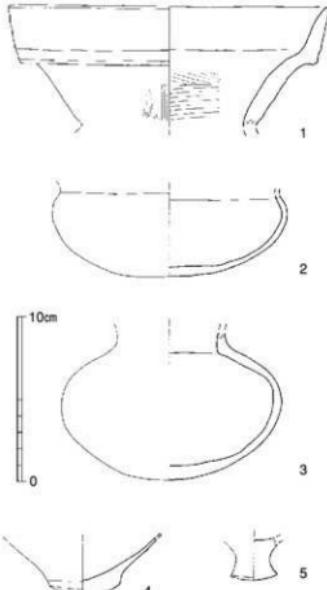
出土遺物

鉄製品（図版58、第169図6） 鉄板状の鉄製品で、本来の形状は不明。

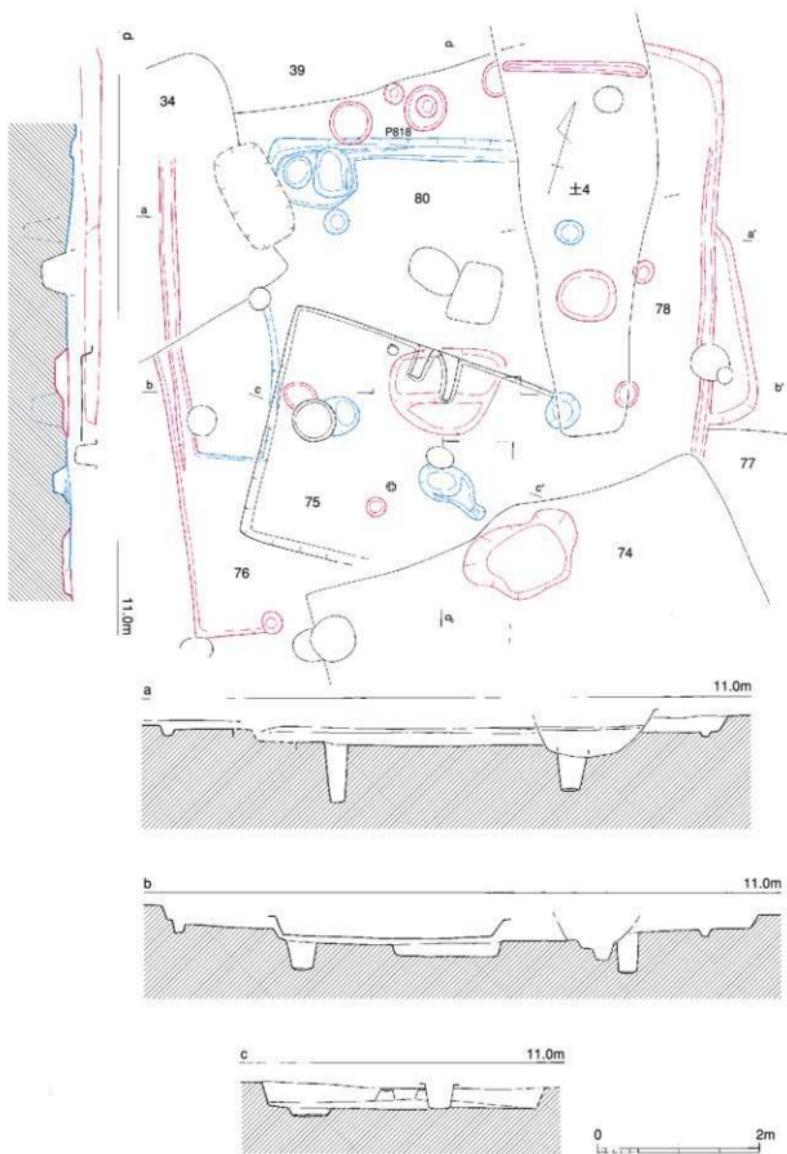
土器（図版55、第126図） いずれも下層遺構に伴うとするのが妥当な土器で、この住居跡固有の土器はないようである。1は図示部の1/4ほどが残存する二重口縁壺片で、器表が荒れている。2は体部が偏球形となる鉢で、内面は箇磨きで仕上げるようである。焼けて真っ赤となる。3は胎土・作りともに良好な壺体部。外底面は不定方向の箇削りで丁寧に調整される。4・5は丸底傾向の底部。

76号竪穴住居跡（図版37、第127・128図）

75号住居跡の下層にあり、その北及び西側の住居跡を呼称した。西辺を34号住居跡、南辺を74号住居跡に切られ、東側には4号土坑が掘削されている。



第126図 75号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)



第127図 75・76・78号竖穴住居跡測図 (1/60)

一見すると76・78号住居跡は一つの遺構のように見えるが、屋内の施設として75号住居跡のカマド直下に大型の炉跡があり、そのすぐ南及びさらに南東部の74号住居跡のカマド下に大きさが異なるが屋内土坑とみてよい土坑が2基ある。また、柱穴をみると、大型の炉跡を挟む2本のしっかりした柱穴は対になるものであり、その両者の内側に位置する2本と対となる4本柱のセットも認められる。柱穴と屋内土坑は住居跡2軒分があり、4本柱と炉に近い小土坑、炉・2本柱と74号住居跡カマド下の屋内土坑がそれぞれ対応するものであろう。

検出した東辺・西辺はやや方位が異なっていて、西南隅を形成するライン、大型の炉と屋内土坑及び2本柱で構成される住居跡として、当初の通りに76号住居跡としておく。

2本柱の住居跡の場合の主柱穴は中央に置かれることから、南北方向は6.0mほど、東西方向は7.2mに復元できる。78号住居跡の東に張り出すラインが丁度復元される東辺と重なることから、この東南隅は発掘ミスであるかも知れない。

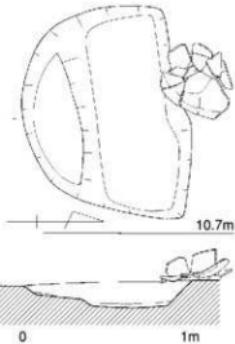
出土遺物

土器（図版55・56、第129図） 上記したように、76・78・80号住居跡は検出時から截然と判別したものではなく、南西付近を76号、4号土坑の東側を78号、4号土坑の西側で75号住居跡の北側を80号住居としていたものである。ここに示した土器は「76号住居跡」の注記があり、出土位置が特定できない土器は南西隅付近からの出土である。ただ、6は75号住居跡カマド下の炉跡から出土した土器で確実にこの住居跡に帰属する。9に示した大型の鉢は炉跡のすぐ脇から出土したもので、ほぼ完形に近い。土器は薄い炭層を挟んで床面上にあって、この出土状態を積極的に評価するならばこの住居跡に伴う土器で、76号住居跡が78号住居跡に後出するといふことがいえよう。その場合、近くから出土した2・5に示した土器も同様にこの住居跡に伴うものとできる。

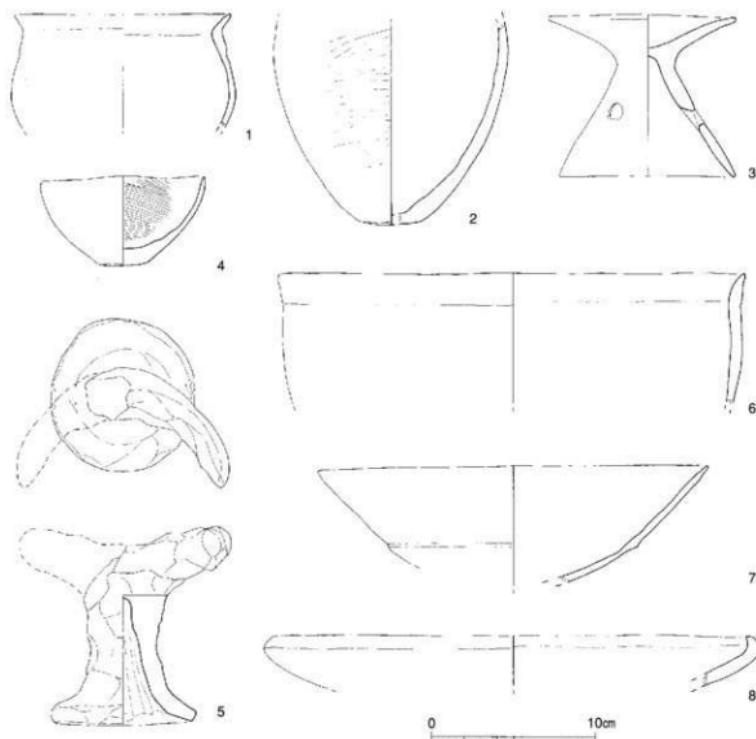
1は口縁部が短く外折する小型甕。2は外面を叩きで調整する甕であるが、縦長の残片であり復元した器形に不安がある。3は受け部が浅く、脚部が直線的に立ち上がる小型器台。図示部はほぼ完存し、3孔が穿たれる。4は小型平底の鉢であるが、器表剥落のため口端部の形状は不明瞭。5は角状突起を2本もつ支脚であるが、他の多くのように突起の反対側のつまみ状の小さい突起や円孔が見られない。6は口縁部にはほとんど変化を加えない土器で、鉢であろうか。口縁部下にシャープな細い沈線が入るが、装飾的には見えない。7は口縁部が直線的に大きく開く高杯であるが、下半との屈曲が小さく連続的に作られたようになる。8は口縁部を内側に巻き込む在地系の高杯片。小片のため復元径に不安がある。9は口径39cmほどの大型鉢で、底部は平底。器表が荒れている。

77号竪穴住居跡（図版37・38、第130図）

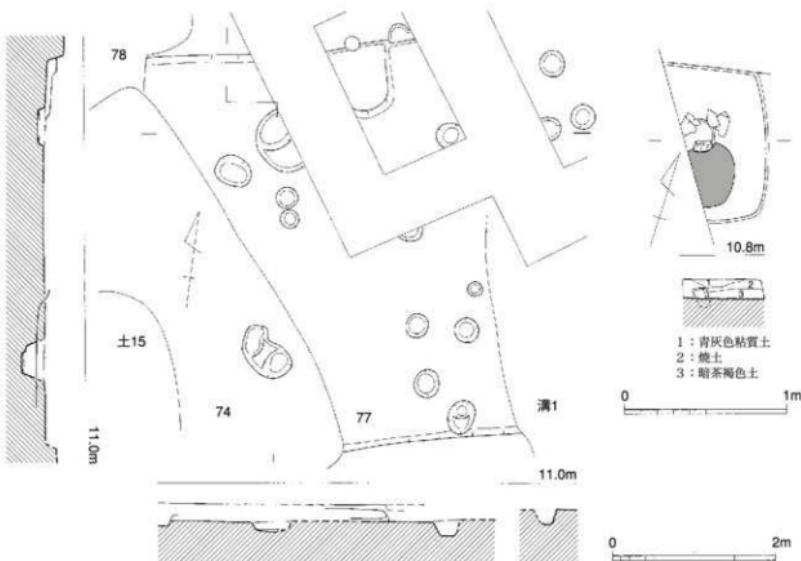
調査区南東隅付近に位置し、住宅の基礎に壊されて詳細は不明である。確認できる規模は略南北長だけで、約4.9mを測る。西辺は74号住居跡に切られ、78号住居跡を切るのであるが、ここは発掘を失敗した。また、北東隅が基礎の間に現れるはずなのであるがなぜか確認できなかった。東



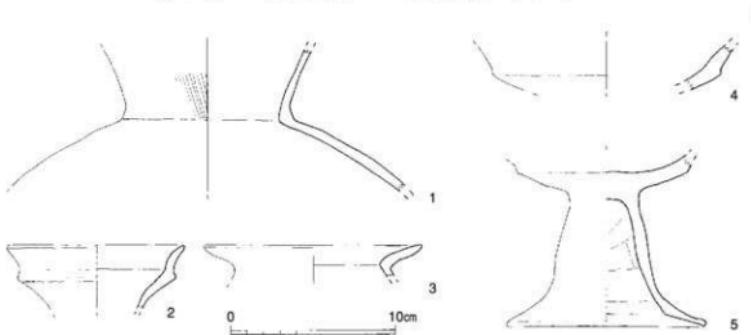
第128図 76号竪穴住居跡炉跡
実測図 (1/30)



第129図 76号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第130図 77号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60, 1/30)



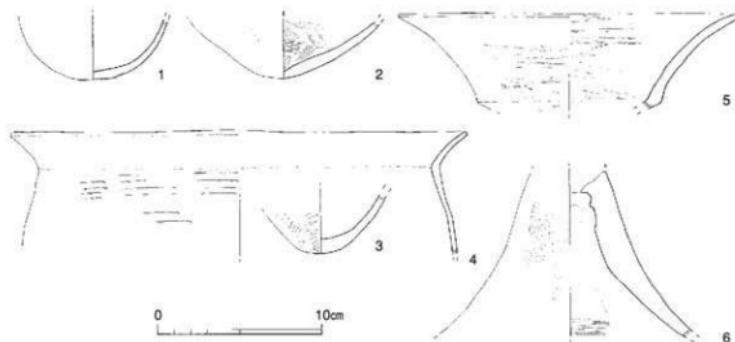
第131図 77号竪穴住居跡出土器実測図 (1/3)

辺南側は1号溝に切られる。

北辺に設置されたカマドを基礎の間で確認できた。火床と角礫を用いた支脚が残存していたが、袖は壊されたようである。

出土遺物

土器（第131図） 1は頸部の1/2が残存する広口壺で口端部を欠く。2は二重口縁壺小片。3は壺小片である。4は高杯の小片。5はカマド付近から出土した高杯で、脚部は完存する。杯底部は肉厚でピンクに変色、脚部は逆に薄手となり、ここは変色していない。



第132図 78 (80)号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

78 (80)号竖穴住居跡 (図版37、第127図)

76号竖穴住居跡の説明を参照していただきたい。西辺には南側が開く幅1m前後のベッド状遺構が設けられていて、遺構検出面からの深さは5cmほどに過ぎない。高さは0.2mほどとなる。このベッド状遺構は34号住居跡・攪乱を経て東へ曲がり、さらに4号土坑の中で南へ屈曲していたものと思われる。ベッド状遺構と4号土坑が交わるところから0.8m北側の4号土坑底に並行して走る小溝があって、これが北壁下の周壁溝であろう。その延長線上の4号土坑東で、ここでは小溝が伴わない住居跡の立ち上がりが現れている。76号住居跡で記述したように、4本柱・小型の屋内土坑・ベッド状遺構で構成される住居跡を78号住居跡とする。

ベッド状遺構がある場合、主柱穴はそれに接して配置されることが普通であるが、ここでは離れて置かれている点でやや特異である。炉跡は4本柱内北側の土坑に壊されたものであろうか、痕跡を確認できていない。

上記の前提でプランを復元すれば、東西方向では主柱穴間が芯々で2.8m、東壁と主柱穴間が1.8mを測ることから折り返して東西長は6.4mほどに復元できる。南北長は屋内土坑南から北東隅付近の北辺まで5.5mほどの規模となる。

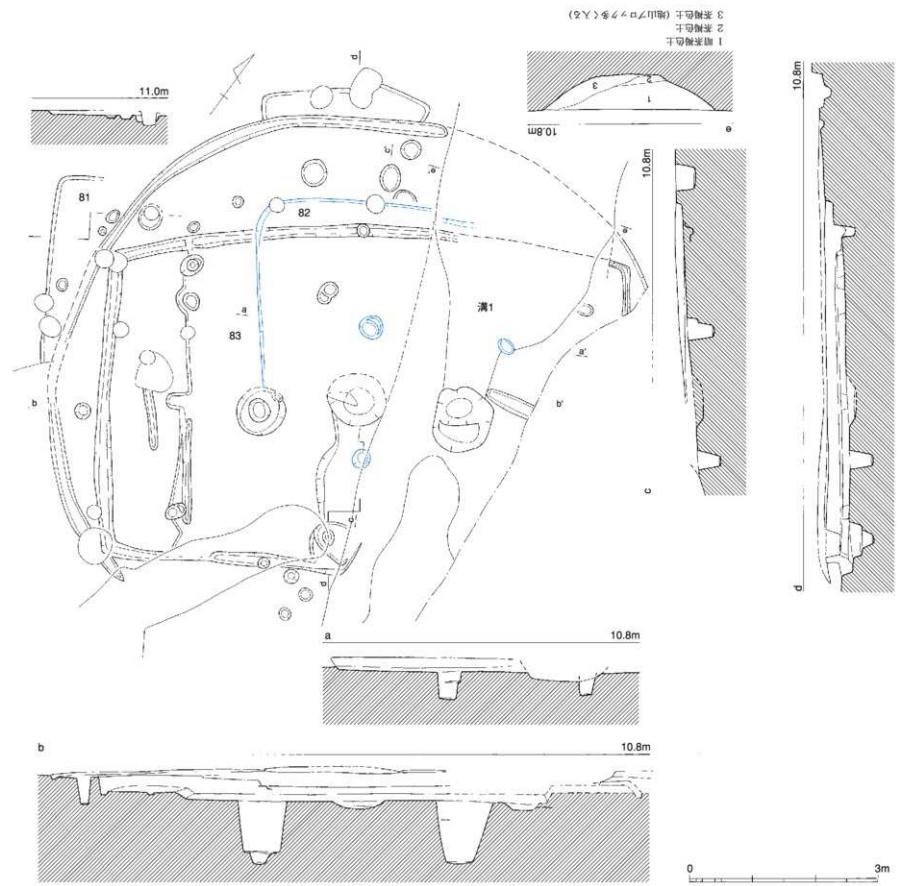
出土遺物

土器(第132図) 1-3に「住78」、その他に「住80」の注記がある。1は半球形の鉢で、口縁部を欠損する。2は尖底気味の底部で、内外面に刷毛目が見える。3は叩きで調整された丸底の底部。4は口縁部の外反が弱く、体部に叩き痕を残す甕。5は杯部が大きく高く開く高杯である。内外面に箒磨き痕が見える。6は外面に叩き痕がかすかに残ることから器台であろう。

79号竖穴住居跡 (第101図)

住宅基礎の北東側、54号住居跡と重複し、それを切っていると判断された。これもごく一部を検出しただけで深さは0.3m近いが、遺構北西辺は長さ1.4mで屈曲している。これが正しければ住居跡とは考えられない大きさであり、評価を保留しておく。

図示に堪える出土遺物はない。



第133図 81・82・83号竪穴住居跡、1号溝土層実測図 (1/60)

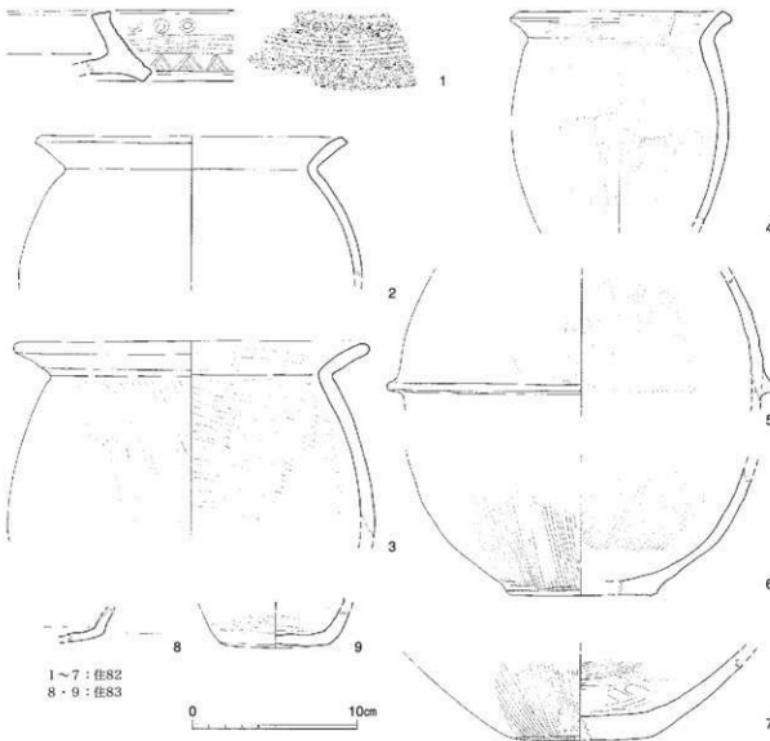
81号竪穴住居跡（第133図）

調査区南辺東端付近に位置し、83号住居跡に切られていると判断した。深さは5cmに満たない。北西隅付近を確認しただけで、主柱穴や炉などを確認できておらず、住居跡と確信できるものではない。これも図示に堪える出土遺物はない。

82号竪穴住居跡（図版38、第133図）

81号住居跡の北東に近接し、本来は重複するような位置にある。南東辺はわずかに低くなつて不明、北東辺は1号溝に切られて失われている。断面に示した3基の柱穴を主柱穴としてよいと思われ、その場合は北西の柱穴と壁との位置関係で $5.7 \times 6.0\text{m}$ ほどの規模に復元できる。炉・カマドは確認できなかつた。

住居跡の周りでは上端幅0.2m、最も深い部分で0.1mの規模の小溝が直径10mの円形に取り巻いていた。後述する83(=84)号住居跡の3つの隅も、この円形小溝に接していて偶然とは思えない部分があるが、通常小溝を巡らせる場合は住居跡との間に一定の空間を設けることが普通であり、82号住居跡に伴う遺構としておく。このように周溝を巡らせる住居跡はこの遺跡では珍しい。



第134図 82・83号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

土器（第134図1～7） 1は頸が瘤状に突出する二重口縁壺片で、口縁部を複線鋸歯文・籠描沈線・竹管文で装飾する。胎土は粗い。2・3は口縁部が強く外反する壺で、体部の張りが弱い。2は口端部を断面方形とするが、3は特に変化を加えないようである。4は口縁部が短く外反する壺で、これは口端部をしっかりと断面方形とする。5はしっかりした突帶を付す体部片。6は大きな平底の底部をもつ。7も平底となる底部で、これは外底面に刷毛目が残る。

83 (84) 号竪穴住居跡（V-4区14号住居跡）（図版38、第133図）

82号住居跡の下層にあって、1号溝に切られる。1号溝の東で周壁溝を検出していて、これを83号住居跡、82号住居跡南西を84号住居跡としていたが、82号住居跡を除去したところ、両者の周壁溝が直線上にのことから同一の遺構と判明した。この報告に当たってV-4区14号住居跡の実測図と合成したところ、やはり両者は同一の住居跡であると確認できた。

北西辺長は8.3m、南西辺長は4.8mを測り、中央付近では同方向の幅は5.5mとなる。炉周辺と北西辺の最高所とのレベル差は0.4mほどである。

南西辺に幅1m余のベッド状遺構が設置されていて、その高さは0.1mほどであった。部分的にベッド状遺構の裾にも小溝が掘削されている。中央の小溝・焼土は別の遺構に伴うものであろう。なお、対称の位置にあるべき遺構は1号溝によって壊されていた。

この住居跡では炉が住居跡の中心に位置していて、珍しい。直径1m近い円形土坑であるが、深さは0.1mほどに過ぎない。なお、炉はV-5区では検出できず、4区の調査成果に負っている。

主柱穴は両者を結ぶ軸が炉跡中心をわずかにずれる位置に置かれたしっかりとした2本からなるが、ベッド状遺構から離れている。

屋内土坑も炉跡と軸線が揃わない位置に掘削されている。

出土遺物

土器（第134図8・9） 今回の調査では小片2点が図示できるのみである。8は極小の残片で高杯の可能性がある。9は灰黒色となる底部片で、胎土良好で外面には籠磨きが見える。

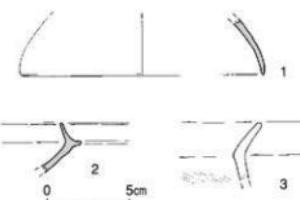
3. 掘立柱建物跡（図版19、第136図）

調査区北東隅付近で1棟を確認した（1号掘立柱建物跡）。17・18号住居跡を切る 2×2 軒の總柱建物跡である。方位は座標北からわずかに東へ振れていって、芯々で東西長2.7m、南北長は3.0mである。

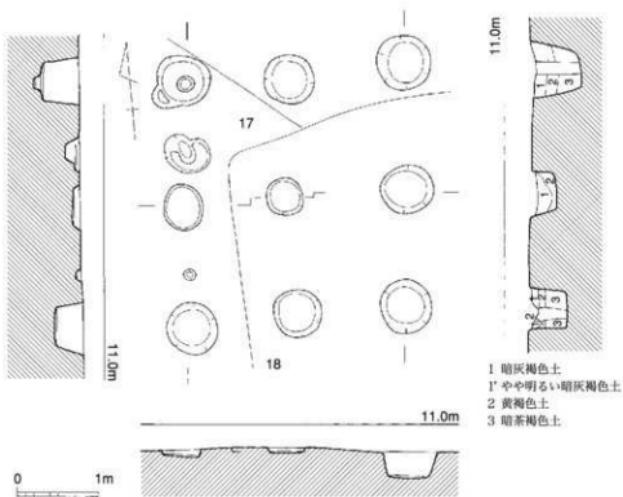
柱掘形は円形で、径は0.4～0.7mとばらつきがある。深さも、断面に示した中央の2基が異常に浅い。柱の痕跡は径0.15mほどであった。

出土遺物

土器（第135図） 1は須恵器蓋の1/4ほどの残片で、薄手となっている。2は須恵器杯身の小片。3は土師器壺のやはり小片。



第135図 掘立柱建物跡出土土器
実測図 (1/3)



第136図 挖立柱建物跡実測図 (1/60)

4. 土坑（火葬墓）・柱穴

土坑とした遺構の中で、形状が比較的整ったあるいは遺物を出土したものを紹介する。

3号土坑（図版14、第31図）

調査区北西隅付近、2号住居跡に切られている。北辺長は1.8m、西辺は1.3mまで確認している。住居跡のようなしっかりした矩形平面であるが、規模が小さく、炉・柱穴といったものがないために土坑としておく。深さは最大で0.15m、東辺に高さが1mに満たない段があり、壁溝が掘削されていた。

出土遺物

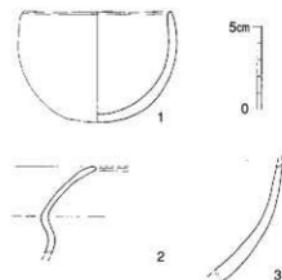
土器（図版56、第137図） いずれも土師器である。1は口縁部付近の2/3が残存する深い碗、球形の底部から内傾気味に口縁部へ至る。口端部は丸く收めている。2は口縁部が非常に長くなる鉢であろうか。体部は偏球形となりそうである。3は鉢あるいは瓶の小片で、図示した形状に不安がある。

4号土坑（第43図）

土坑というよりも溝状遺構とした方が妥当な感があるが、調査時の呼称を使用しておく。

1号溝の西に4mほどの距離をもって、並走するといってよいような位置・形状となり、南側の15号土坑とした遺構も本来は同一であったと思われる。

調査時には、北端付近から古式須恵器が出土したこともある、1号溝との関係に考えが及ばな

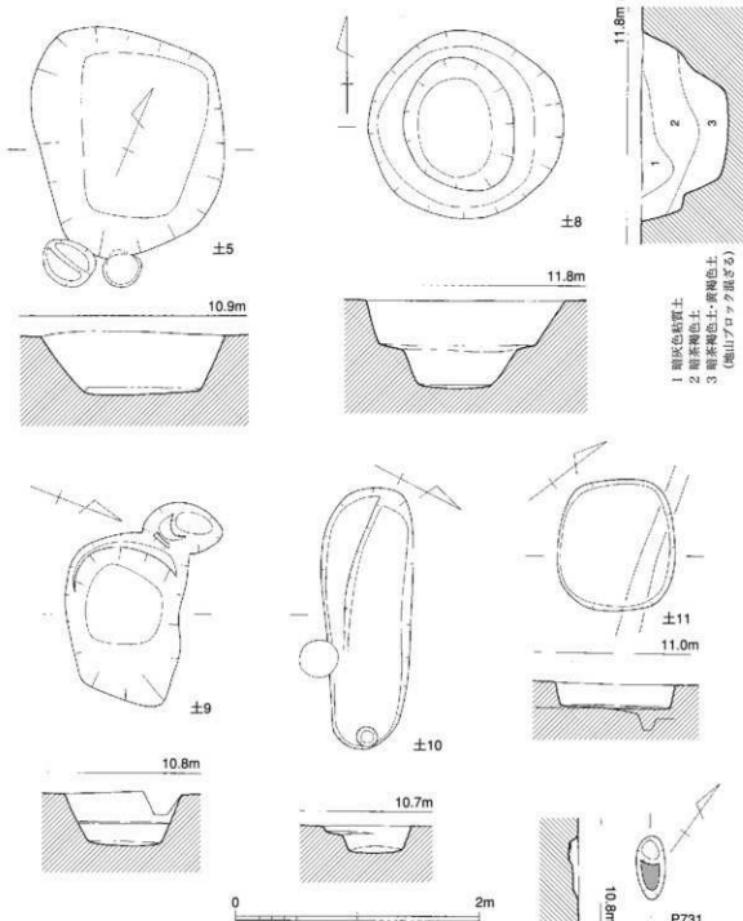


第137図 3号土坑出土土器実測図 (1/3)

かつたが、改めて配置を見ると1号溝の描くカーブに合わせたように北端部が西へ膨らんでいて、関連性を推測させる。ただ、床面形状が一定でなく乱れている。

出土遺物

石製品（図版57・59、第167図5・第172図14・16・第173図27） 第167図5は黒色に近い滑石を用いた有孔円盤で、外周が稜をもつがおおむね直径2.4cm、厚さ0.4cmとなる。いずれかの竪穴住居跡に伴うものであろう。第172図14は「15号土坑」の注記があるのでここで紹介するが、74号住居跡の埋土上にある遺構であることから、当該住居跡に伴う可能性もある。灰色となる頁岩製で、4面を使用する。上下は欠損。同16は「土坑4上層 住78上」と注記があり、明確な帰属は不明と



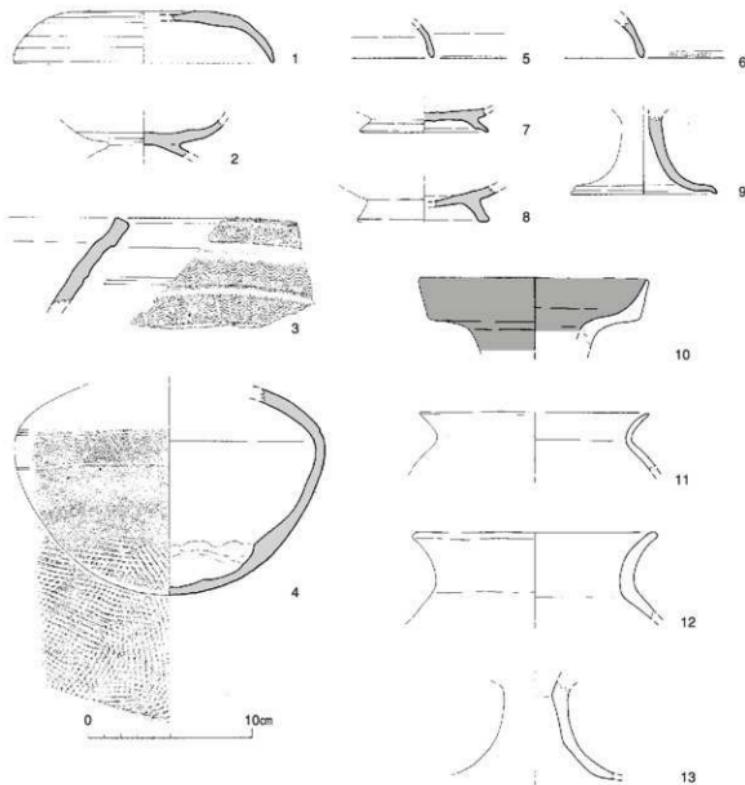
第138図 土坑等実測図 (1/40)

いわざるを得ない。暗灰色砂岩製の砥石で図示した面と右側面がよく使用されている。背面は自然面が多く残るが中央付近だけ磨かれていることから、この形状が本来の形状であったことがわかる。第173図27は安山岩製の切目石鉤で重量は109.5gを測る。自然石の両長側縁に抉りを入れている。

土器 (図版56、第139図) 1・10は74号住居跡、2は78号住居跡と重複する辺りから出土した。また、4に示した脛の出土位置は図に落としている。

1～9は須恵器。1は口径が16.0cmに復元できる大型の杯蓋で、1/4が残存する。胎土・作りともに良好である。2は脚付椀であろうか。体部下端付近の外面には籠削りが施される。3は大型甕の口縁部片で、これも丁寧に作られる。櫛描波状文も整ったものである。4は大型甕と思われる土器で、体部の1/3以上が残存。胎土・作りともに非常に良好で、櫛描波状文もとても整美である。文様帶は織細な2条の沈線で上下を画されている。

5・6は杯蓋の小片で、6は口端部外面に刷毛目原体で面を付ける。7・8は高台で、いずれも外方



第139図 4号土坑出土土器実測図 (1/3)

へ踏ん張る形となる。9は高杯で、外面に灰を被って調整・文様等は見えない。

10は口縁部内外面に赤色顔料がわずかに残っている。11は薄手、12は厚手の壺。13は高杯片。

5号土坑（図版38、第138図）

調査区中央付近、1号溝が大きく曲がる付近の東に近接する。長軸1.9m、短軸1.6mの不整長方形となり、深さは0.5mほどであった。

出土遺物

土器（第140図1～4） いずれも小片。1・2は須恵器蓋杯。3は脚端小片である。4は同安窯系青磁皿の小片で、淡黄緑色透明釉が掛かる。

8号土坑（図版39、第138図）

調査区北辺近く、47・48号住居跡の上で検出した直径1.6mほどの円形土坑で、深さは0.7mほどで中程にテラスが巡っていた。堆積の状況に特別なものはなかった。

出土遺物

土器（第140図5・6） 5は土師器皿で、外底面に回転糸切り痕とスダレ状圧痕が残る。6は平底となる須恵器杯身。

9号土坑（第138図）

調査区北東隅付近、41・42号住居跡の東に近接する。平面形は長軸1.4m、短軸0.9mほどの長方形に近かったが、床面は径0.7mほど円形に近くなる。埋土は灰褐色土と地山の黄褐色土からなり、これも自然堆積といってよい。

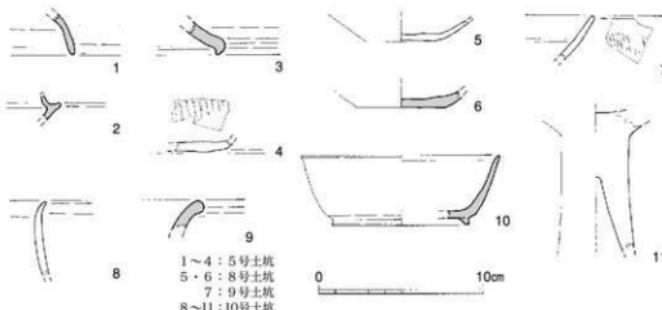
出土遺物

鉄滓 4.5×3.0×2.3cmほどの小塊が出土している。重量は33.2gである。

土器（第140図7） 7は同安窯系青磁碗の小片。淡黄緑色透明釉が掛かる。

10号土坑（第138図）

調査区北東端付近、円形周溝の南に近接している。長軸2.1m、短軸0.8mの長円形を呈し、検



第140図 5・8～10号土坑出土土器実測図 (1/3)

出土時は土壙墓を思わせたが、テラスが迫り出して床面は狭くなっていた。深さは0.2m余である。

出土遺物

土器（第140図8～11） 8は土師器甌あるいは鉢、9は須恵器甌のいずれも小片である。10は須恵器杯で、華奢な高台が付き、口縁部内面に弱い面を作る。1/4ほどの残片。11は土師器高杯の残片。

11号土坑

48号住居跡に掘り込まれた一辺1.0～1.1mの方形に近い土坑。深さは0.2mほどである。
図示に堪える出土遺物はない。

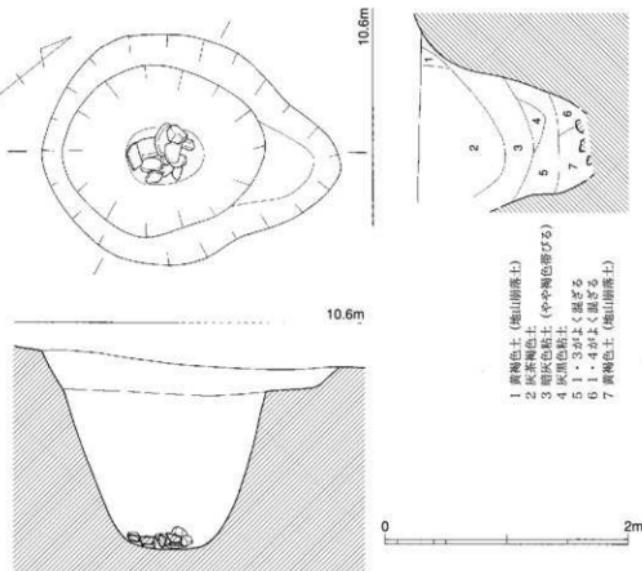
13号土坑（国版39、第141図）

調査区北東端付近で検出した扁円形土坑で、上端は径1.9mの円形部分に舌状のテラスが張り出している。床面は直径0.45～0.6mと小さく、直上で自然礫が数点検出された。床面付近は地山崩落土が厚く堆積していて、粘土や砂の層は認められなかった。

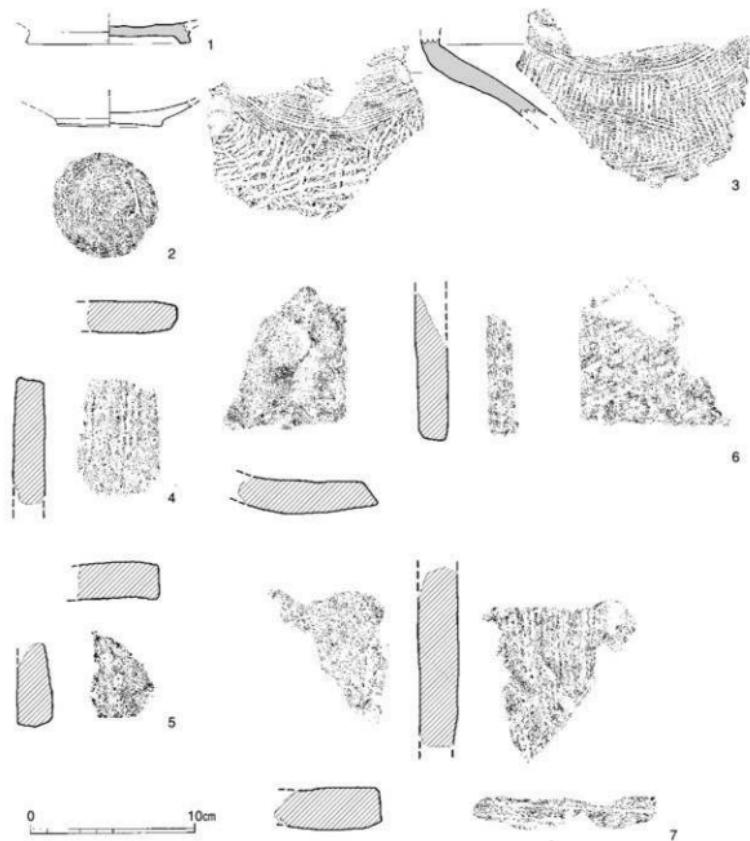
出土遺物

土器（第142図） 1は須恵器杯身の高台である。黒色粒が目立つが胎土・作りともに良好で、1/3が残存する。2は赤く焼き上がる土師器皿で胎土良好。器表が荒れているが丁寧に調整されるよう、外底面に回転軸切り痕が残る。3は須恵器甌片。頸部内面にカキ目が入る。

4～7は平瓦。いずれもよく焼けていて、凹面は布目が見えない。5は格子の叩き目が残る。



第141図 13号土坑実測図 (1/40)



第142図 13号土坑出土土器等実測図 (1/3)

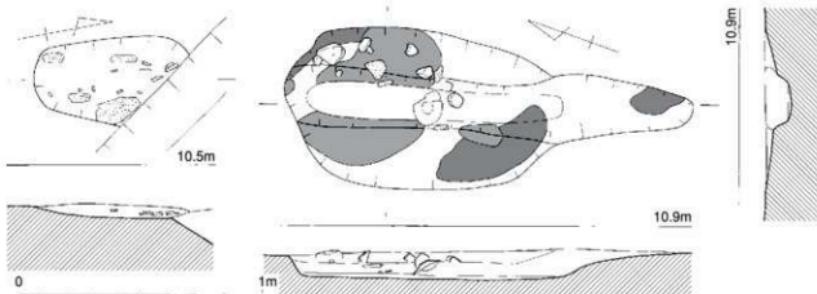
1号火葬墓 (図版40、第143図)

調査区北東端付近で検出したが、3区6号溝の延長と思われる落ち込みによって半分ほどが破壊されていた。

板状の炭が薄く分布していて、かろうじて浅い掘り込みを確認できたが、その範囲は長さ0.6m、幅0.4mほどであった。深さは0.1mに満たない。炭の下は全体に赤変硬化していた。長軸方向で火葬骨片が散見されたが、いずれも小さくて人間であれば幼少児の骨と思われた。

出土遺物

土器 (第144図1) 須恵器甕の小片で混入であろう。



第143図 火葬墓実測図 (1/20)

2号火葬墓 (図版40・41、第143図)

47号住居跡埋土に一部が掘り込まれ、調査時は12号土坑としていた。検出時は焼土で囲まれた内部に炭が充填されたような状態であった。

掘り下げる結果、中央部に幅0.2m、長さ1.65mの幅狭い掘り込みがあり、その床の長さは1.05mであった。この床面に対応するように東西に幅0.2~0.25mのスロープ状の掘り込みがみられた。床面は北半部の壁・スロープ部分がよく焼けて赤変していて、骨がわずかに散見された。

出土遺物

土器 (図版56、第144図2) 土器器皿で、床面付近から傾いて伏せられた状態で出土した。一部が欠損することや、床からやや浮いていることなどから上方に置かれたものが転落したようにも見えるが、しかし、この土器が熱を受けた様子はない。底径5.0cm、口径13.2cmで、体部は水挽き痕を残して直線的に開く。器壁は薄い。外底面に回転糸切り痕とスダレ状の圧痕が残る。

P 731 (図版41、第138図)

調査区南辺付近、74号住居跡の南西辺近くで検出した遺構である。長軸0.6m、短軸0.2mの長円形に近い平面形で、深くなる北西部での深さは0.1m弱であった。この浅い部分の床面に薄くベンガラが敷かれていた。小児 (嬰児) 用の土壙墓であろうか。

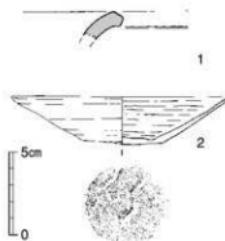
出土遺物はない。

5. 円形周溝・溝状遺構

近世以降に耕作用に掘削されたと思われる溝が横に走るが、それは省略する。

円形周溝遺構 (図版41・42、第85図)

調査区東端付近にあり、44・53号住居跡を切って、43号住居跡に切られていた。長軸8.0m、



第144図 火葬墓出土土器
実測図 (1/3)

短軸6.5mの長円形となるが、整ったものとは言い難い。

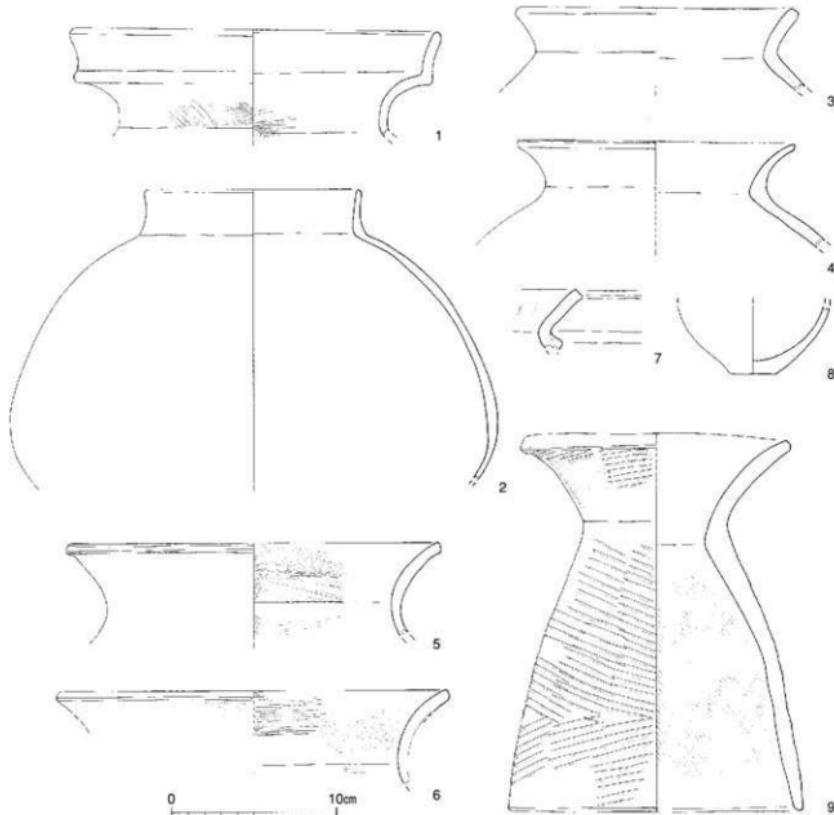
溝の形状も南辺では幅0.9mほどで一定しているが、東辺では0.6m、北辺では0.6～0.8mと一定しない。床面レベルも南辺で標高10.2mほど、北辺は10.4mほどとなって随分異なる。東辺で観察した埋土はいずれもレンズ状の堆積をしていて、顕著なものは認められなかった。

出土遺物

土器（図版56、第145図）1は口縁部の1/4ほどが残存する二重口縁壺。2は口縁部が短く直立する短頸壺で、口縁部の1/2が残存するが器表は荒れる。

3～7はいずれも口端部を断面方形とする壺。3は口縁部が短く、外反が弱い。4～6は頸部がC字形に外彎する。7は頸部に断面三角尖帯を付す小片。

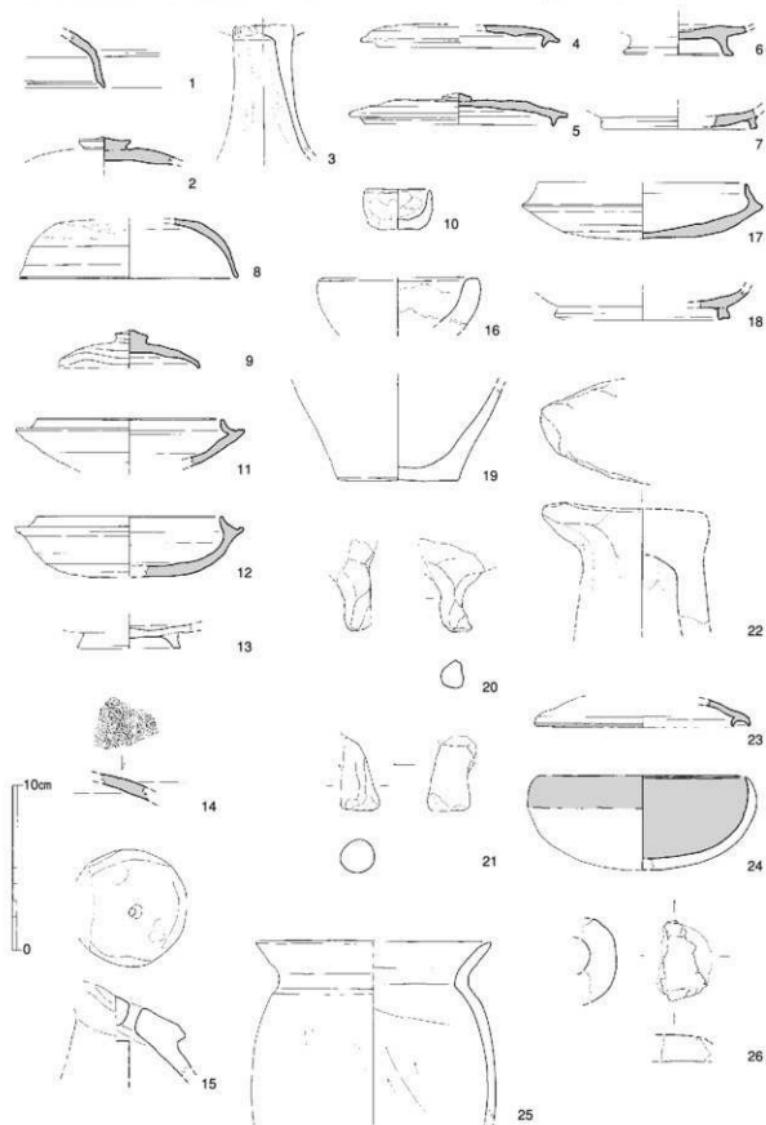
8は平底の小型壺であろう。9はくびれが上位にある筒型の支脚で、全面に叩きが残る。部分的に脚裾が焼けて赤変、その上が焼けている。



第145図 円形周溝出土土器実測図 (1/3)

1号溝 (第4・133・147図)

調査区北西隅から南辺東端近くまで、大きくカーブして50mほどを確認したが、V-4区でもさら



第146図 1号溝出土土器実測図1 (1/3)

に10m以上続く。カーブしていると表現したが、大きくみればほぼ直角に曲がっているともいえる。

北辺はおおむね幅2mほど、深さは西端で0.1mほど（床面標高10.99m）、21号住居跡付近で深さ

0.2m（同10.7m）であり、南北方向に変わる東辺は幅が3mほどとなり、23号住居跡付近で深さ0.2m（同10.5m）、住宅基礎の南側で深さ0.6m（同10.0m）となっている。ちなみにV-4区で検出した同一の7号溝の床面レベルは南端で9.99mである。北から南へ向かってかなりの傾斜をもち、東辺では床面が乱れている。

なお、住宅基礎の下ではこの溝を確認できなかったことから、途切れているものと思われる。

12・13号及び83号住居跡付近で作成した土層図を示した。いずれも埋土は締まったもので、後者の土層では西側から埋まった様子が窺える。

出土遺物

鉄製品（図版59、第169図5）手鎌と思われる鉄製品である。

鉄滓（第170図3～5）3・4は23号住居跡との重複部から、5は南端出土である。3の下面是溶融した炉壁のようになり、砂粒が多く浮いて灰赤色といった色相となる。重量は22.6g。4は図左側を折損するようである。これは26.5g。5は下面が比較的滑らかで銹色となり、上面は泡だったようになる。これは重量感があつて71.7gを測る。

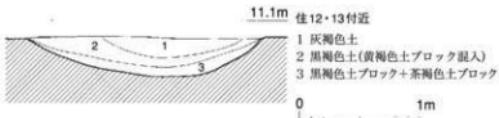
石製品（図版57～59、第168図4・11・第172図15・18）第168図4は「溝1 住24検出」と注記がある蛇紋岩製の磨製石斧片で、刃部は鋭い。白色の石理が縦横に走り、青味を帯びる淡灰色となる。同11は「溝1 住3の下」と注記のある頁岩質砂岩製石斧片。刃部は鋭く、背は丸い。穿孔はほぼ直に入っている。第172図15は「南東隅」出土の凝灰岩製砥石で、図上面と下側面左側がよく使用されている。図左側面は微妙な凹凸があり、凸部は磨れるが凹部は自然面のままである。背面は剥離。同18は「基礎の南」の注記がある砂岩製砥石。図示した平坦面と曲面となるらしい背面が使用されている。ただ、手触りは滑らかであるが小さな凹部が残る。焼けて赤くなる。

土器（図版56、第146・148図）多くの遺構と重複していて、取り上げ時の注記も比較的細分している。第146図1～3は「溝1」、4～7は同「南東端」、8・9は同「最南端」、10は「住2横」、11～15・21は「住3の下」、16～20・22は「住3・溝1最上層」、23～26は「住23の下」、第図27～30は「住24・溝1遺構検出」、31～33は「住24付近」と注記がある。「下」の表記は出土位置のことと、すべての住居跡を切っているので実際は「上」とするのが正しい。

1は古式の須恵器杯蓋の小片。2は扁平なつまみをもつ杯蓋で、内外面に灰を被る。3は土師器高杯で図示部は完存、焼けて赤変する。4～9は須恵器。4・5は返りがまだしっかりと踏ん張る形の蓋で、両者ともに1/3ほどが残存。6は高台が外方に高く、7は高台が華奢な杯身である。8は天井部外面を不定方向の箇削りで仕上げる杯蓋で、同所に箇記号の一部が見える。9は胎土・作りが良好な小型の蓋で、焼け歪むが復元口径は8.7cmほどである。

10は手捏ねのミニチュア。

11・12はいずれも作りが丁寧な杯身。13は焼成が甘い。14は小片である。器肉・内面は淡灰色～



第147図 1号溝土層実測図 (1/40)

灰白色を呈し、外面は灰黄緑色釉が薄く掛かって円に近い弧文が連続的にスタンプされる。いわゆる新羅焼であろう。15は頂部の一端がつまみ出される形の支脚で、その部分が欠ける。

16は埠堀で、現状では素地が須恵器のような状態になっている。胎土には微砂粒を含むが、大きな砂粒は見えない。内側に濃い灰緑色、鉄錆のような赤褐色となる付着物があつて、当館の蛍光X線を用いた簡易な検査では鉄及び銅・鉛などが検出されている。

17・18は須恵器。17は口縁部の1/3が残存。黒色粒が目立ち、焼け歪む。18は杯身高台部。

19は焼けて赤くなる平底の底部。20は動物の足と思われる。胎土良好で手捏ねである。21は棒状の土製品で全体に灰黒色となるが、國上方左側が薄くなっていることから剥離しているようである。接地面が平滑となっていて、これも動物の足であろう。22は支脚片。上面はつまみ付近が灰黒色～茶褐色、中央付近が灰赤褐色となっていて、つまみ出された部分が使用に際しても火から遠い所に置かれたようである。

23は口縁部が発達する杯蓋で1/4が残る。24は土師器椀で、内面及び口縁部外面が黒化している。それ以外は灰黄褐色を呈する。胎土に特別なものはない。25は口縁部付近の1/3が残存。26は輪の羽口で、内径は2.4cmほどに復元できる。

27～29は須恵器で、29は高杯と思われる。この時期の高杯は脚部の径が大きいのが普通だが、これは小さくなるようである。外面に厚く灰を被る。30は手捏土器。33は二重口縁壺で、1/4ほどが残存する。

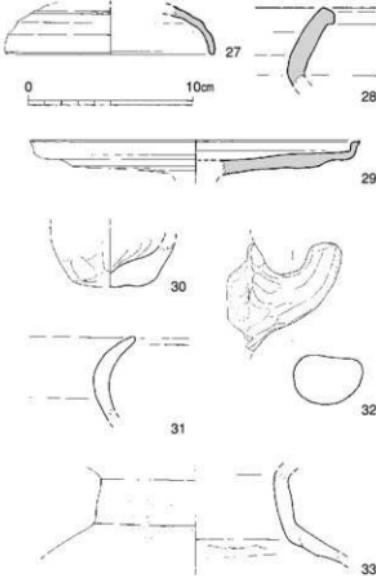
6. その他の遺構と遺物

鍛冶炉 (図版42、第115図)

調査区南西隅近く、67号住居跡の埋土上で検出した遺構。表土掘削後に鮮やかな焼土が覗いていた。直径0.3mほどの円形平面で、深さは0.1mほどであった。

炉壁は壁面が平滑化せずに凹凸があり、暗灰色～暗青灰色を呈する硬化面が4cmほどの厚さで見られ、さらにその外側に赤褐色に変色する層が5cmほどの厚さで取り巻いていた。鍛造剥片は未確認、鉄滓はなかったが、67号住居跡出土の鉄滓が関連するものであるかも知れない。

V-4区で検出した鍛冶炉も同じく67号住居跡上にあって、これら3基の炉は2.4mの範囲に近接している。一連の遺構であったと思われる。



第148図 1号溝出土土器実測図2 (1/3)

柱穴出土遺物

鉄製品（図版58） 第169図9はP717出土の火打金と思われる鉄製品で、両端を欠く。

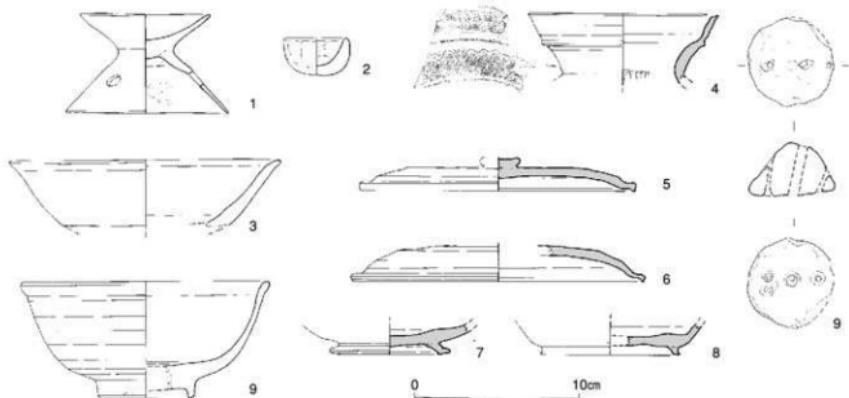
鉄滓 第170図6は調査区南端の71号住居跡に隣接する柱穴P681出土の鉄滓で、流れ出たものがそのまま固結したような形となり、欠損部には気泡が多く見える。同7は住宅基礎北東の柱穴P537出土の鉄滓で、全体に凹凸がないといってよい。重量は13.7g。

石製品（図版10～12） 第167図10は34号住居跡の北東隅付近で検出したP818出土の完存する滑石製鋤車。柱穴は複数の住居跡が重複する位置にあるが、この柱穴がどの住居跡に伴うかはわからない。直径4.3cm、高さ1.6cm、孔径0.7cm、重量は45.9gである。側縁には斜位の研磨痕が頗著で、比較的滑らかとなる。

第168図12は住宅基礎の西側、36号住居跡の南西に位置するP215出土の立岩産石庖丁片で、小豆色を呈する。刃部は鋭く、背は両側から研ぎ出していて穿孔も両側から行う。同13は北辺中程のP237出土の頁岩質砂岩製の石庖丁片。暗灰色を呈し、両面穿孔されて、背も丸みをもつ。

第172図20は住宅基礎西側の33号住居跡の中で検出した柱穴P253からの出土である。住居跡内で検出したものではあるが、この遺構に伴う確信がないのでここで紹介する。黄白色～灰白色となる細粒砂岩製の砥石で、図下面是使用していないようであるが、その他の面で剥離していない部分はすべて使用されている。同21は調査区東北隅付近、18号住居跡の南東辺近くに位置する柱穴P457出土の砥石である。これも住居跡に伴う柱穴ではないようである。本来は灰色を呈したようであるが、焼けて赤く変色する変成岩を使用し、長側面の4面を使用する。図示した面及び背面は比較的滑らかとなるがなお微細な凹凸が残る。左右両側面も部分的に平滑化する部分はあるが、未使用部や刃物による傷のような痕もある。同23は19号住居跡内にある柱穴P399出土の頁岩質砂岩製砥石である。柱穴はその位置から必ずしも当該住居跡に伴うものではないであろう。図示した面以外が剥落していて、使用面も部分的に滑らかとなるだけで、わずかに低い部分は自然面を残す。

土器（第149図） 1は調査区南西隅に近い51号住居跡北辺付近のP828出土。薄手の小型器台で、脚部の開きが大きい。下層の37号住居跡に伴うものであろう。2は調査区西端付近、28号住居跡の北西にあるP979出土の手捏ねミニチュア土器。3は調査区東端付近、円形周溝内部にあって45号



第149図 柱穴出土土器実測図 (1/3)

住居跡を切るP410出土の土師器高杯。4は51号住居跡北西隅の北西に位置するP133出土の須恵器甕。胎土・作りが非常に良好な土器で、内面に灰を被る。5は調査区北西付近、5号住居跡南辺を切るP32出土の須恵器蓋である。6は調査区西辺中央付近のP100出土の杯蓋で、5によく似る。7は住宅基礎北側の25号住居跡の北東辺を切る柱穴P546出土の須恵器杯身。高台が外方へ踏ん張る。8は調査区西辺に近い中程の35号住居跡を切るP327出土の須恵器杯身。高台が直立し、華奢となる。9は調査区北辺中央付近、P778出土の龍泉窯系青磁碗である。灰黄緑色に発色する半透明釉を掛けるが、高台内は露胎、疊付は釉を搔き取る。胎土は灰色である。

その他の遺物

出土地不明の遺物等の紹介をする。

鉄製品（図版58、第169図11） 鉄製筋鍤車で、一鉢のようである。

石製品（図版58・59、第168・172・173図） 第168図10は「14号土坑」出土の石庖丁片である。頁岩質砂岩製で、刃部は鋭い。「14号土坑」は住宅基礎の間、55号住居跡の南西にあって、最深部で0.2mほどとなる摺鉢状の落ち込みで性格は不明である。第172図19は「溝1 基礎の間」の注記があるが、基礎の間では1号溝を確認できなかったので、出土地を特定できない。花崗岩製の砥石で、図の左右両側面はよく使用されているが、図示した面は使用が少ないようで、四部に及ばない。同22はP335出土の灰白色細粒砂岩製砥石。この遺構番号に近い数字は基礎の北側、5号土坑の周辺にあって、遺構番号の判読できない柱穴が5号土坑上にあるので、そこからの出土であるかも知れない。図上下を欠損するが、図示した面を含む4面を使用する。風化のためか、器面がざらつく。第173図26は「北東端包含層」の注記がある。13号土坑周辺に0.3mほどの堆積層があつてそこから出土したものである。灰白色玄武岩を用いた砥石で、図上面のみが磨られて平滑化するが、堆積岩のような滑らかさには及ばない。

土製品 第149図10は「住60上層」と読める注記があるが、該当する遺構の出土遺物とは注記・取り上げの日付が異なることから出土地不明ということで紹介する。円錐形の土製品で、土師質である。頂部をやや外れた位置に孔があり、現状で貫通していないが、おそらく底面中央の孔に続くものと思われる。中央の孔を挟んでほぼ同一線上に小孔が配置されているが、これも位置的には対称形とならない。小孔は底面まで貫通しているが、穿孔をし損じた孔が残る。胎土は良好といつよいものと思われる。全体に灰黄褐色となる。

7. 小 結

竪穴住居跡について この遺跡では多数の住居跡が調査されているが、大きくみて弥生末～古墳前期と6世紀を中心とする古墳後期の二つの時期に盛期が分かれている。ただ、須恵器出現直前に当たる5世紀初め頃に比定できる住居跡も散見されるし、確実な住居跡は不明だが、今回の調査で4号土坑から出土した壺（大型甕）のように陶邑1期の須恵器も出土していて、集落自体は継続していたようである。また、今回の調査では7世紀後半から8世紀代に至る土器・瓦が一定量出土していく、溝以外の遺構ははつきりしないものの、V-1区で検出した官衙的建物跡群に関連するものであろう。

さて、V-5区では住居跡の遺構番号を84号まで付したが、発掘後に一つの遺構が複数の遺構

であったり、逆に別番号を付したものが同一の遺構であったりして数字のままではない。また、住居跡と認定するに至らない遺構もいくつかあり、それらを勘案すると手元の集計では少なくとも76基の住居跡を調査したことになる。そのうち、土器以外にも炉跡・ベッド状遺構などを指標として弥生末～古墳前期に収まる住居跡が大部分であるが、一部は須恵器が出現する以前のという幅に収まりそうな住居跡が28基、カマドを指標として古墳後期に位置付けられる住居跡が37基を数えた。およそ4:6の比率となる。先に東九州自動車道に伴うI区の住居跡群の報告を行ったが、奇しくもそこでの比率と一致する。

1号溝について 1号溝は現状での規模はさほどでもないが、北西端付近では重複する住居跡が壁体をほとんど失うほどまで削平されていることから、この付近も本来は0.5mほどの深さがあつたものと思われる。調査区南端では幅3.0m、深さ0.6mほどとなり、本来それくらいの規模を保つて掘削されたとみることができよう。また、この溝はコーナーが丸くなるものの巨視的に見れば直角に曲がって区画を形成している。その南辺は未確認であるが、V-6区で検出した5号溝は8世紀代の土器が主体となっていて、7世紀後半を主体とする1号溝とは時期差があるが、関連する遺構である可能性がある。両溝の間はほぼ50m隔てている。

この溝の内部では掘立柱建物跡を確認できなかった。柱穴は無数にあって、さらに検討すればいくつかの小規模な建物跡を想定できるかも知れないが、V-1区のような本格的な掘立柱建物跡はないといってよい。その意味で、この溝の性格も推測が困難である。溝底がかなりの勾配を持っていることに重要な意味があるのかも知れない。

次年度報告の予定であるが、丘陵南側でも東九州自動車道や国道201号行橋インター線建設に伴う調査等で8世紀代を含む古代の大規模な道路状遺構や井戸などを確認していく、該期も丘陵全体に遺構が広がっていたことが予想され、この溝もその一翼を担っていたのであろう。

火葬墓について ここでは2基の火葬墓を調査した。1号墓は床面の一部が残存するのみで、構造的に顕著な特徴は見られなかったが、2号墓は筆者にとって初めて見る遺構であった。が、京都郡苅田町上片島遺跡群で類似した遺構が^{註2}15世紀代の「土壙墓」として報告されている。それは二段墓壇の土壙墓と見まがうような構造であるが、埋葬部に相当する掘り込みが幅0.2mに満たず、深さも0.1mに達しない小規模なものであった。特異な点は壁体上半部や掘形外縁が被熱赤変し、埋土中に炭化物・骨片が多く含まれていることである。この2号火葬墓がそれらと異なる点は、平面形状が不整で、床面の掘り込みが一方に向かって突出してスロープ状となり、床全体が焼けていることなどである。上片島遺跡群報告の中で、関西地方での変遷が転載されているが、それによればこの2号火葬墓が^{註3}上片島遺跡の例に先行するようである。2号火葬墓出土の土師器は佐藤浩司氏によれば15世紀中頃前後に比定でき、矛盾しない。この特異な火葬墓が、古代豈前の「国津」に近接する片島・吉国地区で相次いで発見されたことは、畿内地方からの影響を考える必要があるのであろう。

註

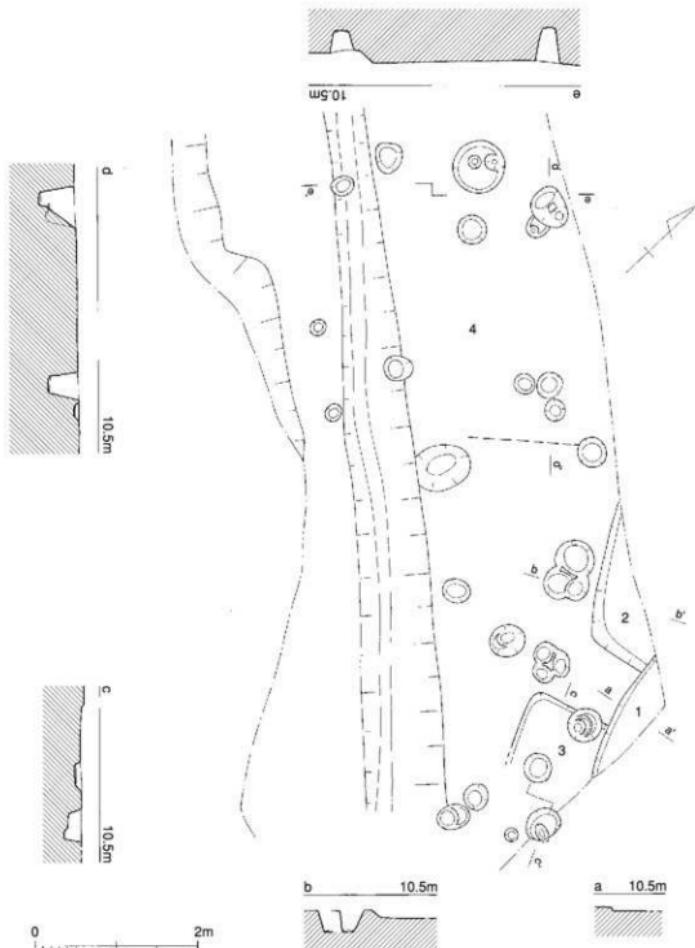
- 1 九州歴史資料館「延永ヤヨミ圓遺跡-V-1・2・3区-」(『福岡県文化財調査報告書』第238集、2013)
- 2 九州歴史資料館「岩屋古墳群 上片島遺跡群」(『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-5-, 2013)
- 3 佐藤浩司「北九州市域の15~16世紀の土師器」(『大宰府陶磁器研究-森田勉氏追悼論文集-』, 1995)

IV. V-6区の調査

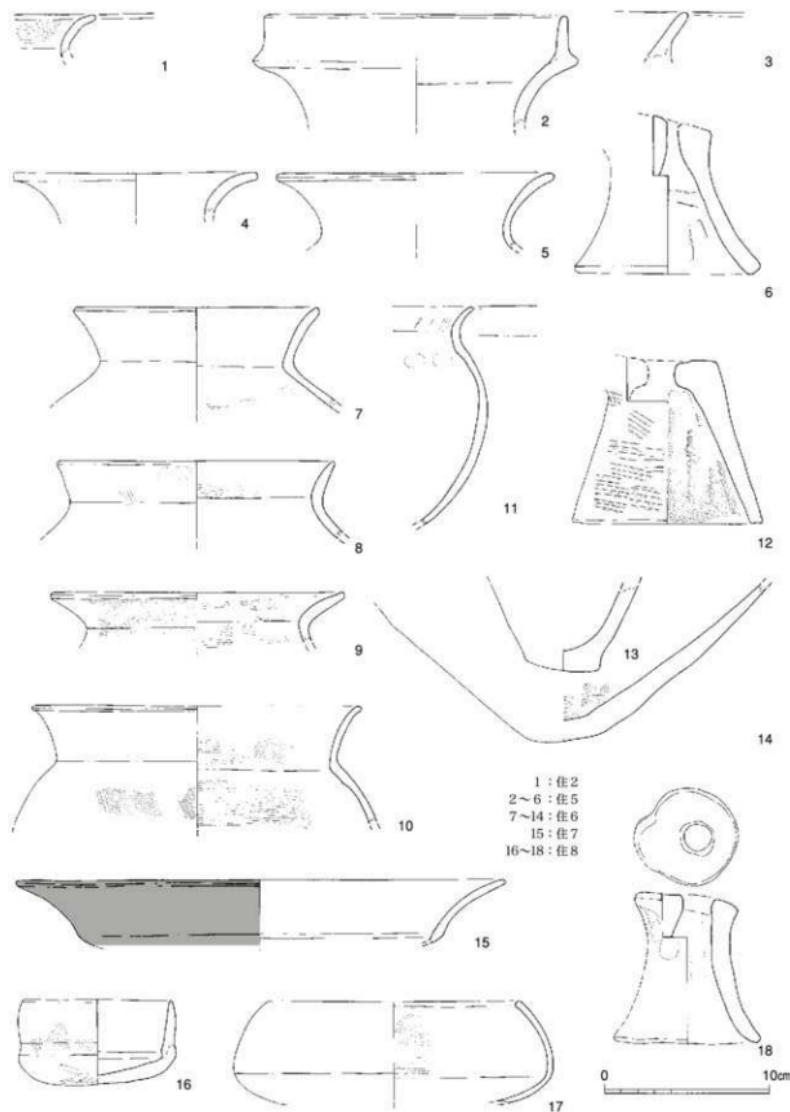
1. 調査の概要

V-6区は延永ヤヨミ園遺跡の南西端に位置する。調査区の西側に更に一段低い畠地があったが、幅3mのトレーナーを開けて遺構が認められなかつたので対象地から除外している。

調査区の東側は削平が著しく、1~3号住居跡は非常に浅い遺構の一部を検出したのみで、誤認



第150図 1~4号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第151図 2・5~8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

の可能性もある。また、4号住居跡とした遺構は壁の立ち上がりが認められないが、表土掘削時に僅かな土質の違いから想定したもので、これも先の1～3号住居跡と同様である。

西側では植木穴かと思われる無数の穴が掘られていたり、複数の溝が住居跡と重複してやはり不明瞭な部分がある。

2. 壊穴住居跡

1～3号壊穴住居跡（図版43、第150図）

調査区の南東端部にあって、いずれも一部を検出したのみで、カマドや柱穴といった主要な遺構は確認できておらず、かつ深さも0.1mに満たないものであった。まとまった出土遺物もなく、確信はない。

出土遺物

土器（第151図1） 2号住居跡出土の土師器甕で小片。

4号壊穴住居跡（図版、第図）

1～3号住居跡の北西部で遺構検出時に住居跡埋土と思われる薄い層があって、住居跡を想定したがこれも炉・カマドは不明である。

しかし、断面に示したようにしっかりした柱穴が4本確認できることから住居跡が存在したと見なしてよいであろう。

図示に堪える出土遺物はない。

5号壊穴住居跡（図版43、第152図）

2軒の住居跡が重複していて、その中の新しい住居跡である。長さがわかる一辺は3.3m前後の規模であるが、各辺は若干平行四辺形となる。深さは0.1mほどで、主柱穴は判然としない。炉・カマドは調査範囲内にはない。

出土遺物

土器（第151図2～6） 2は二重口縁壺の小片。口縁部外面が黒色化する。3も同じような形状となろうか。4・5は口頭部がC字形に大きく開く口縁部で、壺と呼んでもよいのであろう。4は小片。5は1/4が残存する。6は上端の一方をつまみ出す形の支脚で、脚裾がよく焼けている。

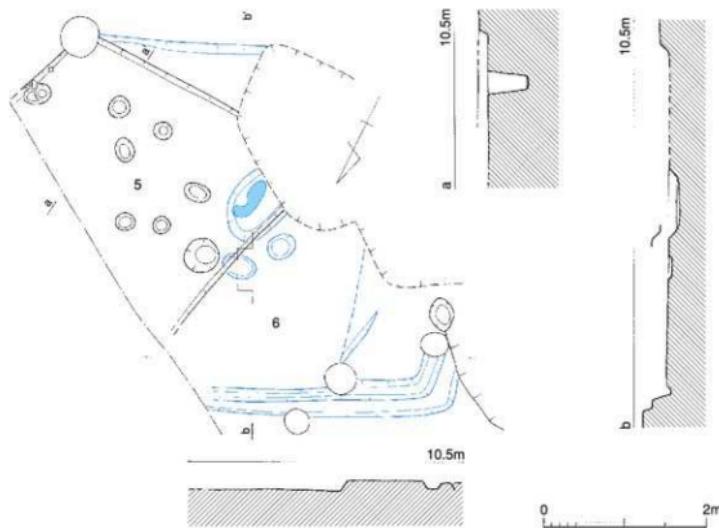
6号壊穴住居跡（図版43、第152図）

5号住居跡に切られ、かつ調査範囲が狭いために不明な部分が多いが、西辺にベッド状遺構を付設し、炉を確認できた。略南北長は4.6mである。ベッド状遺構は上手く検出できなかったが、幅1m、高さは0.1mほどの規模であった。主柱穴ははつきりしない。

出土遺物

石製品（図版57、第168図1） 姫島産黒曜石製の石鎌で、先端と基部両側を欠損する。

土器（第151図7～14） 7・9・10・13・14が炉の辺りでまとめて出土した。7は壺・甕どちらとも呼べるような形状で、1/2が残存。8は口縁部の外反が弱く、9は強い甕。10は口縁部が高く立



第152図 5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

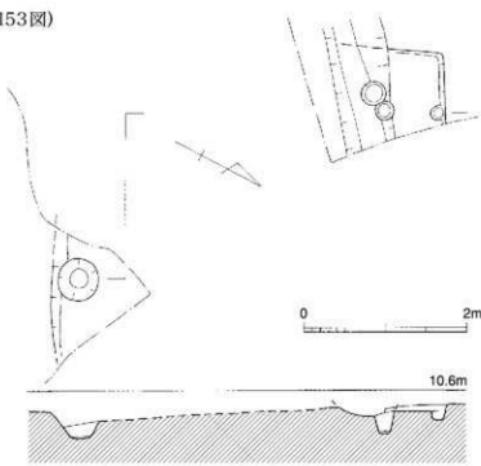
ち上がり、端部を小さくつまむ。11は小片で傾きに不安がある。12は頂部の一端をつまみ出す支脚で、外面を叩きで調整する。13は平底の、14は尖り気味の底部。

7号竪穴住居跡 (図版43、第153図)

6区中央付近の北側に位置し、攢乱や後世の溝に切られていって、北西隅付近及び南東辺の一部を確認したのみである。この間の幅は5.0mほどである。北西隅は深さ0.1mほどが残存するだけで、南東辺も同様である。南東辺に接して円形の落ち込みがあるが、屋内土坑の可能性がある。

出土遺物

土器 (第151図15) 1/4ほどが残る土師器高杯の口縁部。口縁部は未発達な部類に属する。外面の一部に赤色顔料が見える。



第153図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

8号竪穴住居跡（図版43、第154図）

7号住居跡の南西に近く位置し、これも後世の溝で大部分を失っている。確認できたのは北東隅・南東辺及び南西辺の一部である。ただし、南北辺は上手く検出できなかった。

壁の立ち上がりはいずれも0.15mほどで、各辺から復元できる規模は $3.6 \times 4.4m$ ほどである。

これも炉・カマドや主柱穴ははっきりしないが、南東辺に接する円形土坑がいわゆる屋内土坑であろう。

出土遺物

土器（図版56、第151図16～18）16は底部が完存、口縁部の1/2が残存する。浅く扁平な体部に直立する口縁部を付す肉厚の土器で、鉢としてよかろうか。17は強く内彎する楕円形の杯部をもつ高杯で、全体に灰黒色となる。18は頂部をつまみ出す器台形の支脚で、頂部を除いて全体に焼けている。

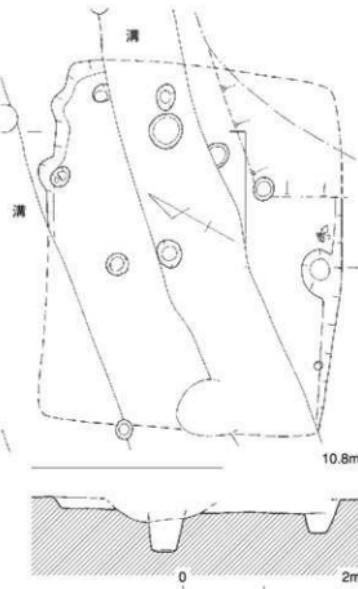
9号竪穴住居跡（図版43、第155図）

8号住居跡のすぐ北西、重複する位置にあって、これも後世の溝や植木穴かと思われる攪乱坑によって大きく破壊されている。検出できたのは北辺のみで、その西は隅がかろうじて残存、東も隅に近いようである。主柱穴から復元できる規模は $3.8 \times 4.1m$ ほどとなる。

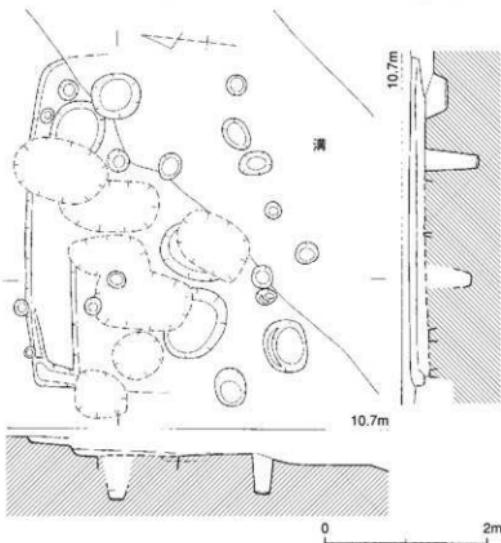
北辺に沿って一段高い部分があるが、ベッド状遺構にしては幅が $0.5m$ ほどと狭いため、断定はできない。

炉・カマドは確認できなかつたが、ここでは4本の主柱穴を確認できた。

図示に堪える出土遺物はない。



第154図 8号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第155図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

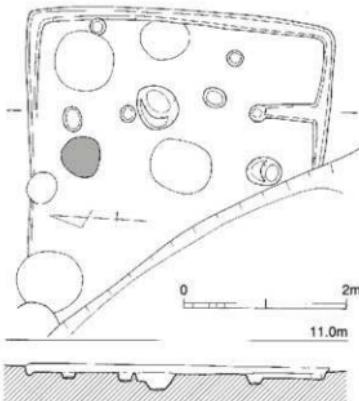
10号竪穴住居跡(図版44、第156図)

9号住居跡の北東に近接し、1号掘立柱建物跡に切られるとともに西半を開墾で破壊される。東西長は3.7m、南北長はカマドが中心にあるとして3.6mほどに復元できる。深さは0.1mに満たないが、カマド付近を除いて幅0.1m、深さ数cmの周壁溝が巡る。

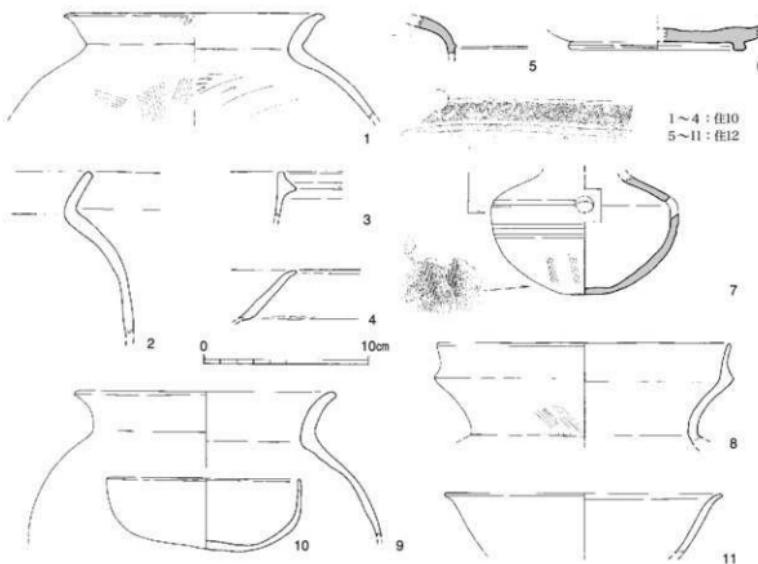
北辺にカマドの痕跡があるが、袖は見えず火床を認めただけである。主柱穴は不明であるが、北東隅の柱穴に連なる小溝が間仕切り等と評価するならば断面に示した浅い柱穴がその二つであるかも知れない。

出土遺物

土器(第157図1~4) 1は肉厚の口縁部が短く外反して端部が再び外折、端面をもつ窪で体部が張る。口縁部の2/3が残存する。2は甕。3は直立する口縁部の外面に大振りな断面三角突帯を付す変わった土師器。4は高杯の口縁部であろう。2~4は小片。



第156図 10号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第157図 10・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

12号竪穴住居跡（図版44、第158図）

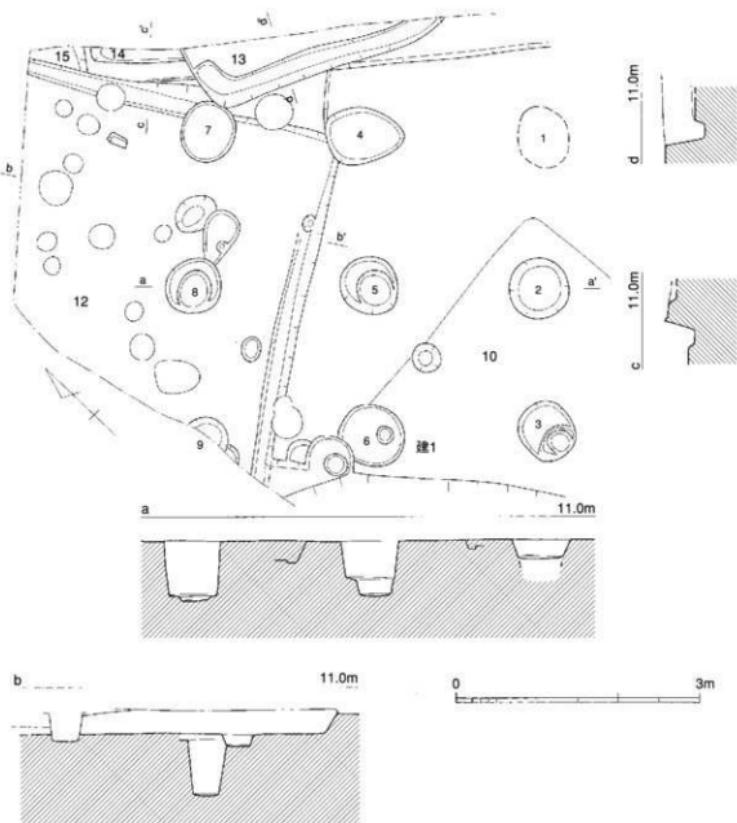
調査区西北端で検出し、1号掘立柱建物跡に切られる。さらに北西隅で3基の住居跡と接するが、先後関係は確認できていない。また、調査時には南東端で別の住居跡と重複していると判断してそれに11号住居跡の番号を付していたが、結局確認できなかつたため、欠番とする。

住居跡は4.0・4.4mの2辺を検出したが、全体の規模は不明である。深さは0.3mほどが残存する。最大で5cmほどの深さをもつ周壁溝を検出したが、東隅付近では途切れる。

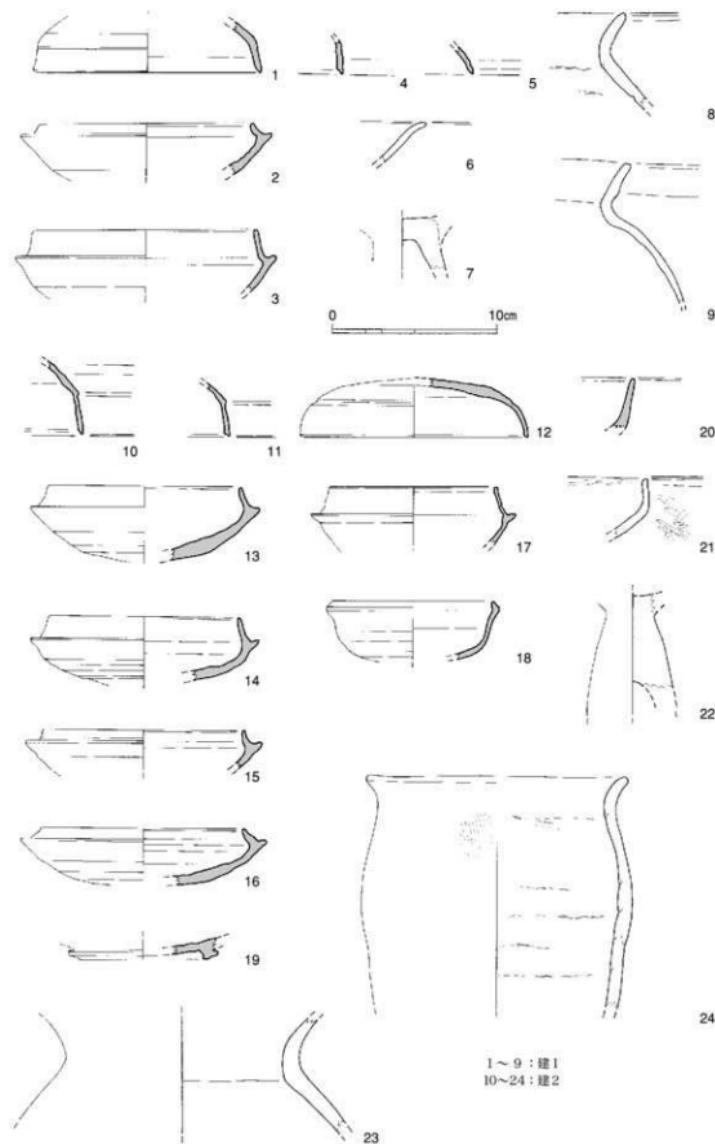
上層から多くの柱穴が掘り込まれていたが、この住居跡に伴うものは数基を確認したのみである。うちの1基はしっかりとした柱穴で、配置からみても主柱穴の一つとしてよかろう。その場合は4本柱と考えられる。炉は未確認。

出土遺物

石製品（図版59、第173図25） 灰緑色凝灰岩の磨石であろうか。図表裏が非常に滑らかとなる



第158図 12～15号竪穴住居跡・1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第159図 1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)

が頗著な使用痕は見えず、側縁はすべて剥離している。図示した面は上下方向でわずかに凹面となっている。

土器（第157図5～11）5は須恵器杯蓋の小片で、口縁部上の稜線がシャープな古相を示すものである。6は高台付杯で、身に比して小振りな高台がつく。7は甕片。これには「住12溝」の注記がある、この通りに読めば周壁溝出土ということになるのであるが、須恵器の出土に全く気付いていなかった。体部の1/3ほどの残片で、焼成時の焼きムラと思われる濃淡の色相が混在している。胎土・調整ともに非常に良好で、櫛描波状文も丁寧に施す。文様帶は波状文施文後に上端を1条の沈線、下端を2条の沈線で画するが、特に下端のそれは沈線間の間隔が開き浅いものである。8は二重口縁壺。9は口頸部が緩くC字形を描く甕で、2/3が残存する。10は底部が完存、口縁部付近の1/3が残存する椀で、器表が荒れる。11は口端部を小さく外反させる高杯で、焼けて器表が荒れる。

13号竪穴住居跡（第158図）

11号住居跡の北東にあって接するが、先後は不明。深さは0.3mほどで、深さ0.1mのしっかりした周壁溝を伴う。

図示に堪える出土遺物はない。

14号竪穴住居跡（図版、第4図）

11号住居跡の北東にあって一部で重複するが、先後は不明。住居跡とする根拠はない。

図示に堪える出土遺物はない。

15号竪穴住居跡（図版、第4図）

11号住居跡の北東にあって切り合うが、先後は不明。0.15mの深さを有するが、これも住居跡とする根拠はない。

図示に堪える出土遺物はない。

3. 挖立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版44、第158図）

調査区西北端付近、10・11号住居跡の上に建てられた建物跡で、2×2間の規模をもつ。規模は芯心で3.7×4.0mほどとなる。一部の柱穴の図化・発掘を失念しているが、遺構の認定は間違いないと考えている。

出土遺物

土器（第159図1～9）掘形・柱痕の綴別ができるいないが、比較的多くの土器が出土しているといえる。1～5は須恵器、6～9は土師器である。

1は口縁部が屈折するような杯蓋で、焼成が甘く器表が荒れている。1/4ほどの残片。2も焼成が甘い1/3の残片。3はさらに焼成不良で、瓦質と呼ぶのが相応しい。1/4ほどが残る。4・5は小片。

6は高杯口縁部の小片。8は内面に粘土紐継ぎ目が残る甕小片。9は甘い二重口縁をもつ壺小片である。

2号掘立柱建物跡（図版44・45、第160図）

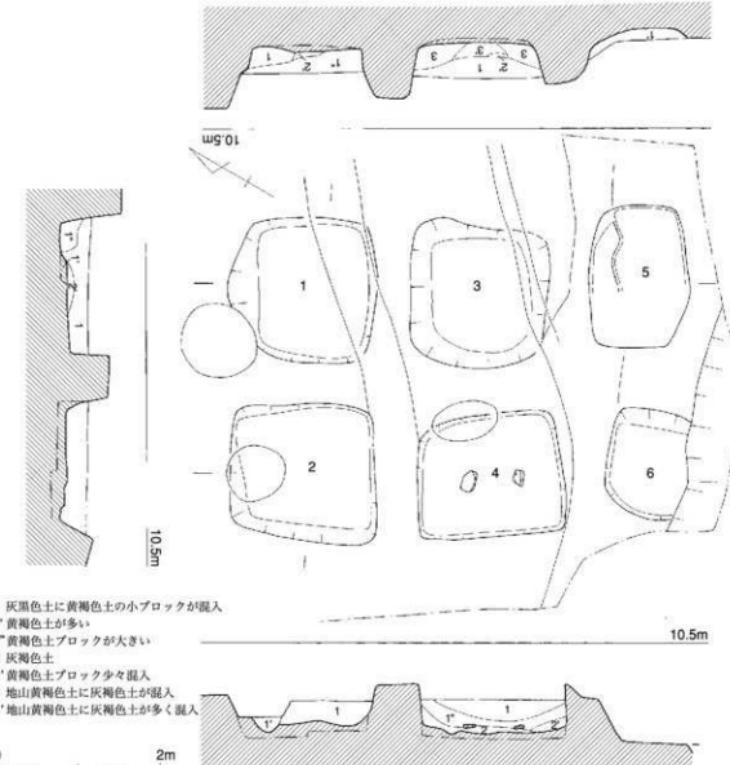
建物跡の南東側は地形的に大きく落ちていて、南西側も地境となってコンクリートの擁壁が設置されるなど、文字通り遺跡の南西端に位置している。後世の溝や埋甃に切られていることや余りの巨大さですぐには気付かなかつた。

1×2間の規模で、柱間は芯心で $2.2 \times 4.0\text{m}$ ほどとなる。残りのよい柱穴の掘形は一辺 1.8m の方形プランとなり、深さは 0.6m ほどである。埋土は灰褐色・地山土に由来する黄褐色土が多く、自然堆積層は認められない。柱痕かと思われる痕跡を平面的に認めたこともあったが、断割りの結果、柱の痕跡は全く認められなかつた。

通常、1×2間の掘立柱建物跡は弥生時代の遺構であり、本例も立地からみて弥生末～古墳初の物見櫓的な性格の遺構かと予想していたが、意に反して出土遺物はほぼ古墳後期のものであつた。

出土遺物

鉄製品（図版58、第169図4） 建2-5とした柱穴から出土した鉄製品で、断面方形となり、図上端はわずかに曲がっている。釘であろうか。



第160図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

石製品（図版57、第167図11） 建2-3とした柱穴からの出土で、灰白色に近い滑石製品。小片であるが、側縁が大きく内彎している点は他の鉢車と異なり、また孔が偏しているように見えることからあるいは鉢車ではないのかも知れない。

土器（第159図10～24） これも出土土器が多いが、土層観察の結果、柱痕・抜き取り痕を明確に識別できなかったので、積極的な評価はできない。

10・11は形状から見て比較的古式の杯蓋である。12は1/4の残片で焼成が甘い。13～15も口縁部の1/4～1/3が残存していてこれらも焼成が甘い。16も同程度の残片。17は薄手で胎土・作りともに良好な1/4の残片。18は特異な形の土器。杯身に似たやや深い身をもち、内傾する短い口縁部を付すものである。19は外方に強く踏ん張る高台をもつ杯身の1/4の残片。20は杯身口縁部の小片。建2-6とした柱穴は5号溝の床で検出した柱穴であり、遺物を駿別できなかつた可能性がある。建2-1とした柱穴も4号溝と重複して同様の可能性を無視できない。

21は楕小片、22は高杯。23は口縁部が緩くC字形となる甌で、口端部を欠く。24は体部の張りが弱く、口縁部の反転も弱い長脚の甌である。

4. 土坑・埋甌

1号土坑（第4図）

調査区中程、4号溝の中で検出したもので、4号溝に後出する。直径1.0～1.1m、深さ0.3mほどの円形土坑で、最上層に茶褐色土、以下に灰褐色土・暗灰色土などの締まった土が自然堆積していた。図示に堪える遺物がないが、4号溝に後出することから中世以降の遺構である。

2号土坑（第4図）

1号土坑の南に近接して位置し、4号溝と重複するが埋土が似ていて先後関係は確認できなかった。平面形は1.0×1.2mほどの隅丸長方形といってよく、深さは0.6mほど。埋土は灰褐色土を主体とし、それぞれ水平に近い堆積状況であった。

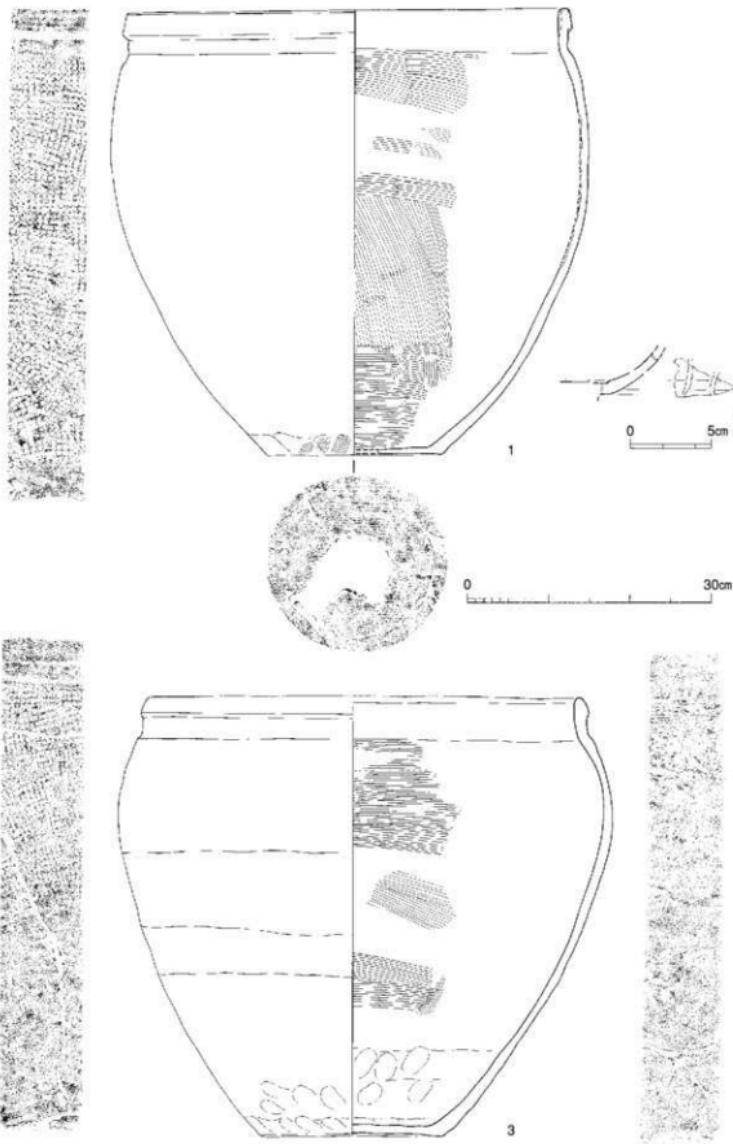
図示していないが、出土遺物に古墳時代の蓋杯の天井部片がある。

1号埋甌（図版45、第162図）

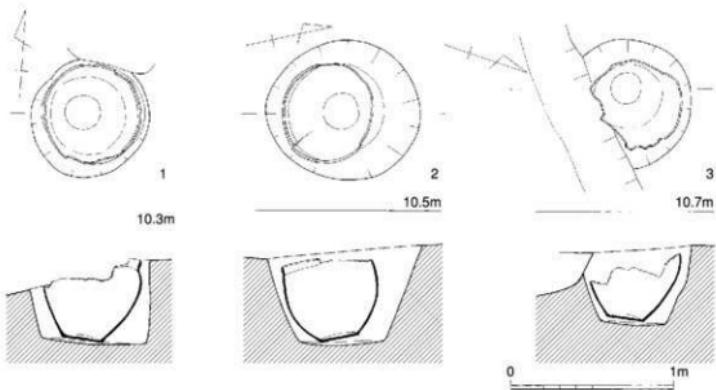
2号掘立柱建物跡の北西柱穴に一部が掘り込んでいた。掘形は直径0.7m前後と、甌を入れるとほとんど余裕がない大きさで、深さは0.5m。甌は東へわずかに傾斜しているがほぼ正立している。

出土遺物（図版56、第161図1・2）

1は瓦質の大型甌で、口径54cm、器高55cmほどである。口縁部は内外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させるようである。頸部は短く直立し、張りの弱い体部へ続く。底部は非常に薄い。体部外面は格子叩き、内面は刷毛目で仕上げ、外底面にはスダレ状の圧痕が残る。2は龍泉窯系青磁碗小片。出土状態の細部が不明であるが、甌内埋土からの出土であろうか。見込に浅い圓線が巡り、外面にも浅く幅広い沈線が間隔を置いて2条刻まれる。蓮弁文であろう。胎土は暗灰色緻密、釉は灰黄緑色に発色、貫入が多い。



第161図 1・2号埋甕実測図 (2は1/3、他は1/6)



第162図 埋甕実測図 (1/30)

2号埋甕 (図版45、第162図)

2号掘立柱建物跡の南西柱穴の中に掘り込まれていた。掘形は直径0.9m前後の円形プランとなり、深さは0.6mほどである。甕は南側へ小さく傾いていた。

出土遺物 (図版56、第161図3)

口径53cm、器高54cmほどの規模で、1号埋甕に比べると最大径部が高くなる。調整は同様である。

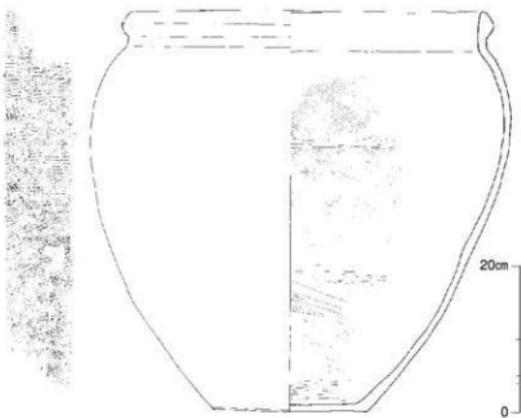
3号埋甕 (図版46、第162図)

3号溝に掘形及び甕の一部が破壊され、甕の一部が溝内に落ち込んでいた。掘形は直径0.8m、深さは0.5mほどで、甕はほぼ正立していた。

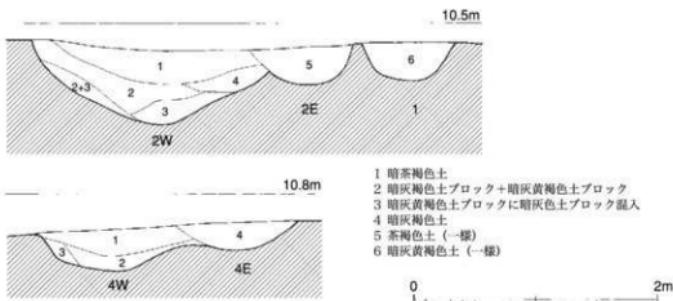
出土遺物

(図版57、第163図)

先の2点と比べて口縁部の形状が随分異なっていて、玉縁状となっている。最大径部はやはり高い位置にあって、外面の格子叩きは1・2号に比べて細かい。



第163図 3号埋甕実測図 (1/6)



第164図 溝土層実測図 (1/40)

5. 溝状遺構

1号溝 (図版46、第164図)

1～3号溝は調査区中程、5・6号住居跡の西側に近接して検出したもので、東から番号を付している。1号溝は幅0.75m深さ0.3mの規模で、ほぼ一様に暗灰褐色土を埋土としていた。V-4区5号溝と同一である。

出土遺物

土器 (第165図1～3) いずれも古墳時代須恵器の小片で、時期比定の材料としては不適である。3は「溝・1・2」の注記があって厳密な帰属がわからない。平瓶であろうか、焼成不良で灰黄色～白色となる。

2号溝 (図版46、第164図)

1号溝の西に近接する幅2.6mの遺構を2号溝としたが、発掘の結果段が生じ、土層を確認して2条の溝が重複していることがわかった。東側の溝 (2号E溝) は幅0.8m、深さ0.3mの小溝で、ほぼ一様に茶褐色土が堆積していた。西側の溝 (2号W溝) は2号E溝に切られる幅2m余、深さ0.6mほどの溝である。これらはV-4区3号溝と同一である。

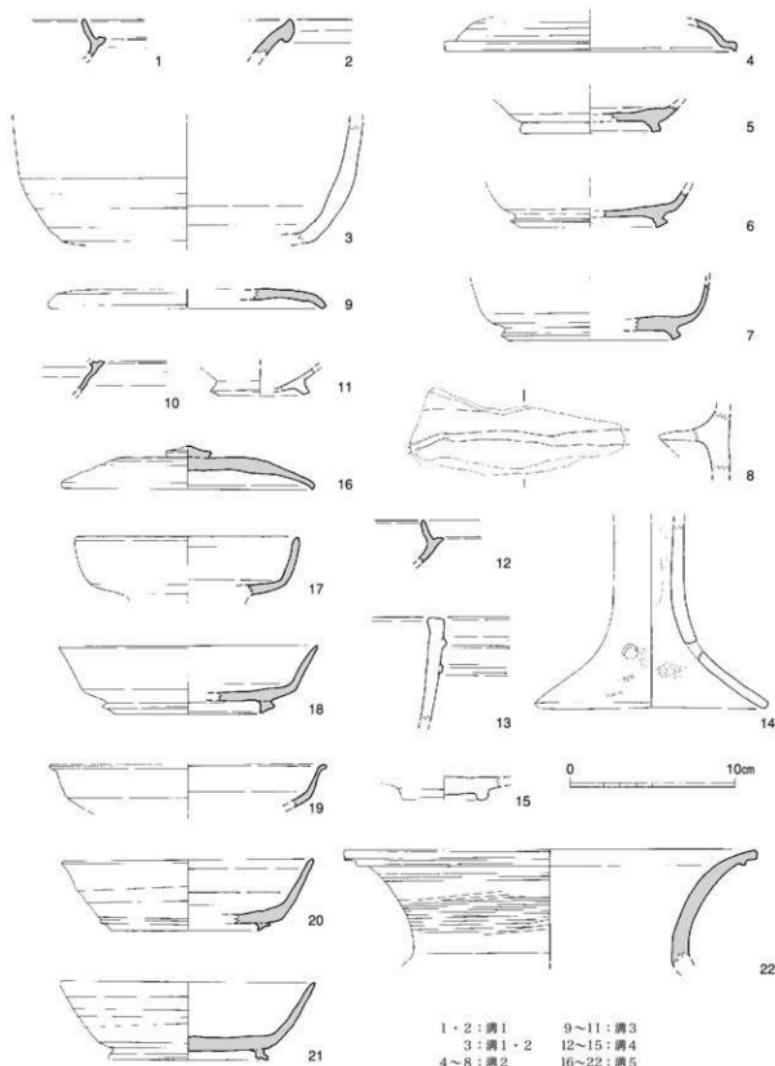
出土遺物

土器 (第165図4～8) 4～7は須恵器。4は口縁部を断面三角形とし、天井部が高くなる1/3の残片。5～7は高台付杯で、それぞれ高台が外方に踏ん張る形となるが、番号の順にその度合いが強く、かつ位置が底部外縁から内側による。

8は土師質の移動式カマドと思われる。鉄状の突帯が図左側で若干低くなっている。焼けて全体に赤くなる。

3号溝

7号住居跡の北西部を横切る1m弱の溝で、深さは北端の深さは数cm (標高10.3m)、南端2号掘立柱建物跡付近では深さ0.3m (同9.9m) ほどとなる。南端では5号溝に切られるように認識して発掘したが、3号溝は3号埋甕を壊していたので中世の遺構と思われる。



第165図 1～5号溝出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

土器（第165図9～11）9は須恵器の蓋と思われる小片。灰を被る天井部が扁平となり、口縁部は軽く曲げるだけで端部に変化を加えていない。10は蓋杯の小片。立ち上がりの端部を欠く。11は土師器碗で、しっかりした高台が外方に踏ん張る。

4号溝（第164図）

3号溝の西側をほぼ並走する。北端は現道に沿って6号溝とした溝状遺構と重複、両者が同一の遺構であるか否かは把握できていないが、検出時は一連の遺構と見えた。

これも発掘するうちに床に段が生じたため、改めて土層を観察して新旧2条の溝であることが確認できた。

出土遺物

鉄滓（第170図8～12）8は上面に凹部が多く、下面是全体に凸型となる。104.0gで重量感がある。9・10は表面が比較的滑らかとなる小片で、それぞれ12.3g、12.9gである。11は鉄滓として図示したが、重量感があり磁石に反応することからあるいは鉄塊とすべきかも知れない。27.4gを測る。12は全体に赤錆が覆うが、小さな破面に気泡が見える。40.7gである。

土器（第165図12～15）12は須恵器杯身小片。13は土師質の鉢で、器肉は灰赤色、器表は灰褐色であるが口縁部付近の内面は真っ赤となる。口縁部下外面に突帯で区画した文様帶があつて花弁をスタンプする。15は青磁碗で、青緑色の透明釉を掛けた。見込中央付近及び高台内が露胎となる。疊付は多くの部分に釉が掛かっている。

5号溝（図版46、第164図）

2号掘立柱の南東端の柱穴を確認するために拡張した部分で検出した溝で、位置や埋土の状態、出土土器から見てから2号W溝と同一と考えている。現状で斜面となっていた部分を掘り下げたために、厳密な遺構検出を行っておらず、混入があるかも知れない。

出土遺物

石製品（図版57、第167図14）滑石製品で、小孔を穿ったつまみを付す。類品は石鍋の鉗を利用するものが多いが、図背面の曲面の状況から推して、これが石鍋の再加工品であるとしたらかなり肉厚の製品であったと思われるし、この種の遺物は通常中世のものであつて、この溝に伴うものではないかも知れない。

土器（図版57、第165図16～22）いずれも須恵器である。16・18は2号掘立柱建物跡の柱列を確認するために拡張した部分からの出土であるが、5号溝の位置にあたるのでここに加えた。16は天井部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部にさほどの変化を加えない杯蓋小片。17～19は腰折れとなる杯身であるが、17は屈曲部が丸みをもつ。18はシャープに作られていて、器高が低い。19は肉薄で、口端部をさらに小さく外折させる。20は1/2が残存。高台の位置が中心からずれていて、形状も不整といってよい。21は小振りな高台に変化を加える。22は甕口縁部片で、1/4が残存。内面に灰を被る。

6. その他の出土遺物

第172図17は4号住居跡を想定した位置の北西にある柱穴P712出土の砂岩製砥石。図上面・背面が非常によく使用されている。

7. 小 結

擾乱や中世の溝によって住居跡などの破壊が甚だしい調査区であった。調査区南西は大きく湾入する崖地となっていて、かつては溜池があったということだが、2号掘立柱建物跡や一部不確かな遺構も含むが1～6号竪穴住居跡などが段落ちの縁に位置することから、ここも本来は緩斜面となっていたものであろう。溜池は丘陵の一部を切り取って構築されたものと思われるが、機械化する以前の造作であればその土木量は相当なものであったと思われる。

この調査区で特筆すべきは大型の2号掘立柱建物跡と8世紀代の土器を出土した5号溝である。

2号掘立柱建物跡は1×2間、柱掘形が一辺2m近い方形の巨大なものであったが、柱痕や抜跡は見つからなかった。しかし柱掘形が整然と配置されていることから建物跡として間違いないと思われ、その場合は弥生時代の遺構と同様に物見櫓的な高い建物が想定できる。5号溝に切られることから8世紀以前のものである。通常、1×2軒の建物跡は弥生時代によく見られる遺構であるが、ここではほぼすべての柱穴から6世紀後半の土器が出土していて、建物跡の帰属を弥生時代まで遡らせる理由はない。

また、性格については遺跡の南西の端に位置することが意味を持つものと思われる。遺跡は低地に突き出す低丘陵上にあり、北は苅田町片島の小さな独立丘陵を除けば高城山系の山麓まで湿地帯が続き、東は周防灘の入り江である。南は長狭川・井尻川の氾濫原が広がり、東九州自動車道の路線内で延永ヤヨミ園遺跡の南側で隣接する遺跡は2km以上離れた宝山小出遺跡であった。西は遺跡ののる丘陵が続いている、集落も広がっていたことであろう。ただ、南西方向は古墳後期の行橋平野の首長墳が集中するみやこ町勝山地区へ連なっていて、最も重要な方角といえよう。

5号溝は8世紀代に埋没した遺構であるが、この部分は後世に削平されていて全体はわからない。これと一連と思われる2号W溝は幅2m余り、深さは現状で0.7mほどである。床面の標高は市道南の土層図作成地点で9.7m、5号溝土層図作成地点で9.4mとなる。V-4区南端での7号溝(=V-5区1号溝)底の標高は9.99mであり、溝底の勾配は1号溝北辺とは逆になっている。これらが一連の溝である場合は、1号溝北西端の天水は東辺を南下して5号溝西端で吐水することとなる。水の処理としてはV-4区1号溝北辺・5号溝とともに西側へ吐水する方法が上策であると思われるが、いかがなものであろうか。これらの溝が相互にどういう関係にあるか、他の調査区の報告や今後の周辺部での調査を待ちたい。

埋甕が3基集中していたが、内容物に特異なものはなく意味は不明である。この甕の帰属時期については1号埋甕に供伴した青磁碗が参考になる。出土状態の詳細が不明な小片であるとはいえ、遺跡全体から見て中世の遺物が希薄であることから一定の信頼性はおけるものと考えている。これは釘影蓮弁をもつ龍泉窯系青磁碗で、14世紀代に比定されているようである。中世後期には丘陵上で縦横に溝が掘削されていて、それらと関連があるものと思われる。